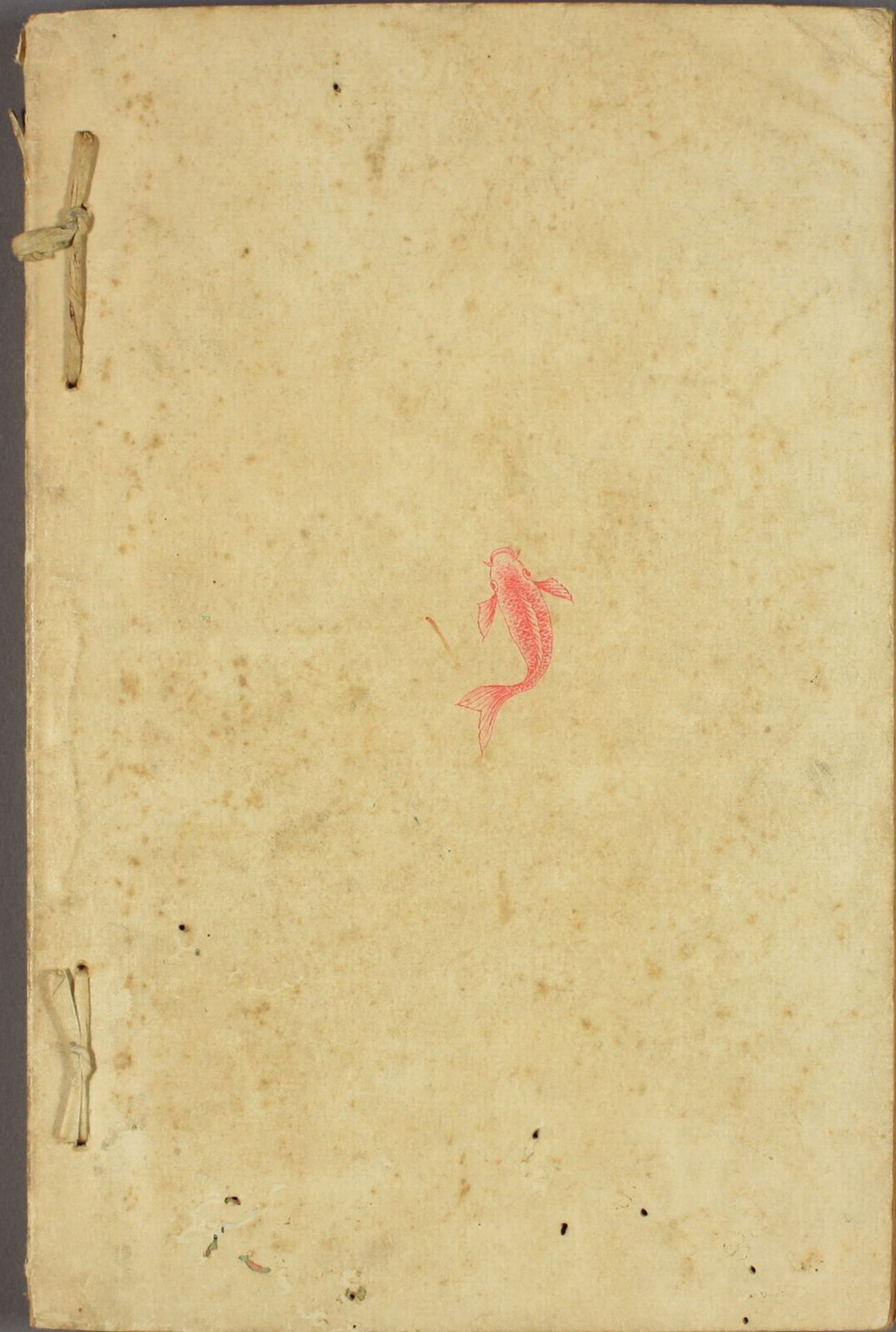


逆風張帆

井中菴花書







逆風張帆

東京 興雲閣發行

引

人生順風に帆をあげて水手鼻謠で世海
を乗りきるは例外にして珍らし。大凡は
逆風に向はざるを得ず。渡世の面白味亦
是に在る歟。歳を數ふればはや雙手の指
となりぬ、當時忘本走外の風潮に逆て解
纜し、世教の梶を執りて今の盛域に航着
きぬる彼の明治會の爲め同人輩が其叢

誌にもものせしを、會の許を得て抜き集め、
新きをも加へしは此書也。いはゞ新航路
の先手ぞかし。夫れを其儘表題として斯
く。

興雲閣にて

明治卅一年三月吉日

未 孩 居 士

目 次

精神の修養……………	自 笑……………	一 頁
韓 松……………	丸山正彦……………	十三 頁
神童國……………	白 面 生……………	十七 頁
江の島の一夜……………	大町桂月……………	廿三 頁
愛國心與四海同胞主義之關係……………	雨森未孩……………	廿七 頁
仰天一笑……………	秋月鏡川……………	四十 頁
憐れなる少女の物語……………	小中村義象……………	四十一 頁
環象を論ず……………	千頭清臣……………	八十 頁

孝女白菊の歌	落合直文	百〇九頁
柿本人麿	大町桂月	百三十頁
兎狩	雨森未孩	百四十五頁
政治界の動力と反動力	雨森未孩	百五十四頁
墨染櫻	武島羽衣	百七十六頁
北米合衆國獨立史を讀む	佐々醒雪	百八十六頁
劍知録	秋月鏡川	百九十六頁

逆風張帆

精神の修養

功。夫。不。是。透。得。這。箇。真。機。如。何。得。他。充。實。光。輝。若。能。透。得。時。不。由。爾。聰。明。知。解。接。得。來。上。
 須。胸。中。渣。滓。渾。化。不。使。有。毫。髮。沾。滯。始。得。是。は、王。守。仁。傳。習。錄。中。の。語。な。り。仁。嘗。て。
 九。華。に。遊。び。歸。り。て、室。を。陽。明。洞。中。に。築。き、學。ぶ。數。年。に。し。て、得。る。所。な。し。龍。場。
 に。謫。せ。ら。る。に。及。び。て、窮。荒。書。な。く。日。に。舊。聞。を。釋。ね、一。日。釋。然。と。し。て。悟。る。所。あ。
 り、格。物。致。知。は。當。さ。に。自。ら。諸。を。心。に。求。む。べ。く、諸。を。事。物。に。求。む。べ。か。ら。ざ。る。な。り。
 と。即。ち。喟。然。と。し。て。曰。ふ。道。是。に。在。り。と。終。に。良。知。の。學。を。唱。ふ、思。ふ。に。彼。が。精。靈。
 と。稱。し、真。機。と。稱。す。る。も。の、是。精。神。の。修。養。を。意。味。す。る。も。の。に。非。ず。し。て、何。ん。ぞ。
 や。吾。人。か。窈。か。に。彼。に。於。て、多。し。と。す。る。所。の。も。の、こ。い。に。あ。り。
 紅。燈。煌。々。と。し。て、晝。の。如。く、綠。酒。混。々。と。し。て、泉。の。如。く、坐。し。て。笑。ひ。歌。ふ。も。の、
 起。つ。て。躍。り。舞。ふ。も。の、そ。の。步。武。は。蹠。跣。た。り、そ。の。意。氣。は。揚。々。た。り、忽。爾。背。後。千。仞。
 の。斷。崖、峨。々。と。し。て。峙。ち、怪。雲。其。の。半。を。蔽。ひ、猛。獸。の。叫。び、魔。神。の。喚。び、山。彦。

逆風張帆

と相應へ、倏乎脚底萬里の蒼波、湧き來りて、轟然白山を崩し、龍頭岩に狂ひ、餘怒衣を浸す、此の際此の機、彼等は愕然として心戰き魂驚き、氣息奄々將さに、絶へむとし、冷汗淋漓眼に入り、疼痛云ふへからず、拭はんと欲して、巾を探るに巾なし、こゝに於てか視色彌々朦朧、心意轉た混迷、懊惱し煩悶し、大聲絶叫せむと欲するも喉哽れ唇乾き、輾々し反側し、漸くにして黒甜郷裡の一夢たるを知る嗟乎、滔々たる天下、夫れ夢中の人に非ざるもの果して幾千ぞ。思ふに大なる一の國家には、必ず大なる一の大精神ありて存し、此の精神の起伏、消張は直ちに、國家の治亂興敗を伴ふ、例言せば國家は、人類に於ける、體軀の如く、精神は猶腦髓の如けむ而已、體軀ありて、腦髓なけむか、人類はたゞ一の肉塊に過ぎじ、夫れ腦髓あり、心經其能を盡し、五官四支其の働きを全ふす、國家亦然り、靈活せる一の大精神なるものありて、其美其妙の個人の上に現はれ來るもの、正義至誠の看念となり、長上尊敬、鄰保扶持等の道義となり、風教治く行れ治化大に見るべし、誰か知らむや大なる人間觀は此の大精神を看破するに在るを。

我國は、天祖業を肇め賜ひ、上下の別君臣の義、既に神代に於て定まり、國体の基礎確乎、天壤無窮の神勅と共に、千古万古、また動かす、この故に、國家の大精神は、尤も強固にして、大八洲裡に充溢せり、日本魂と稱するもの即ち是なり、恭しく惟みるに列皇列聖は嘗て此の大精神の、原動力とならせ給ひ、吾人の先祖は、又其の殊澤に浴して、以て此の國家をなし、此の光榮ある歴史をなせり、宇内の廣き、東西兩洋の間に、星散碁布國をなすもの、何ぞ限らむ、然れどもよく精神の強固にして、上下の脉絡相貫通し、國体の基礎確立せるもの、我國の如きもの、果して那邊にか在らむ、されば此の精神の起伏消張が、國家の上に影響する所のもの亦、一層切なるを知るべし、嘗て藤原氏の大權を肆にし朝廷は、優々閑雅、歌舞管絃に管の根の長き日を、短しと啣ち、風俗驕奢淫逸に流れ、上部の空氣全く腐敗するに際し、皇天は日本魂の一部を割て、所謂武門武士なるものを降し玉ひ以て此の國是を維持せしめ玉ひき。是謂ふ所の武士道なるもの也、こゝに於てか彼等は、國家の、興奮劑となり、清涼劑となれり、源平兩氏を経て明治維新に至る迄、殆んど七百年の間に於ける、

我國の光輝は、尠くとも彼等に依て、發揚せられき。彼の源頼信が關東武士を率ゐて、平忠常を討ちたる如き、前九後三の兩役に於て、阿部貞任が「年を経し糸の亂れの苦しさに」と、敵の箭面に於て、優しくも唱へしが如き、源義家が勿來の關の春の暮、駒を止めて「路もせに散る」と山櫻を惜みしが如き鎌倉權五郎が、隻眼を敵に射られながらも、當の敵を討つまで、箭を抜かざりしが如き、一谷八島檀浦等の戰に於て、平敦盛が、熊谷直實に首を授けしが如き、佐藤嗣信が義經に代りて、命を隕せしが如き、源義經が弱弓を耻ぢて、敵前にて之を拾ひしが如き、平知盛が死に臨んで、從容として、卿等方さに關東男兒を見るべしと稱し、船室を掃除せしが如き、或は承久の亂に鏡月坊が「勅なれば身をば捨てき」と方外の身を以て王事に死せしが如き、弘安の變北條時宗が、胡元の衆十萬を水底の藻屑に葬りしが如き、元弘に日野資朝藤原俊基等が、緞紳の公卿にして、雄々しくも王政の復古を謀りしが如き、大楠公が後醍醐帝に答へ奉りて「正成一人未生きてありと、聞召され候は、聖運遂に開かるべし」と、金剛山の孤城に、百萬の賊軍を支へしが如き、新田義貞が、護良親王の令旨を奉じて、

高時を亡ぼせしが如き、兒島高德が、闇夜、行在所に入り、櫻樹を白して、詩を書し、天下勤王の士あるを告げ奉りしが如き、名和長年が船上山に義旗を翻へせしが如き菊地武時が博多に於て、義に殉せしが如き、小楠公をはじめ勤王名臣の子孫が南朝の正統を奉じ、久しく北朝に屈服せざりしが如き、降て永祿の頃、上杉謙信が、武田に食鹽を贈りしが如き、毛利元就が、即位の資を奉りしが如き、織田信長が皇宮を造營し奉りしが如き、豊太閤が鷄林八道を蹂躪せしめしが如き、蒲生氏郷が、會津百萬石の封を受けて、悲しみしが如き、悉く數へ、來らば、僕を、更ふる、夫れ、能は、じ、見よ、彼等は如何に優美に、如何に純潔に、如何に剛毅に、如何に豪宕に、如何に雄渾に、如何に偉大に、忠實なりしかを。世の武士道を論ずるもの、直ちに以て保元平治以來所謂武門武士の間に發露せし、一種の道義的觀念となす、抑其の根源を究めざるの論と云ふべし、吾人は史を繙くものに、我が國の大精神たる、日本魂の一部が武士道として武門武士の間に現れ來りたるを見て、所謂古道の俤を、こゝに伺ふことを得て、床かしさの念に堪ゆる能はざると同時に、更に其大なる日本魂全部の發揚を望んで已

まざる也。

徳川氏弱を開くに及びて、大に文學を奨勵し、士流の教育に力を用ひしかば、所謂武士道なるもの亦、益々發輝せられき、しかも無事は由來人類を軟化す、昇平日久しく、鞀鼓の聲起らず、刀槍鞘に収まり、弓箭囊に隠れ、大平の濃霧、江戸城を包むに當てや、士風情弱淫逸に流れ、華美風流を競ふの有様となり、武士道は繁華の中心を離れて獨り七寸の芒鞋に山河幾百里の間を、跋渉して、參勤交代せし、諸藩の間に存せり、之を聞く封建時代に於て、武門の子弟を教育するや、家庭の間尤も嚴格にして、規律整々毫も愛情の爲めに亂れず、嬰兒の漸く乳房を離るゝに及びて、父母は之に云て、曰く、汝は是れ武士の子弟なるぞ、武士は一朝事あるに臨みては、殿様の御馬前に打死せざるべからず、武士は決して虚言を吐く可らず、武士に二言なしと、而して其稍々長じて、武術を錬磨するや、隆々たる酷暑、峭岫たる寒氣素より意に介する所に非ず、短褐弊衣を纏ひ、酒味聲色を遠ざけ、若し之れに沈溺するものあれば、武士の不面目此の上やあると、儕輩の間に唾棄せられ、一人も事を共にするものなきに至れりさ

れば此等士流の間に唱へられたる俚謠の如きも、薩摩の兵兒歌、土佐の盛節の如き、主として節義を尊び、氣概を養ふものならざるはなかりき、嘉永癸丑一發の砲聲、端なく我國民を、久しき眠より呼び醒し、天下紛亂、幕吏の措置一定せず、困頓狼狽せる裡に、是等士流の間に、養成せられたる、武士は、劍に仗て立ち、覇政を顛覆して、こゝに王政復古の大業を成就せり、精神の消長、國家の治亂興敗に關する所以の者また以て見るべき也。

然り維新の大業は、所謂國侍浪人等の手を以て、成就せられたり、彼等は武士道の裡に、養成せられたる、一個の丈夫なり、更に此の丈夫に、高大なる活氣を注入して、斯くの如く躍動せしめし、巨人を見よ、遠く山崎闇齋の如き、淺見安正の如き、山縣大貳の如き、平田篤胤等の士より、近く藤田東湖吉田松蔭等の士に至る迄、其子弟を薰陶教育するに、如何に滿腹の至誠と、全幅の精神とを捧げしかを、即ち其子弟は其師とする人の心を体し、意を受けて、直ちに之を以て理想の標準となす、故に其門下に輩出する所のもの其師に類似の人物なり、見るべし、長藩の小村たる、松下村塾には、幾多の吉田松蔭を生じ、水戸

の弘道館には、幾多の藤田東湖を生じたるかを。斯の如くにして作り出したるの士は、多くは元精神的の男兒なり。盤根錯節決して屈せざるの人物也。彼等は眼中たゞ國家あるのみ、腔裡一の熱血あるのみ。嗚呼時事非にして、天地の泰は變じて否に之かんとす、彼等夫れ焉ぞ一身の毀譽褒貶を顧みるに暇あらんや、功名雲烟の如く、鼎鑊甘きこと飴の如き也、維新の業豈に夫れ偶然ならんや。若し夫れ胸中の成竹なく、強者に媚び、弱者を虐げ、其門戸を闔にし、其城郭を大にし、當面の敵を敗りて、得たりとなすもの、或は法律や制度を藉りて、以て大平を粉飾せむとする者あらむが、これは是精神なくして、機械的の人物たり、其の智は如何に敏に、其才は如何に捷なるも所謂巧なるもの益々窮す。猶培塿を以て、澎湃たる奔流を防がんとするが如く、漲溢し、潰裂し、肝胆地に塗るや必せり。試に一部の先哲叢談を繙け、編中の人物大抵骨子とする所、本領とする所のものあるを見ん、儒士にして且つ然り、天下の大事焉んぞ、片々たる才子の能くする所ならむや。

古へより英武、一世の風雲に鞭て蹶起し、倒山翻海の活劇を描き、雄を稱し覇

を成就するものを見るに、必ずや其の幕僚に、高大至誠超然として傑出せる精神的の偉人あるを要す。源頼朝の幕府を開くや、和田義盛の如きあり、武田氏の興るや、馬場信房、山縣昌景等の如きあり、豊臣氏の起るや、加藤清正、片桐且元等の如きあり、徳川氏の覇をなすや、井伊直政、大久保忠隣、酒井忠等の如きあり、彼等が毅然として動かざる所、温厚篤實なる所、天真爛漫たる所、磊々落落たる所、思ふに其主家の爲めに、九鼎大呂よりも重きをなせし者幾干ぞや。是に反して、國を亡ぼし、社稷を顛覆せるものを見るに、多くは是偉人を遠け、小人を近づけ、徳義を輕んじ、利口辨佞を重せざるもの、殆んど稀なり。かの源氏の衰ふるは、梶原景時、北條時政等を用ひしにあり、武田氏の亡ぶるは跡邊釣閑、長坂勝資等の士を用ひしにあり、豊臣氏の祀らざるは小西石田大野等の士を用ひしにあり、是必ずしも彼等愚者ならむや。彼等悉く痴漢のみならむや。たゞ彼等は理想とする所低く、私利に耽り、私慾を貪らむとし、精神の根柢を捨て、術數の末に走りたるに因る、嗚呼、これ抑々既往の事蹟として、輕忽に看過すべきものならんや。

物質的の改革は、精神的内容を攪亂するに至るは蓋し免れざるもの、如し、維新以來、泰西の文物、轟然として入り来るや、恰も餓者の糧を求むるが如く、悉く彼を用ひ、彼に従ひ、又其の利害得失の如何を、顧みるの暇なかりき、こゝに於てか、汽船鐵道電信より、其他日用の品具に至る迄、物質的文明は、顧に其面目を改めしと共に、我精神の眞粹は、國民の腦裡を離れむとし、國体の尊嚴を忘れ、無効の大義を疎んじ、輕薄風をなし、異言世を亂り、國家の前途岌々乎として、また知るべからざるものありき。爾來世人漸く其の非を悟りて、稍舊時の如くならずと雖も、しかも朝野の間に在て、評判よき所の士は、謹嚴至誠の精神的の人にあらざる也、依然とし融通的才子たる也。正直を稱して野暮となし、篤實を嘲りて變通を知らずと云ふ、黃鐘棄擲せられて、瓦釜雷鳴す彼等は曰ふ、孔孟の教は十九世紀の事に非ず、仁義忠孝の道は當世に迂闊なり、宜しく人心の革新を圖らんには、文明的宗教に依らざる可らずと。何んぞ知らん、孔孟の教行はる時、仁義忠孝の道治きの日、天下安ぞ泰平ならざらむや。古への、人士は責任を負ふに死を以てす、今人の責任を云ふや、官職を去るを以て、

足れどなす。而して之す、猶果して、今日に行はる、や否や、覺束なきの感なき能はず、若し夫れ公平の眼を以て、之を見れば、失敗に次ぐに失敗を以てし、猶酒蛙乎として、位官に戀々たるもの、勃々たる野心措く能はず、口を責任を正すと云ふに藉て、國家の公利公益を忘れ、以て自己の口腹を肥さむとするもの、吾人は、孰れを重しとし、孰れを輕しとすべきやを知らざる也、嗚呼國家精神の衰へたる一に何んぞこゝに至るや。更に眼を轉じて我教育界を見よ、

國家教育の目的は完全なる國民を作るに在り、しかも教育の方針なるものは、嘗てその長官の交迭と共に、變遷して一定せざりき、明治廿三年今上陛下は、軫念をこゝに勞せられ、教育に關する詔勅を下し玉ひ。以て我國精神的教育の根源を定め玉へり。聖旨炳乎火を見るが如し、而して道路相傳ふらく、教育の方針は、世界主義に在りと云ふものありと、咄々何等の怪事ぞ、今の學制なるものは、恰も製造場に於て、全一の模型に依りて、一ダース幾十錢の、物品を造るが如く、性質の差其面の如く、一定せざる兒童に向て、全教室内に於て、劃一の教育を施さんとする、何んぞ其効果を見ることを得んや。兒童の教師に對するや、

文字を習ふが爲めに金銭を出して、雇ひたるものと心得ば、教員其の人も亦た、徳風以て、兒童を感化せるの力なく、朝たに修身談を説ひて、夕べに狭斜の街に大聲放歌する如きもの、何ぞ真正の教育を得て望むべけむや噫。人々もすれば曰ふ、天下の爲めに一身を犠牲に供すと、曰く國家の爲めに、生命を擲つこと弊履の如しと、新聞に雜誌に謂ふ所、悉く眞人君子ならざるはなし。嗚呼又盛んなりと云ふべし。しかも是夢中に舞ひ夢中に躍りつゝあるものど孰れぞ、忽ちにして泰山裂け、滄海溢れ、電雷交發し、風雨均しく至るの刹那、顔色榮よりも青からざるもの幾人かある。遮莫、東洋の潮流彌激にして、殺氣鬱教たり、黒雲天の一方に湧く時、眼前何の形象をか認めむ、軍艦造らざるべからず、兵備擴張せざる可らず、しかも尤も急とすべきものは、國家大精神の修養に在る也。夢みるものよ起て、醉へるもの醒めよ、毒蛇は紅の舌を吐て汝が後に在り。

(自嘆口語 鏡川筆記)



韓 松

豊太閤加藤清正公の戦功を激賞して、日本第一の剛の者なりとは汝の事なりと云へる感状を與しを見て、誰れか公の壯烈を想はざらむ。太閤が讃岐全國を與へむか、肥後の半を授けむかと問ひしに、願くは肥後を與へ賜へ、以て征明の先鋒たらむと答へしを聞きて、誰れか公の豪膽なるを驚かざらむ。一たび韓地に入るや小西行長と先を争ひ遠く會寧府に至り、遂に朝鮮の臨海順和二王子を囚へしも、能く國禮を以て優待したるを知りて、誰れか公の義勇を尙ばざらむ。感鏡道の北青浦に入るや、富嶽を望みて將士を慰む、其の山或は富士に非ずとするも、誰れか公の愛國の至情をしのばざらむ。再び韓地に入り蔚山に據るや、約諾を守りて淺野幸長を救ひ、恩讐を忘れて行長を援くるを見て、誰れか公の信義を慕はざらむ。太閤薨じて、徳川氏兵馬の權を執るや、家康藤堂高虎をして、清正を諷諭せしめけらく、汝の長き鬚髯を去り、汝の多き從兵を減じ、汝の先つ大坂に至り秀頼の起居を問ふを止めよと。清正諾はずして云へるは、今

の人は勢家に詔ひて鬚をそれど、むかし鬚の上に頬當したるときのことちよさを忘られねば、此の鬚を去りかたし。また時は泰平に似たれども、遠國のものは萬一事あらむをり、間に合はねば常に多く従兵を率ゐるも、聊分を盡さむとおもふのみ。大坂の秀頼を訪ふは太閤の舊誼深ければ、徳川の新恩厚しとて、心に忍びざるを如何にせむ。人には各々癖なきにあらねば、おのれの、癖をもゆるしたまへと辭みしを聞きて、誰れか公の大節奪ふべからざりしを稱へざらむや。江戸大坂の間を和めむとて、秀忠將軍の女を請ひ秀頼に娶しぬ。しかれども軌轢愈々烈し、事はや破れぬべく見えしかば、苦ろに驕母を諭し孤子を誘ひて、伏見に至り老孤の疑を解き、東西の和睦を計らむとするや、身を愛宕の神に任せ、事を全くせむことを祈りしとかや。さて事終に整ひて國に歸れる途すがら、咯血して身まかりしを聞きて、誰れか公の忠誠に泣かざらむや。嗚呼公の壯烈は、武士の鏡とすべく、公の義勇は丈夫の譽とすべく、公の忠誠は臣子の則とすべきなり。其の外公が力を盡し、戦功は史上を掩ふのみならず。公が心を籠めし、熊本城は西南の役に顯はれ、公か思を凝し、名古屋の雛形は今

猶遊就館に存れり。而して世人の知らぬは、公の遺愛の松。今猶公の舊邸なりし參謀本部の庭前にあること是なり。蓋し公が征韓のかへるさに携へ來て、手つから植ゑたまひしものとて。長は二丈ばかりもやあらむ。幹の廻は三四尺にも餘りぬべし。下枝はいつ枯れぬらむ。枯れたる枝を鋸りたる節は、こぶの如く残れるがいくつなるを知らず。上枝はやや黄色を帯びたるは枯るゝにはあらじかと危まる。葉は系の如く恰も五葉の松に似たり。富士の嶺の麓などにもかうやうの唐松ありて同じきやうなり。周圍は鐵の柵もて嚴しく結び廻らし、馬などを繋ぐやうにこゝろしたり豪駝師も公けの仰蒙りて心用ゐるといへば、いや榮えに榮えゆくべしとおもへど、枝は枯れ、葉は黄はむを見て安きこゝろもなく、朝な夕なのゆきがひに韓松のかたへを通りつゝ、おもひ出るまゝをかくなむ。

すめくこの光はえある韓松の

みどりの色のあにせめやも

鬼上官とみなたゝへてし藤原の

あそか手植の韓松あはれ
一つ松あはれ韓松から植の

いたき夜寒はきぬ著せましを

虎のふす野邊ゆねこして植ゑまし、

まつは雪にも障らさらなむ (松廬主人)



神童國

古人云へることあり、曰く「才翁は畏るへし、才童は畏るゝに足らず」と。又
九俚謠に云へることあり、曰く「十歳で神童、十五で才子、二十歳過ぐれば尋
常の人」と、蓋し皆な信なり。

熟ら古今の事迹に徴し、所謂ゆる神童なるものが其の一生中に於て成就する
ところの、果して如何なるかを視るに、俊才神智と稱せらるゝの間は僅かに十
四五歳以下のときに止まり、之れを越へて克く學業を大成し、以て天下有用の
人物となるものは至つて鮮なく、年紀の長づるに隨つて却つて才智の退歩を來
たし、童時の盛名は次第に減消して、老境に入るに及んでは遂に碌々庸人の中
に屈伏し、世人をして、彼れ童齡のときに在つては嘗つて神童と稱せられたる
も今日に至りては魯純の一老翁に過ぎざるのみ、と笑はしむるもの比々みな然
りとす。

昔者、漢の孔融は七歳にして當時の各賢、季膺に謁し、孔と李とは仲尼伯陽以

來の通家たるを説き以つて一坐を驚駭せしめ、其の後遂に漢の一鴻儒となりしと傳へ、又た唐の李賀は七歳にして克く詞章を屬し、時の文士たる韓愈、皇甫湜の二人嘗つて之れを訪ひたるに賀は直ちに筆を執りて高軒過の一詩を作り、後ち韓愈の推薦に由つて進士となり、大いに盛名を得たりと傳ふ。而して英國のミルの如きは三歳にして希臘學を覺へ、七歳にしてプレートーの書を読み、十二歳にして論理學を究はめ、十三歳にして經濟學に通じ、十八歳のときは既に「ウエストミンスター、レヴィュー」(雜名誌)に投書したる程にして、以て能く彼れが如き曠世の碩學となり、又た彼のマコーレーの如きは、三歳のときより斷へず書を読み、書中にいふ所を請んじて之れを人に語るを常とし、七歳にして一種の萬國史要畧の類を編輯し、八歳に及んでは廣く百科の書を涉獵し、普ねく諸般の學課に達し、其の進歩の敏なる眞に驚くべきもの有りしといへるが、遂に彼れが如き非凡の名士と成ることを得たり。然れども是等は特別のものとして數ふべく、千百の神童中僅かに指を屈するに過ぎざれば、固より之を以て一般の例とはなす可からず。或る人曰く「神童必らずしも神翁とならず」と。

蓋し亦た知言と謂ふべし。

夫れ人の學業に於けるや、幼時初じめて之れを學習し、長ずるに隨がつて益々精熟を勉め、寸を積み分を累ぬ以て其本幹を鞏固にするに非らざれば、決して世上有用の器となること能はざるなり。是を以て椶櫚の船材となるべき大木は必ず漸を以て昇進し、敢へて俄かに長大となるものにあらず。之れに反して梅の新梢の如き、一朝にして忽ち四五尺の長さに伸ぶと雖ども、以て揉れば則ち折れ、以て叩けば則ち碎け、更らに之れを使用すべきの處なし。今や神童は一生の聰明を聚めて早く之れを身外に映發し、中に蓄養するところ無きを以て、所謂ゆる速やかに熟するものは速やかに腐るの理にして、年紀を経るに隨がひ漸やく智力竭乏するに至るも、亦た何ぞ怪しむに足らん。

然り而して神童をして、學業中途に畫限せられて以て之れが大成を得ざらしむるものは、別に又大いに原由ありて存するなくんばあらず。凡そ世の稱して神童と爲すところの者吾輩これを知る、其の學術才藝必らずしも遠く萬人の卓出するあるに非らず、而かも唯だ其の年齢に比較して稍や周圍の儔輩の群を越ふ

る所ろあるより、隣里郷黨都べて之れを以て奇異非凡となし、右より左より相ひ繞ぐつて稱譽し持嘶やし、遂に之れに蒙むらしむるに神童の名を以てするものゝ如し、然るに神童の此の稱譽を得るものは直ちに自負の色を顯はし、其の學業は既に充分なりと思ひ、揚々翮々として、復た研磨砥礪以て之れを完成することを知らざるに至るを例とす。是れ蓋し神童必らずしも神翁とならざるの重なる基因ならざるを得ざるなり。嗚呼人は其の學問事業に就て、常に虧然たる所ろありて、毅然自から持するより善きはなく、區々たる小才を恃んで驕盈輕浮の念を發起するより善からざるはなし。彼の多望なる世の神童をして、相ひ率ひて恰かも苗の秀で實のらざるに類せしむるは、豈に爲めに嘆惜せざる可けん哉。願ふに此の事、小なるに似たりと雖ども、以て大に適用すべし。一箇人に於て既に然り、國家豈に亦た然らざらんや。今、夫れ我が日本は神童國なり。其の開國以來進歩の敏速なる、誰れか見て感嘆せざらん。然りと雖ども斯の好望なる神童國は、果して心にもなき他邦人の諛言に自得し、或は出鱈目なる外客一片の世辭に甘んじ、飄々子々以て自から喜び、手を舉げ目を搖か

して自から賢とする小才子となり輕薄兒となるの憂ひなきか果して彼れに摸し此れに付き、毅然自から内に養ふ所ろなくして、輒はち首を挽して之れを仰ぎ、尻を高くして之れに趨しるが如き事あらざる乎。吾輩は未だ安んじて之れを斷言するを得ざるなり。蓋し我が官民が維新以來、意を鋭くして歐米の長を取り文明の風を擬したるの効は、殆んど社會の事物を舉げて悉く其の舊を掃蕩し、その改革は獨り政府の間の制度法律に止まらずして、衣服車馬も之れが爲めに一變し、道路家屋も之れが爲めに一變し、凡百飲食器翫の末に至るまで、殆んど一として全く其の改革の餘勢を免かれたるものはあらず。其の我が日本の舊邦を一新したるものは雷だに彼の趙の武靈王が胡服して騎射を學び、若しくは露のピートル大帝が微服して列國を過ぎたるが如きのみならざるなり、されば今日にても歐米の新物は皆な其の様本を我れに備へざるは莫く、鐵道も已に設け、電信も已に架し、瓦斯も既に燒き、電氣も既に点じたり。其の外相は誠に盛んなりと謂はざるべからず、其の進運は誠に長足の進運と謂はざるべからず。然るに此の長足の進運、外相の盛は果して恃むに足るや否や。抑

も亦た聖館白壁、人目を眩すと雖ども眞に聖館白壁たらず、銀章金服世觀を飾ると雖ども、眞に銀章金服たらずして、只だ是れ一片脆薄の紙、此の五畿八道の山川を包裹したはれるものに非らざるや否や。若し夫れ斯くの如きあらば是れ吾輩の喜ぶ所にあらざるなり。庶幾はくば大日本帝國をして、彼の之れを揉れば輒はち折れ之れを叩けば輒はち碎くる梅梢の浮弱に類することなくして、亭々雲に聳ゆる楓桶の堅實を學ばしめ、以て雷だに神童國たるのみならず、又た必らず神翁國たらしめよ。

(白面)



江の嶋の一夜

さらでだに、陋屋の下、おつさ堪へがたくして、筆とることもいふのうきに、親戚の子ども二人ばかり、どまりに來り居りて、のいしりさわぎければいよく、心乱れて、日頃たまりし文債いつはたすべうもあらず、いでや、都の外の涼しき處に旅寢して、一夜のほどに、文幾篇も、ものしはたさばやとて、小石川の家をたちいでたるは、八月一日の午後四時頃なりけり。

みちすがら、池上の鑛泉にゆかばやと思ひつゞけて、新橋の停車場にいたれば、瀛笛一聲、鐵車は烟と遺憾とを残して出でゆきぬ。一時間待ちて大森への切符をど云へば、急行列車にて、大森へはよらずといふ、かさねくのしくじりに、何となく快からず、今一時間まつもつらければ、急に方向をかへて、江の島に遊ばむとて、藤澤までの切符を買ひぬ。さて、藤澤まで瀛車に乗り、藤澤より江の島まで人力車に乗る。我、江の島に遊ぶと前後三回、草行露宿、車などには、るとは絶えてなかりしに、思へば、我もいつしか紳士とやらになりけり。

夜、片瀬村を過ぎけるに、田の面に列をなして提燈を照らしつゝ、小鉦を叩く一
 群の人あり。あれは、何にぞと車夫に問へば、稲の虫を送るなりといふ、懐ひ
 起す、十七八年前、我故郷にありし頃、農夫の子にまざりて、蝗送りどて、夜、
 幾個の鉦大鼓を鳴らして田間をめぐることありしが、幾村相和し鉦鼓の聲、轟
 然として地を震はせり。かくては、虫も驚きて倒るべけれど、この片瀬村にて
 は、鉦小く、隨て其聲微にして、館賣りがたいく小鉦の音を幾個相合せたるに
 過ぎず、さても都に近き處は、虫までも、おどなきものど見えたり。
 片瀬村のはづれにて車を下る、いと闇き夜なり、車夫、提燈を手にして導をな
 す、江の島につい、く一帯の沙路、たましく潮満ち、ひろさも、深さも測るべか
 らず、衣をかき上げて渡らんとすれば、一夫後より尾し來り、負ひて渡らむと乞
 ふがまゝに、その肩車に乗りて渡る。よく見れば深さ蹕を没するばかりに
 て、水の幅は數間に過ぎず肩車より下りて、ひそかに一笑す。
 一旅店に投じけるに、夏の事とて、旅客、いと多し。殊に夜ははや九時に近け
 れば、室多くふさがりぬ。導かれて三階の一室に至れば、各室みな障子も唐紙

もあけはなして、見え渡らぬくまもなし。西の幾室には、辨天詣での善男とお
 ぼしき幾群の人あり。東の一室には、髯はやしたる男、一人の蘇小に瓜彈させ
 て、杯かたむくるさまなり。たゞ涼しき丈けは、江山のたまものなれど、かく
 雑沓しては、文思浮ぶべくもあらずとおもひて、他に室なしやと問へば、二階
 ならば、都合つけむといふ。二階にても、何處にても、靜かなる處がよきなり
 とて、われは二階の一室に下りぬ。夜十時、晩食に就き、半瓶の正宗に微酔を
 帯びて欄によりて願望するに、絃歌の聲、やうやく絶えて、人は眠に就きぬ。
 何日の月ならむ。一痕の氷魂、いつしか空にいで、江山、夜、明かなり。天
 風、山をまいて、万斛の涼味、空に満ち、遠く聞ゆる波の音、海若の嘯くが如
 く、樓に對せる島頭に相接して立てる二株の喬樹、巨人の天に鬪ふに似たり、
 快雲時に月をかすめて、一暗一明、蒼茫たる夜烟の底に、一犬風に吠え、數犬
 相和して、山谷響應す。燈火わづかに人居を表して、満目また人類の世界にあ
 らず、われ天を仰いで放吟すれば、長風餘音を傳へ、山鳴り、水涌く。我れ江
 山に合するか、江山我に合するか、心神縹渺として、われまた身の塵世にある

を知らず、嗚呼人の心のたのみ難きに似ずして、どこしへに變らぬものは、山
 と水の姿なり、われ浪遊十餘年、疎狂狷介、世と相容れず。人世、閑し來れ
 ば、まことに涙多し、浮世はうき世にて、すみ愛きの中に、た、江山ありて
 我を容る。明月我を照し、清風われを吹く、われ半夜、この自然の大觀に對し
 て、覺えず涙數行下る。

名残はつきねど、一夜明けぬれば、家にかへらざるべからず。たび／＼遊びし
 地なれば、兒が淵も天女窟も、行いて探ぐるに意なし。まして、辨才天の如き、
 佛教にも縁遠き婆羅門教徒の崇拜する神などは、拜みたくもなければ、家づと
 にどて、貝細工を求めたるばかりにて、飄然として、われは都に飛びかへりぬ。

(桂月)



愛國心與四海同胞主義之關係

愛國心は、我等に向て我國を愛護して他國と相對し權利上に於ては之に一步も
 讓ることなく、良し事あらば死を以て我國權を維持し、毫も他國をして其意
 を恣にせざらしめんことを勤め、四海同胞主義は我等に向て他國を敵視するこ
 となく之と親み之と睦みて兄弟の思ひを爲し相ひ助け相救はんことを勤む、其
 主意相反するが如し、而して我等今者の境遇は此二主義を共に實行すべき有様
 なり、依て余は今此二者は實際相反せる者なりや否を論定し且之を實行するの
 法を講せんと欲するなり

凡る天地間に生を有てる者、其働かんことを欲せば、先づ存在せざる可らず、
 而して其存在するには其受生の境遇に適せざるべからず、受生の境遇に適する
 には其境に應じて自ら護り自ら愛するの行爲なかる可らず、若し斯の如くなら
 ずんば適種生存の理法に背きて湮滅せざるを得ず、蓋し適種生存とは其境遇に
 應じて自護の行爲ある者は滅するとの謂なればなり

雨の一滴、霜の一結、晶中にも群集せる微塵虫より飛虫鳥類魚類獸類人類に至るまで、又は草木に於ても此自愛行爲なくんば須臾も安全なることなく、自ら滅し子孫を亡し終に其類を天地の間に絶つに至るなり、濕へる地には草其根を伸ばし、山嶮に生せる木の、其根巖を繞ふて傾倒を防ぎ、魚の雲蔭に潜み鳥の砲響を聞て去り、獸の食を見て進むを見れば自愛は天地の大理法なることを知る、之に順へば存し之に背けば滅す、近くは例を人身に見よ、一肢一官其能を發達せんには先づ血汗を執取して自ら養はざる可らず、自ら養ふは自ら愛するなり、若し之に反せば其肢其官は必ず衰微す、而して自ら愛し自ら養ふには其境遇に應じたる至當の運動なかる可らず、運動とは働きなり、常に腦を働かす人は腦力強く、常に歩行する人は其足健なり、是働かれば自然に血汗の供給を得、働かなくんば血汗他所に流去するを以てなり、社會に於ても此の如し、働く者は報酬を得、怠る者は食に餓死す、而して此働きは自愛より出づるなり、されば自愛は天地自然の理法なること明かなり、此身體は自愛に由りて存じ、身體健康なるが故に配耦子孫を得、配耦子孫を得て一家を愛し、家々相集りて村落

を成し、之を愛し維持して一市を成して又之を愛し、都を成せば都を愛し、郡を成せば郡を愛し、國を成して國を愛す、愛國は自愛の擴張せるなり、自愛は蠢動頑靈より草木に至るまで、魚鳥より人類に至るまで、凡そ天地に生する者の存在繁殖する所以の法なり。

扱又四海同胞主義は、國の遠近、人種の異同に拘はらず、之を愛し之を助けて相親睦し、所謂爾ち隣を愛すること已の如くせよとの主意を實行する者なれば、利他行爲の一現象なり、一滴の水一結晶の霜の中に集れる微塵虫、其體力成熟するに及んで、分離し二三四五の微塵虫と成り、芋蠅蠶の類、糸を吐き繭を作り、蝶と化して卵を産むや乃ち死し、其他鳥獸の雛子を産むに方りて幾計の苦を嘗め、其成長するに至るまでは之に餌を運び、乳汁を與へ、之を守り之を育つるを見れば、利他の行爲は物の發生と共に現はれて、之なくんば生物生長すること能はざるを知る、人に於ては最も然り、其生るゝや、羽毛なく瓜牙なく、父母之を養ふに非んば、須臾も保つこと能はず、稍長するに及びても、其境遇に處するの法、下等動物の處世法に比すれば、復雜繁劇なるが故に、父

母之に體智徳の教育を與へずば世に立つこと能はず、而して此教育養護は父母の勞働なり、利他行爲の發作なり、其他貧人に金銀を與へ、飢者に食を施し、寒さに衣を惠むも、其金錢衣食の由て來る所以を察すれば、皆な惠者の勞働に出でざるは莫し、此身體の生存するには肢官臟腑筋骨相助けざる可らず、此身ありて家族あり、一家存在するには、親は子を養育し、子長し親老するに及んでは、子親を養ひ之に仕事せざる可らず、蠢動頑靈より人類に至るまで此繁殖繼續の法は一なり、曰く、己を損して他に益す、一村を成しては家々相助け、一郡を成しては町村相救ひ、一國を成しては郡縣相親み、國々相愛し相濟ふに非んば世界の平和を保つ能はず、故に知る利他は生物の棲息繁殖するの自然法なることを。

以上の所論によりて自利利他の兩義即ち愛國心と四海同胞主義の兩性質を知れり、今者其相關相働の模様を述べん。

無機有機に拘らず、凡そ此天地間に在りと有ゆる者は全体と分子の釣合ひ其當を得るによりて存在繼續し、之を得ずば亡ぶ、萬有の形体は元素の混合より成る、元素混合するには先づ元素存在せざる可らず、存在するには適恰の運動無なる可らず、此運動ありて元素各々關係の働きを爲し、而して萬有の形体を保つことなり、故に萬有の形体は元素社會の契約より成り立つと云ふも可なり、形体既に元素より成立てば此形体と他形体と關係生ず、此關係を保つには各形体先づ存在せざる可らず、存在するには自愛の動作なかる可らず、自愛動作ありて形体存在し、而して後ち利他動作を爲して相關の釣合ひを保つことなり、之を近く人身より例を擧て證せん、人身最初の成立には先づ炭素、水素、窒素、

素、種々の元素の混合無かる可らず、此混合を爲すには元素各適境の存在を保ちて互に相關の運動無かる可らず、要するに元素各存在を得て相關の契約を履行せざるを得ず、即ち自利利他の動作を要することなり、

元素混合によりて筋骨臟腑肢官爪毛各其體を得たる以上は又此等の部分に於て相關の動作生ず、即ち申合契約成立するなり、此契約を履行するには先づ各部分自愛の動作を起して一部分たるの體面を保持するを要す、之れなくんば、約束履行の能力を失ふて衰微せざるを得ず、之を履行するの度に隨ふて其報酬を

受くることなり、報酬費用に充たざれば衰へ瘦せ、報費相均しき時は舊來之形容を保ち、報費に超る時は肥ゆることなり、常に手を用ふる人は手の働き多きが故に血汁多く之に注ぎ來りて其費用を償ふ、之れ手の報酬なり、此報酬費用を償ふに足ざる時は手疲勞す、疲勞久しきに續く時は手弱りて用ふ可らざるに至る、報酬費用に超ると久しければ手は筋肉逞しくなりて益々健強なり、健強なるが故に益働きて他の部分を助け、之を助くると多きが故に報酬隨て多し、是れ手の動作中自利利他の行爲相助けて自己の安全健康を保ち、併せて全体の健康を助け持つ所以なり、自餘の部分も亦復是の如し、人身中の部分相關の釣合も亦自利利他共行の動作に由ると斯の如し、

人身既に成立するを得ば、人身と人身の間に相關の動作起る、即ち人と人との關係生ずるなり、即ち社會の關係生ずるなり、而して此社會上の行爲には家族、村、町、都、郡、縣、國、世界、等の境界の階級あり、然れども其部分相關の釣合ひの法に至りては元素、肢體、等の釣合法と異なるとなき也、
夫は婦を愛し、婦は夫を愛し、兩個相親睦和合を爲すにも先づ兩個各々自身の

健康を保ち、境遇に應じたる自存の法を守らざる可らず、夫は婦を愛して之れが爲に働く、されど働き度に過ぎ、身に害あるをも冒して爲すに於ては、或は病氣を來たし、又は災害を招きて、婦を養ふ能はざる而已ならず、反て其愛する婦をして非常の辛酸を嘗めしめ、終に活計上離婚を要する場合に到るか、身死して婦を路頭に迷はしむるか、又は婦をも死に至らしむる等の場合に立到らん、婦の爲めに働くすら其度自愛の法を破るに至る時は猶且然り、況んや、夫たるの働きを怠りて自棄の行爲ある者をや、婦たる者も亦然り、自愛の法を犯して身、病魔の配下に入る時は其夫をして苦しましむると幾何ぞや、

諺に云ふ、子を思ふ親心と、親となりては子は愛らしき者はあらじ、されど親、自愛の法を犯す時は第一、子をして微弱なる身體を受けしめ、第二、教育全きを得ず、子に艱難辛苦を與へて生存競争に不適當ならしめ、遂に此世を苦中に終らしめん、又子たる者生長して親を養ふ時に至りても是の如し、自愛の法を犯せば身、災害疾病に陥りて親を苦しましむ、自愛の貴重なると是の如し、而して又自愛度を過ぎて利他を忘る、時は夫婦相助けず父子相救はずして家族

離別し、一家の保存立ろに破れん、されば自利利他行爲の關係釣合は家族に於ても須臾も乱り離る可らざるなり、
村、町、郡、縣と境界廣まりても此釣合は一なり、例を經濟上より擧て此理を示さん、往古の時、一家族自ら耕し自ら織り自ら家屋を建てたる時は、自愛の法専ら行はれたるは論を俟たず、自愛なくんば家族成立せざるなり、此時に當り利他の法は行はれざるかと云ふに、然らず、暗に行はれ居るなり、利他なくんば一家内の和合せざるは勿論、家族と家族、相犯すことなく、相奪ふことなく、相亡すとなきに非んば、衆家族の同時に存在するを得ず、要するに無犯の他利、即ち消極徳義となりたる利他の法行はれたるなり、若し此法を犯す者ある時は各家族皆自愛の法によりて之を防ぎ時としては同氣相應じ衆家族聯合して自利利他相合し共に一味して此犯罪者を攻め其犯罪を罰したり、社會進化して村落を成し町を成し郡を成すに至りては、勞力の分擔法行はれ、農工商の職業分れ、有無相通し、餘欠相補ふ有様とは成れり、此境遇に在りて農は先づ自ら喰ふ處の穀物を産出し而して他の需要に供すべき餘分を産出せざる可らず、工の建築製

造物に於ても亦然り、斯く有無相通する間に立ちて商は物の集合配分を業とし自家の生計を立つ、是れ自愛に由りて利他の行爲を作し、利他乃ち自愛を遂ぐるの道たるなり、自愛に由りて一家立たずば如何ぞ職業を營むを得んや、職業を營みて他に便利を與ふるは即ち自家獨立するの道なり、人身の肢体先づ完全なを得て而して相助け、相助けて以て各完全を保つが如し、一人働けば其報酬を得、報費に均しき時は出入の差引なく、費を償ふに足らざる時は貧窮となり、費を償ふて餘りある時は富む、一職業の起るには先づ自持の法なかる可らず、業盛んなれば利益多し、利益多き時は資本之に注ぎ集りて其職業の區域を廣む、區域の廣まると度に過ぎて供給需要に超え、物品の額は多きに過ぎ、資本は他職業に減じて購求力の衰ふる時は、報費を償はずして、損失となる、損失となる時は資本他に移りて其職業衰ふ、衰ふが故に營む者なし、營む者なき時は跡を絶つに至る、是れ恰も人身の肢官臟腑各働きて或は血汗を引きて肥へ或は働かず瘦せて用を爲さず、用を爲さざるが故に成長せず、人の尾骨、男の子宮の如く、有れども無きが如くなるに均し、

自利ありて利他行へれ、利他行はれて自利全きを得るは蓋し斯の如し、元素、分子、肢体、社會、を貫きて之を支配するの理法は一なり、此天地ありて此組織ある間は未來永劫に至る迄此生存上の眞理は抜く可らざるなり、社會進化して國てふ者現出するに至りては又國と國との相關の動作生ぜざるを得ず、此動作の鈞合を保つには冥々の中に申合契約成立す、之を自然の萬國公法と云ふ、之に合すれば國盛んに之に反すれば衰ふ、而して此動作を爲し此法を守るには、先づ其國獨立して一ヶ國の權利地位を占有すべきなり、之れなくんば縱ひ全体他國に属せすとも幾分か他國の支配下に踏落されて屬國の体裁を有せざるを得ず、夫れ四海同胞主義の最も行はるゝは貿易上なり、されども唯此主義に壓倒されなば、外國人恣に内國の財政に立入り財源は外國に占有せられて常に外人の命惟れ願ふて彼等に奴隸とされ一國の体裁を有する能はざるは勿論此主義専らとなりて自愛主義の隠るゝに至らば各國自國ヲ守らず、唯他國の爲筋のみを計るが故に、境遇人種に恰適せる行爲なく、隨て衰頽し、所謂共潰れなる有様に到至るべきなり、之を救ふは自愛主義なりとす、さりとして諸國各々此主義

を極點に唱へ、愛國心を誤用して唯其版圖を廣めんとを計らば世界の安寧一日も保たざるは勿論、諸國各々保護稅説を主張し、土地不適當なるにも拘はらず、徒に外國品を自國にて製造せんと計らば、資本空しく費して勞力徒らに疲れ、隨て全体の衰微を來して是れ亦所謂共潰れと成らんのみ、貿易には版圖なしとまで云ふ場合に於てすら猶且是の如し、况んや其他の關係に於てをや、愛國心と四海同胞主義の關係は其概略所説の如し、相反して相助け相調和して世界の命脈を保つなり、されど前の數例に於て見る如く、此調和を保つ動作の中に先づ第一に爲すべきは自存自愛の動作なり、國に取りては之を愛國心と云ふ、之なくんば國亡ぶ、國亡べば如何してか、同胞の親交を結ぶを得んや、四海同胞の主義を擴充せんと欲せば先づ愛國より始めよ、其主義を續繼せんと欲せば愛國心を養成せよ、如何に同胞なればとて常に其助力を仰ぐは人たる者の耻なり、夫れ丈け幸福の全額を減するなり、同胞の愛を全うせんと欲せば先づ自立を計れ、自立自存の法を得れば他を愛し他に親しむと自由なる可し、各國無事親睦の場合に於てすら、自立自愛の必要なるや是の如し、况んや生存競争

の盛なる今日に於てをや、

一國獨立の体裁を全うし、無事の時には諸國と平和の交際を爲し、事あるに及んでは之を防ぎ之を討ちて厘毫も我が權利を犯さしむ可らず、是れ自ら國を愛し且つ彼をして公議を知らしめ、公法に順はしむる道なり、義を知らしめ法に順はしむるは同胞の愛を全うするなり、我れ彼れに世界の安寧を保つるの道を教ふるなり、

以上は諸國生存の道理なり、愛國の急且大なる務たる所以なり、今者之に伴ふ幸福を見よ、家に一人の病者あれば全家皆憂ふ、此者家主たらんには全家辛苦を嘗む、一肢痛めは全躰苦しむ、交際の上に於ても病者に接すれば樂しみ減じ、快活健康の人に接すれば樂み増すなり、全家健康なれば自愛他愛共に行はれ、譬へば樂園の春の如し、萬國安全なれば權利互に行はれ、貿易盛んに、有無相通じ、資本益殖え、國豊かに徳敦くして天國の樂事に均し、而して之に達するの道は愛國なり、此愛國なる者にも亦樂しみあり、シセロ曰く、

我等の兩親は可愛し、我等の子供親類及び朋友も可愛し、されども是等の親

愛は皆合して我等が國を思うの念思中に含まれたり、國を利せんが爲めには孰れか命を棄ざりける」云 (CICERO, DE OFFICII I, 17, 57)

我等が國とは即ち我等が所愛の總稱なり、此愛す可き者を愛して自然に人世生存の理法に合ふも亦幸福の一ならずや、歐州の詩祖ホーメル曰く

最上の吉兆は自國の爲めに戦ふなり」云 (HOMER, ILLAD, 12, 213)

言は自國危急の秋には吉兆を俟たずして先づ戦へ、此戦ふ勇氣あるこそ最上の吉兆なれとなり、自國とは我等所愛の總稱なり、此所愛を守護して我等が愛慾を全しつゝ、世界平和の理法に合ひ且つ外國をして、此理法を知らしめ、彼れを懲し教へ導きて平和安寧の域に至らしむるも樂事ならずや、此義務と幸福の同伴は天然の理法にして萬有生存の原則なり、されば國の先覺者たる者は、其中衆生悉是吾子の觀念を懷き、自ら國を愛し又人をして之を愛せしめ、國を守り國を維持して外國を懲戒教導し以て人生の最幸福の域に至るの路に登る可し、是れ其最大要務最大樂事なり、

(本段)

仰天一笑

目も遙かなる淺茅原、駒を止めて佇めば、無常の涙葉末の濃に、鳴くや虫の音いと滋く、風雲千年殘礎土に埋れ、青苔斷碑を鎖して、當年の霸業知るに由なし、人間の富貴よく幾時ぞ。死して一片の白骨となる時、英雄か、佳人か、聖賢か凡夫か、何人かよく之を甄別せむ。是とするもの果して是が、非とするもの果して非か。紛々たる毀譽終に知らず、我は我玲瓏の玉を磨し、不磨の氣を呵し是と信ずる所をなし、非と信ずる所を斥け、君國の爲めに笑ひ君國の爲めに泣き、民人の爲めに喜び民人の爲めに憂へむ、去て白沙青松の下仰で一笑すれば蒼々たる澄色天水の如く、洋々たる滄溟水天の如し。

(鏡川)



憐れなる少女の物語

其一

鶏の八聲に、床を離れては、母の病をいたはりやがて、山路に分け入りて時にあへる、花の枝、さては、柳など、切り取りつゝ、市にひさぎて、心ほろく、ろの日をおくる、少女ありけり。はじめのほどは、市人も、心もとめざりしが、やうく、月日を重ねるまに、少女ながら、よくも勤むるものかな、さるにても、衣服などの卑しきに似ず、人からのやさしさよ、いかなる人の、娘ならんぞ、心あるものは疑ひおもへり。

ある日の事なりき。例のことく、花うるとて、來りけるに、市人等、打つどひて、汝か家は、いつくにて、いかなる人の、娘なるかと問ふ。少女は、たゞ打わらへるのみにて、何のいらへもせず。強て問へば、聞き給とも、何のかひかはある、妾は、いやしき、山賤の女にも侍るものをと、のみいふ。かゝること、度かさなりければ、はては、口さがなき者どもは、愚なる少女にてもあるかな。

頑な女など字して、笑ふものさへありけり。

明治廿二年、二月十一日の朝なりき。けふは、御國の、大典を、しかせたまふ日なれば、都も、鄙も、大君の八千代を祝はざる者なし。少女も、いかで、しるしばかりの、神酒をだに捧げ奉らばやと、神柵に、花などさしたて、母もろどもに、都のかたを、拜みまつり。晝過るころより、里人のいはふさまをも見むとて、母の手をとりて、市さまへと、出て行くに、其賑へるさま、いはむかたなく、我身の、はかなさ、さへ、忘れられて、見ぬたり。兎角あるほどに、馬や馬やと、人くづれして、立騒ぐを、何事にかと、見んとする間もなく、謳せ來る馬の足おど、いと鋭く、少女はいたく胸を蹴られて、打斃れぬ。人は山なして打つとへり。母はおどろきて。立いすいぐ。やかて息もせきあへず、驅せ來しは、胸のあたりいと、さら、かに、太刀の緒短く、結ひたる陸軍士官にして、あやまりて、馬躍りこの悲境をつくりし人なりけり。

士官は、一禮して、斃れたる少女をいたはり、すかせと、息もたえぐにて、せむやうなし。見る人皆泣きかなしむ。まして、傍にありあふ、母の心いかにかりなりけむ。士官は、車もとめて、母と子とを、抱き乗せ、とある家に、誘ひ行きぬ。醫師をゆして、藥なと服せしめしに、少女もやうく息つきて、はじめて、ありしやうを知りて、泣きいでぬ。つくぐと打見るに、母も子も、其さまころ、いやしけれ。共に、品高く、いと優なるは、鄙のをとめらに似るべくもあらず。さるべき家の人なめり。悔しき事してけりと、士官はあまた、び、額にしわをよせて、わびにわぶ。日も夕ぐれになりぬ。市の賑ひも静まりぬ。少女は士官の懇なるいたはりど、醫師の親切なる療法とによりて、人心つきて、今は物いふことも自由になりぬ。

すさまじくこよひは明ぬ。つとめて、士官は、辭を卑くして、おのれはもと、肥後の國のものにて、當所の鎮臺をつとむる、櫻田義夫と申すものにて候が、過ちし罪は、さり所なく。いかなる報をも、なし申すべければ、御名のらせたまはれかしと、鹿自もの、膝をりふせて、あまた、びいふに、母子二人は、憤らしく、又悲しきものから熊本とさくなつかしさに、涙をおしぬぐひて。おのれ二人も、さ仰せらるゝ、熊本のものにて柳河某と申すものにて、侍るか、

去し年よりこの大坂の片田舎に世をおくるものに侍るといひて、さめぐと泣き出ぬ。士官は、聊たよりを得たる心ちして、先つころより、さこそはおしはかりたまへれど、承りて胸おちぬ。さるにても、いかなる故ありて、此地には来たまひしぞ。事の序に、かたりきかせたまへといふ。二人は、いどかなしく、何のいらへもせず、また泣きふしぬ。士官は、語を改めて。御家には、兄弟もおはすらん。待ちたまふ人もあるへし。病もや、怠りたまふやうなり。いざおくりまつらん。御住居の所、かたられよといふ。母子も今はつこみあへす。妾等は、別に待つ人も侍らず。たゞ二人にて、あかしくらすのみ。家といふへきものも持たず。たゞ露をしのぐ假りの宿のあるのみ。士官は、いよ／＼不審におもひ、この事ども承はらんといふ。母子は、その詞の眞あるに感じ、さらば、これより、ことの始終を、きかせ申すべしと、少女は、やがて、打ちる髪をかい撫でつゝ、眉目など、おし拭ひて、母にかはりて語り出けらく、妾はもと、熊本の士族、柳河春蔭の娘、芳子と申し侍るものなり。思ひ出つるも、いとおろろし。去にし明治十年のはしめつかた、鹿兒島の西郷殿、兵をおこして。わ

が熊本へと押しよせしに、かねて契りたまひしことやありけむ、父君には、御年は五十に近くおはせども、いとわか／＼しく打よそはれ、大太刀を佩き、小袴を穿ち、葦山笠とかいふものを被り、スナイトルを肩にし、君の御爲にとて、暫し軍たちする事ぞ、かへり來んほどは、家を守りてをあれ。娘どもを、能く生し立て、あしき道にな蹈み迷ひさせど。など、母君にいひおきたまひ、やがて馬に打跨り、から／＼と打わらひて

おひしける醜のしこ草かりはらひ

道ある御代となさてやむへき

また鞭をふり上げて、

すみだ川つゝみのさくらちらぬまに

君かみさどに入らんどうおもふ

と、健びにたけびて熊本隊の一人として田原口へと打向はれぬ時のさま、今猶見るか如くになん侍る。鹿兒島の兵の、未だ熊本に來らざるに、音に聞えし、天守櫓も、焼け亡せ。市中は、炎におほはれて、老若男女、遁けまどふさま、目も

あてられざる事なりき。かくて父君の出立たまひしほどもなく。筒の音矢叫びのこゑは、天地もどいろくばかりにて。年ごとに待れつる、鶯の聲もこの春のみは、よその空にもがなど。おもひき。けふは、某殿の討れたまひ、何がしぬしの、傷きたまひしと聞く、心の中、いふばかりなく、母君は、胸塞りて、たい軍の、運のよからんことをのみ、神かけ祈りたまふより、外の事なかりき。三月初のころなりけり。妾等は白川といふ川の東なる、さ、けき家に籠り居りしが。夜中過る頃とおぼしきに、火事よ火事よと慄ぐに、驚きみれば、四面、皆、ほのほに、おほはれて、人かげも見えず、烟かくれに、ひらめくは、刀の光りのみなり、いざ事こそ起りにけれ、軍敗れぬ、とおもへば、妾は母君に負はれ、姉菊子はるの手をとられ、吾君助けたまへと、やうくにして、遁れ來りしが、跡にて聞けば、城兵、とみに出て來て、あまたの家ども、焼うちして、兵糧を奪はんとて、死物狂ひに猛りしなりけり。かゝる事も、屢々にして、今に膚さへ寒う覺え侍る。

城西なる。高橋と云處は、舟の泊る處とて、いと便よかりければ、妾等は、此地なる、知る人の許にありしが、味兵の勢ひ、日々に強く、敵兵はやうくに挫けぬ、と聞く嬉しさに、心はかりの、祝ひせばやとて、折しも、四月の中旬頃なれば、時しりかほに、咲き出てたる桃の枝を、床の上に、さしかざし、雛遊びの事、してんと、姉の菊子と諸共に、酒買ひ求め、餅つきてん、など、心しらひ、しつゝ、ありしに、矢叫びの聲、俄に近う聞え、大筒の響は、耳を撃ぐばかりなるに、戦きあはて立出で見るに、川尻口の防ぎ、破れたりいふ、いふ、人立ち騒ぐ。姉君は、齒を切り、男に生れざりしとの悔さよ。味方の、軍敗れなば、父君の生死も、いと覺束なし。見るく、此處を遁れて、山村に隠れ居たらんとて、何のかひかはある。いでく、父君の御供仕らんと、刀オツ取り。出で行かんとし給ふを、母君泣くく論して、懸て此處を立のき北邊へさして、行くに、はやう、田原、木留の圍みも破れて、敵兵は、城下に入り込みぬ。あはれ、いかにせん。父君は、何處におはすらんと、妾等三人は、手に手を執り、辛じて、敵兵の見張りする中を、かけぬけつゝ、味方の軍に追いつかやばど、あえきく、城の北なる京町といふところに至りし時、不幸にも咎めら

れて、寺めく處に誘はれけり。今夜は、こゝに止まれど、いと厳しく、命せられたり。敵の眼のおそろしかりしは、鷹の雀をねらへるが如く、蛇の蛙を追ふ時の如く、今に忘れられずぞ侍る、姉君は先に死なざりしことをかへすべく、ちおしうのたまひて、涙はらくくとおどしたまふ。傍に居たまひし、母君の御心いかばかりなりけん。

其二

翌朝、妾等三人を、召し出して、父君の家を立出られし時の事など、委しく問ひきく。蔽ふべきことにもあらねば、具に答ふ。審問官の一人が、いへらく。汝等賊の家族、男ならば、罪にも行ふべきを、女なれば免すべし。けふより心を改めて、我等につかへ奉れ。さらば、あまたの黄金も、とらすべし、なごすかしいふ。母君は、くちをしげに、涙のみつゝ、退かれぬ。姉君は、例のいと腹立しげに、仰せ恭けなくは侍れども、妾等は本より、君等のいはゆる賊の子なり。心を改めたりとも、甲斐なからん。且、父君は、猶熊本隊にありて、戦ひたまへり。妾等いかで、敵兵につかへん。死ぬとも、志はかへじとのたまふ。

彼はこのことを聞て、劔のたがみ取しはり、聲あらゝげて、いひけるは、キャッ、不埒なる醜女かな、汝等を惠まんとてこそ、かくはいへ。おのがことに、従はずは、殺してくれんど、下さまの者どもに命じて、厳しく戒めしむ。あはれ姉君は、御年やうく、十六になりたまひ、花の顔は、羨まぬ人もなく。思ひをかけし、人もいと多かりしかど、父母の君、こよなういつくしみたまひ、露にもあてじ、塵をもすゑじと、かしたまひしものを、見るさへうとましき、荒縄をもて、高手小手にいましめつゝ、おのがことに従はずは、殺さんと責む、世に鬼はあるものなりけり、母君は、歎きのなみだ遣るかたなく、ゆるさせたまへど、請ひねぎたまへども、更に聞き入るゝやうもなし。姉君は、素より死ぬべき、覺悟におはすれば、くちおしどものたまはず、たゞ齒をくひしばかりのみおはす。

拷問のおどの高きや聞えけん、母君の歎きの聲や通しけん、一將と覺しき人、おくのかたより、走り出てたまひて、何事ぞ、手弱き女の身を、なごてかくはするぞ、疾くく免せど、息あらまきていふ。審問官は、このさまを見やりて、

物もいはず、面もちなきさまにて、こそく引込ぬ。跡にて聞けば、彼の審問官は、姉君の色に迷ひて、計りけるぞ。かくてこよひは、こゝにいましめ置かれぬ。

かすかに響く鐘の音も、遙に聞ゆる鳥の聲も、憐れを催す、種ならぬはなし。夜中過るころ、はひ出て、見れば、月は、早う入りて、雨打すけり。母君、

雨ましり風ふく夜は、いとしく

わかせのきみそ思ひやらるゝ

晴るゝかたなきやとて、來しかた行末の事など、いひつけて、涙のひまなくぞおはします。姉君は、よひの程より、すこしもまどろみたまはず、生きてかゝる恥を見んより、潔く死なんとのみのたまふ。さて

あたし野の小草かもとに鳴きわふる

むしもやとりはありてふものを

囚舎にいましめらるゝ、つらさよとて、足すりして、泣きたまへども、せんすべなくて、こよひも明けぬ。

翌朝、雨はますく、降りしきり、問ふこともなくて、けふも暮しぬ。よひ過るころより、雨もやみて、洗ひ出せる月影、いとさやけし。姉君は

あすしらぬいのちと思へは照る月の

かけも身にしむこゝちこそすれ

あはれ、清き月なりや、いざ遊ばん、酒飲まんと、いふく、勝ちほこりたる兵士ども、妾等の閉ちこめられたる、囚舎の、横庭に、薙打しき、大聲に、歌、からうたなど、謠ひつゝ、酔ひのゝしる。賊兵は降りぬ、大將どもは殺してけり。など勇み猛ひて、言ひはやす、げにくちをしき、限なりけり。

夜ふくるまに、鳴りは静まりぬ。あらけ行くもあり。打伏せるもあり。囚人守る丁も、同じ薙に列りて、酔伏したり。

神は世におはすものなりと、姉君はいと喜ばしげに、忍びくゝに、母君に此處を、遁くべき策を聞ゆ。やがて、妾をば、母君の背に細帯もて、結びつけ。姉君は、母君と互に手をつて、やをら、北表の戸押しあけたり。思ひの外に、清き月、かけは、なかゝゝに、後めたく、息をこらし、背をくゝめて、この寺の裏なる、

竹林を傳ひて、大道に出んとせしに、こゝにも、あまたの兵士ども、月の清きに浮れ出けん。あるは、銃を枕にし、或は酒樽にもたれながら、所得がほに、打ふしたり、如何せまじと、汗あゆれど、せんやうなければ、彼等の足の間、手の脇などを踏みつゝ、行く心地、劔の山に昇るよりもくさるし。姉君例のいろがはしき性にて、疾く行かんとて、誤りて兵士の足を、いみじう踏みたまへり。彼れ驚きて、ねふたげなる目を、こすりく、誰なるぞと問ふ。母君はあはたしいしき聲して、某少將の看病婦何がしにて侍る、殿の君、いといたふ、病みたまへば、今醫師を召しにゆきて、かへるさなり、君等はなとて、かくは怠々しきぞと責めたまへば、彼は俄に目さめたるさまして、さなりやとく行きぬ、おのれらが、かゝるさまを事の序にも、語りたまふな、など欺かれしと知らずしてまづ、わが疵をおははんとするも、いとおかし。辛うして、虎口を通れ、東さまへ、急きにく。行きく、白川を渡るころは、夜もほのく、明けなんとす。願れば熊本城は霧におほはれて、見えねども、喇叭の聲かすかに聞えて今そ鳥も寐くらを放れなんする頃なりけり。姉

君は父君の家におはしましたる時、常に枕邊近う、呼ひよせて、源平の軍物語せられしに、平家の公達の、都を落ち行く、あはれなるさまを語りて、榮枯盛衰の常なきをのたまひしことなど、思ひ出て、今さやうの事を、目の前に見るのみか、我身の上とさへなりぬる、か、いと悲しとて、母君諸共に、泣み、悲み、溝をこえ、畑を過ぎつゝ、一足も、味方に近つかんことをのみぞ祈らひぬ、健宮といふところに至りし頃は、夜もはや明けはなれたるに、兩軍相對し、筒先そろへて、打出す、玉は雨あられとふりそ、いぎて、行くべくもあらざりければ、どある百姓がりゆきて、宿を乞ひしに、主人いと情ふかきものにて、やがて裏の畑に、大なる穴をほりて、此に入りて、かくれたまへかし、さらすは御命危かりなんといふ。まめやかなる顔つき、いどうれしくていふがまに、いそぎ入りつ。母君妾を抱きたまひて、

賤のをか田畑にうゝるからむきの
身のおきとさなきそかなしき

天地も狭うなりぬと、愁ひたまへば、姉君は慰めかほに、

人しらぬみ山かくれのさくら花

にははん春のなとかなからん

しばし木のはの下く、いらんといらへたまふもだみ聲なり

家あるじは、をりく訪ひ来て、握飯などどらす。晝過る頃、戦もやみたれば、あるじが、勸むるまゝに、穴をはひ出て、熊本隊の守れる、木山へと志さす。あるじ、姉君を負ひ、妾は母君に抱かれて、行くこと半丁はかりもや過けん、向ふのかたより、兵士ども、あまた走り来れば、彼等に逢は、擒となるべし。いざ横きるべしと、畔路をたどりて、左さまへゆかんとせし、折しもあれ、姉君を負ひたる翁、流矢にあたりて、腰をいたう打たれしかば、うめいて斃れぬ、息は猶ありげなれど、掻きおこさん術もなく、さりどて、長く止まらば、敵兵の擒とならん、悲しきさはみなれど、翁が息たえくにつきて、指さすかたへと、いろきゆく。姉君は、裙つま高うどりつゝ、母君のあとにつきて、足をうらに、走りたまふ。一里はかりも行きしとかもふに、やうく、みたれ足にな

りて、おくれたまへば、母君手を携へばやと、一足二足、しざりたまはんとし、たまふほどに、アと叫びて、斃れたまひぬ、驚き見れば、左の御手より、血いみじう、迸り出たり、姉君いろき来て、衣の袖引き切りて、流るゝ血押し拭ひ、疵口をかたく結びぬ、さしたることもあらざれば、また道の凹き所を求めつゝ、やうくにして、木山へ着しは、夜中過るころなりき。この時の事もひ

出れば、今猶膚寒う覺え侍る。

大木の蔭に、夜の明るを待つに、筒の音に答ふる山彦の聲すさまじく、峯のあらしは、寄手の矢叫びと聞きなざるも、いとかなし、やうく明けゆくに、人心づきて、大路へ出行きしに、人夫めくもの、あまた来あへり、事によしを語りて、父君をたづねしに、此より一丁ばかりなる處に、假の本營あり、そこにて、聞きたまは、必知れ申さんといふ。いと嬉しく直走りに走りて、どある山の麓の人家あるところに至れば、敵隊、尊王愛國、などかける旗、吹き靡かしたるは、まがふかたなき、父君のおはすなる隊なりけり。

其三

嬉しといふことは悲しきことの極みなるべし。警固の兵に名を通して、父君に逢はせたまへといへば、彼はすさまじき眼して、間者なめりどて、人あまた呼び集へたり。遺恨の涙は、瀧つ瀬なして、流るれども、いひ争は、中々にわろかりなむ、とおもへば、たゞうつ伏し居ぬ。集ひ來れる者どもは、悪き奴かなど云ひ言りて母君も、姉君も、憚るところなく、縛しめたり。恠しきものは侍らずと、たびく、いへど、きかず。牢屋に繫くべしなどいふ。或は斬りはふりすてよ、などいふ聲もす。いかゞはせまじと、神かけ祈るに、姉君の膚につけたまへる、守囊のあるを思ひ出て、これよき證據なりと彼にねぎ申し、急ぎ取り出て、父君にわたしたまはれかしと與へぬ。彼はつゝおきながら奥さまへ行き、妾等は縛しめられながら、一向彼が行かむさまを打まもれり。黒の帽子まぶかく被り、小袴高う繰り上げ、髪違ましくして出で來たまへるは命のおやども慕ひ奉る父君なりけり母君は泣伏したまひぬ、姉君も泣出ぬ。警固のものは、父君を見奉るより、やがて妾等の縛を解きて、そこくと遁れ行きぬ。父君は大聲にて、宣はく、いかにして此まで來つるぞ、恠我はなかりし

ぞ、といひもをへたまはぬに、母君は悲き聲をつゝみて、軍に敗れたまへるか、くちをしさに、御供仕らはやと、此まで追ひ奉りしなりどて、泣き出たまへは、父君はからくと打わらひ、あな女、いしきのとや、鬼をもどりひし、九州男兒の、何かはかよわき敵兵にたぬるふべきを、已れらか此まで退きしは故あることぞかし、さるにても敵の中を、忍ひて能く、尋ねてしことよ。道のほどいかなりけん。などさかしう宣へど御心の中は、猶悲しふ見たてまつらる。妾等は、やかて、看病婦といふものになりて、病院に居りしか。味方の軍は、いつも利あらず、御船といふ處にて、いたく敗られしより、退くともなくて、國境を越えて、山ふかく入る心ち、悲しどもかなしかりき。人吉に至り、青井神社に捷を祈り。振武、干城、正義、などいふ旗おし立て、聞つくりつゝ、諸方の口を防ぎにどて、父君もあまたの人々と、勇みくつてころ出て行きたまひしが。鬼神峠、矢代山、など、いふ、所の戦のおろろしかりしこと、聞き傳ふることに、いかにおはしますらんど、胸のあくひまなく。あゝ、夜、村雨打そゝきて、筒の音かすかに聞えければ、姉君、

筒のおとにおどろかさされてなかむれば

月影くらくみのむしのなく

ちいどよぶ聲は、妾等のみにもあらず。

八月二日の朝なりき。竹内村といふ處にありしが、筒の音、矢叫ひの聲、俄に
おこりて、人々あはてふためく、傷蒙りし、あまたの人々を、籃に乗せ、或は
力つよき男か、負ひなごして、走りに走る。高鍋へいそげといふ聲、しきりな
れば、妾等も、たゞそのかたへと走る。目的もなく、便る人もなけれど、さる
へきこと、いふ折にあらず。筒の音は、いよいよ近う、こだまの答へさへ、い
といみじ。妾は例の結ひ付けられ、姉君は母君と、手取りかはして、たい走りに
走る川をわたり谷をこえ息も絶へぬやうなり。姉君は、かゝるうき目を見ること
のはてしは、父君にも逢ひ奉らず、再ひ敵の擒となるやうの事あもらは、命
生んこと難し。いたつらに恥の中に死なんより、怨敵の一人なりとも、斬り屠
りてん、女なりとて、思ひ立つ時は、なか大丈夫に劣るべき。石に立し矢さ
へありきと聞くを、いざ快よく戦ひて、敵の大將の首とりて、父君に逢ひ申す

時の、手みやけに捧げばや、且父君の、かねて仰せられしよしを思ふに、こた
びの軍に、またなき賊名を蒙りたまひしかど、其實、朝家の御爲なりと思ふ。
よせ来る敵を、塵にせば、京に上りて、大君の御心を安め奉らんは、疑なかる
べし、くなたふれ、足利が爲業を學びたまふにもあらず、御心は和氣の川水の
清きがごとく、楠の大木の、香しきがごとし。この御志をとげさせ奉らで、空
しく敵手に陥るは、子たるもの、忍びざるところなり。よし事ならずして、死
たりとも、大義のためには惜むこと侍らじと、母君の手を振り放ち、鉢巻堅
く結びて立ちかへらんとしたまふ。母君いといたう叱り、泣くくといめて、
強ひてこそ落ち行きしが。佐土原の方より、寄せ來し、敵兵、雲のぶとく起り
雷の如き聲して、打出す玉は、雷のぶとく、霞のごとく。前に傷くものあれば、
後に斃るゝものあり。あさましいふも、世の常にて、苦しむくるしく、悲
しどもかなし

今や高鍋も近きぬ、と云ふ聲するに、よろこび見れば、はやら敵の執る處どや
なりけん、炎は天に輝きて聞き馴れぬ喇叭の聲のみかしかまし。胸潰れてせん

かたなければ、南さまへと行かんとするに、谷ふかくして苔滑かなり。やうくはひ歩きて、向ふのかたへわたり、猶行けば我どもなく荆蕨の中へふみ入ぬ、影も見えぬばかりなれば、なかくに屈竟のかくれがと頼みし甲斐もなく一發の砲聲いと鋭く姉君の胸を貫き、アハといふまもなく、仰けさまに斃れたまひぬ。母君の泣きたまふ涙は迸り出る血よりも多く叫びたまふ聲は數萬の筒の音よりも高し。御年やうく十六、清らかに美しくう、読み書きの道さへ拙からず、琴笛の音にも通じたまひ、優にやさしかりしは、古の小町もかくやと思ひ合せられ、猛き性おはしましたるは、巴の前にも劣らざるべきと、父母諸共にこよなきものにし給ひしを。かゝる果なき事になりたまひしとのかなしさよ。神は世におはするものなりと、のたまひしことも、今は昔のあたおとなり。立かへりて戦はんとせしを、強ひて連れこしは、かゝるとのなきやうにとてこそなれ、今はなかくに甲斐なき事してけりなど。母君諸共くりかへし、なき戸を身にひたよせて、無常をかこつ中に、敵兵近きぬとて泣きさけぶ聲頻に聞ゆ。かくてあらは、又かなしきめをやるらん、さりとてこの慕はしきこの戀しき、この

愛らしき戸を葬りだにもせず見すてゆくべきや。さはいへ路けはしく、草深ければ、負ひて行くべき術もなし、生れしより荒き風にさへあてじと育てしを、このあらし山中に、獨ふりすて、あはれにも敵兵のために殺されて、虎狼などの飼食とさへなすは、人といはるゝほどのものなし得べきことかは、と又すがりつきて泣きかなしむ中に、はやう敵兵のかたちさへ本草がくれに見ゆめれば、悲しさは又なきものから、邊近き小石二つ三つ掻きよするやうにとりて、姉君の伏したまへる黒髪すだぐに叩き切りて、包ひまもなく口にくはへて跡をも見ずに遁けゆく、心を鬼になせばなりけり。

其四

「魂のありかを尋ねべき、まぼろしも」なく、父君の行衛知らする、人もなし。辛うじて、この山道をはひ出んとせしに、街道は、はやう、敵の守る所となり、日の御しるしの旗は、秋風に塵を拂ひ、嘶く馬の聲は、山川に響きわたりて見るもの聞くもの痛ましからぬはなし、まことや、父君も、我大君に、仇し奉らんなどの、御心にもおはしまさざめれ、事のむね、貫かすして、かくあさまし

きさまに、陥りたまひしことの悔しさよ。とせき出る涙は、たゞ父君と、姉君との上のみ灑げり。

その夜は、草むらの中に伏したり。母君は、日頃の思にや疲れましけん、俄に病みつきて、一足だにも歩みたまはず。軍は敗れぬと聞く悲しさ、げにせんすべなかりし。

翌朝、山上より、下り来るものあり。誰ならんと、木かげよりすかし見れば、彼もあやしと思ひけん、いそぎより來ぬ。手拭にて、頭をおほひつゝ、いたる衣きて手束杖つきたる六十あまりの色きはめて黒き姫なりけり。おどろきて誰ぞと問へば、昨日の軍に、取り圍まれて、この上の、岩ほのもとに、一夜をあかし侍りき。この谷を下りて、馳行く處に、家居するものにて、日とく／＼薪をどりに上りしが、ゆくりなく軍にあひて、かくからきめには逢ひたりき思へば、軍ばかりおそろしきはなし、何の用もなきに、あまたの人を殺し、剩へおのが、身さへ危かりしことよ、など、汚き齒をむき出しながらくちをしげにて語る。妾等も、この由を委しくいへば、かの女、大なる涙を落して、姫の家に來り

たまわれ。老翁も待ち詫び居るべし。あしくはなさじとて、母君の御手を捕りまつる。

よろばひながら、彼か誘ふまゝに、山を上り、谷を越え、釣橋をわたりなどして行くに、さゝやかなる家、二三軒、松の木かけより見ゆ。近くまゝに眼鏡く白鬚逞しく生ひしげり、鼻高く頬瘦せて肩衣と云ふ者を着て、弓の折れたるを杖き出で迎ふるはこの家あるじなりけり。おそかりしことよ。昨日の軍はいかにぞや。怪我はなかりしぞ、など問ひかく。姫。事のさまを語り、また妾等連れ來しことをもいへば、翁も心くるしと思ひけん、涙を袖にたゞへて妾等をむかへぬ。妾等もありのまゝに云ひて泣けば、彼も大なる聲して泣き、姫も諸聲に叫び出ぬ。かくてこよひは、四人とも涙の淵に溺れたり。

四日五日の間は、姉君の今はの時の悲しかりしさま、まのあたりに見えて、つゆまどろまれず母君は、夜中ばかり起き出で、姉君の名をよびつゝ、さまよひたまひしこともありき。心は闇夜におはさねども、子を思ふ道はかく迷ひたまふなりけり。

十日ばかり過ぎで、味方かづゝ敗れて、多くは降り、或は自殺せしなど、傳へ聞く時のかなしさ、げにせんすべなかりき。父君にも、今は逢ひ奉ることなかるべし姉君の尸は、雨露にさらされて、おそろしき、虎狼の餌とやなりぬらん。かなし、つらし、うらめし、などいへる詞は、かゝる時の用にとて、神の造りおきたまひしか、おもへば、いとも胸くるしう、身も裂るゝ心ちすと、少女はまた泣き伏したり、母はさきより。傍にありて、よゝと泣き、あるはなき齒をくひしりなどして、憤れるさま、武士の妻といふに恥ぢず。士官は流るゝ涙を押へつゝ、猶その末を語りたまはれど、責むれば、少女は再びなみだを拭ひ、やゝありて、聞たまはれよ、残暑いと堪へかたければ、ある日母と共に、谷川に降り立ちて、衣服など洗ひすましけるに、川上より、ながれ来るものあり。すくひ上げて見れば、刀の鞘なり。いかなるものにかと、よく見れば、朱塗なるに、鍔形小尻打たり、見覚えのあるものなれば、いとゆかしくて、猶よく見るに、小刀もて彫りしと覺しくて、

大君の御代の守りの劔太刀

ときみかきてんますらをわれは、春蔭

と記せり。いどうれしきものから、せき出る涙は却て亡き人の手向の水とやなるらんとおもへば、目も見えぬやうに覺えて悲し。討死をやしたまひつる。みづから御腹をやめされつる。されど、この御鞘の、こゝにしも流れつきしは、猶父子の縁のつきせぬなるべし。思へば、青井神社にて、出立の勇ましかりし御さまは、昨日のことゝなるに、實に世は夢なれや。母君は、寢衣にぬぎかへ給ひて、朝夕の回向に、隙あらせたまはず。一日だにながらふることを、悔しうのたまふ。城山もおちぬ、西郷大將も討れぬなど聞くに、いよゝゝかなしさぞ添ふる、家あるじは、姫と共に、慰めかほに、くさゝくの物語し、あるは稗の實團子などいふものを作りて、饗す。志のほゞいどうれし。

御刀の鞘は、父君の御靈代として、床の上にすゑまつり、姉君の位牌をも、傍に置きまつりて、朝夕に忍び奉る。ある時に、山にのほりて、すゝき、をみなへしなど手折り來て、之を奉り。ある時は、谷に降りて、行く水のかへらぬ人を思ひ、松ふく風におどろき、雁の聲に夢さめ、露を見てははかなき世をかこ

ち、時雨のあめに袖を腐し、鶯は物おもはする媒となり、花の衣は、墨染にかへまほしう、天か下のもの、一として、歎きの種ならぬはなし。

ある時母君、

おもひあまり立いて、見れば天そとる

たかなへ山に雲そかされる

月のくらかりける夜、

われのみと思ひし、ものを久方の

月もうきよをたどるなりけり

妾かよめるは、

おもひ出て、泣かぬ時ころなかりけれ

月てるよはも花のあしたも

盡せぬものはけになみだにぞ待ちける。

其五

この家あるじは、いとまめ人なりけり、妾等が、愁に沈めるを慰めんとして、

山に伴ひ、川に誘ひ、ねんおろに心を盡しけり。ある時は、古き軍物語を読み聞かせて、その世のさまを忍ばせ。また、楠公、兒島公、さては新田公の事など、こまやかに話して、武士の道は、かくこそ有るべけれ。國のためにと思ひ立ちて、志の成らぬ人は、むかしより多かることなり。歎くべきにわらず。西郷殿のころのほどはしらねど、いたづらに世を騒がし、かしこき天皇の大御心をいため奉りし罪は、ふかけれど、必ずしも人のいふほどく、古の將門、純友等と同じつらのものども思はれじ。心やすくおぼせ、なぞいたはる。妾はおさな心ちに、よくも辨まへざりしかど、あるじが志のほどを、思ひ見るに、いとかしこく、才たけたる人なめり。かくてこゝに年経ること、凡七八年なり。あるじは、その長き年月、一日のぶとくにもてなせり。

妾はこゝにて十四の春を迎へぬ、主のために書よむ道も知りぬ。さては父君の御志の程もいよく哀しくなりぬ。姉君の今はのさまも益々思ひやられぬ。されど今は共にこの世におはさず、忍ひ奉ることもかひなし。母君はあまたの年を歎きの中に送り迎へたまひしかば、一日くくに面瘦せおはします、妾もまたかく

てのみ世になからへば、遂にはこのみ山の朽木と共にうちはてし、先祖以來正しき貴き家も、我世を限りに埋れなん。「あはれ男兒に生れざりしことの悔しさよ」と姉君の屢々のたまはせしことの葉、いまは妾か身とはなりぬ。

この山の麓に、御社あり。里人は、権現とのみいへり。この家より、僅に十五六丁ばかり。ある日は日おとくに詣でぬ。いかなる神にかおはすと、問へば、こはいにしへ、このわたりは熊襲國といひて、わるものゝみ住ひて、人を惱ましたりしを、朝廷さこしめして、日本武尊を、京師よりはるく下さしめたまひて、平らげたまひたりき。その時、尊の御稜威、いとおろろしかりしかば、土人後に社をたて、禮れりしを、何事も佛くさき中昔の世のならひとて、権現などゝいふに至れるは、かしこき極みなりなど語る。妾の尊の御事、いとゆかしければ、委しく問ひ聞くに、あるじ具さに語りさかす。さては、その日より、あるじに伴はれて、朝な夕な、この御社にまうで、故父君の御志の届かんとをのみ祈る。

ある夜、思へらく、むかしより、願かけて、祈るものは、尋常のことにて、成

れる例なきがことし。あるは断食、齋戒して、祈るもあり。五十日、百日、籠りて、祈るもあり。これ、皆真心のかはらざるを示すなり。妾も自から、わが心をためし見ん。さりとして、老母をはせり。これを暫くも見はなつは、子の道にあらず。断食して、躰をいためば、孝の道を欠くことあるへし。いで、この家の下なる谷のほとりに小瀧あり、たけやうく、二丈ばかりなるべし、夏のはどは小供さへ瀧坪に遊ぶとさく、それにうたれて心膽を鍊らばやど、思ひなりぬ。さては夜おとく、母君の寝しづまるを待ちて、窃に裏戸をあけてこ

に至りぬ。かくて、凡そ五十日ばかりを経ぬ。木がらしの風おと凄じく、狐さへ鳴きしきりて、あはれを催す夜おろなりき。心にねんじつ、瀧のふもとに至れば、例のやうに、水は滔々と落ちたざりつ。衣をぬぎて、飛び入らんと、やをら見上げたるに、恠しや、岩はの上にはたすみ立るものあり。よく見るに女のすがたなり。しかも老女のすがたなり。いと怖しく思へども、心をしめて瀧坪に入らんとするにかの女走りかゝり来て妾が肩を捕へつ。誰なるかと驚き見るに、こはいかにこはるもいかに母君にておはすな

り、混ふかたなき母君にておはすなり、いかにしておはしまし、ぞ、妾の行く先を誰にかき、給へると、取りすがりいへど、母君も何かいひたまふやうなれど、瀧のおどいと高くこどく、に打ちけされて、たい互に手を握りあひて泣くのみなり、折しも空かきくもり、月影いとくらく、時雨のあめ俄かにふりきてものすおしなど、いふもなかくなりや。

今この二人のさまは峯の松風と、そらの月より外には、知るものあらざりきと、おもひしは、妾らのさどりの至らぬなりけり。家あるじは、こよひしも、二人ながら居ざるを恠しみ、隈なく尋ねて、いまこゝに來れるなり。妾等を見て、物をもいはず、いそぎ手をとりて引き出せり。妾と母君とを両手に提るやうにしていそぎいにけり。雨いよ／＼ふりしきりて、空いよ／＼暗らければ馴たる道はたど／＼しくもあらず、姫は松火ともし門まで出て迎へたり。

其六

神に願かけしはよし。瀧にうたれしはあらぬことなり、まして、年若き女の、なごかはなご戒めらる、その後には、朝な／＼神参りするのみにて、ひたすら宿

にこもり居たり。翁さまさまの文ども語りきかす、ある日、翁はことさらに浴みし、口ろしぎ、衣文たゞしくつくろひて、妾に向ていふやう、學びの道も、月ころは、いみじう進みたるやうなり。けふは貴き書、語りきかすべしとて、床の脇なる小棚より、取出したるは、神皇正統記といふ書なり、母君も來よりたまひぬ。姫も席に列りぬ、翁はやがて、机の塵打拂ひ、かしてまりて、いひ出るは、この書は、今より五六百年のむかし、世は茹こものやうに亂れて、賊ども四方に起りける時、南朝の忠臣に准后北畠親房卿といふおはしけり。關城にこもり居て、手づから書きつゝられしは、この書なり。されば、一言片句も、輕々しくせず、字々慷慨の意あふれて、今より讀むだに汗握られ、涙こぼるゝ所多きやかし。開卷の初に、大日本は神國なり、天祖はじめて基を開き日神長く統を傳へ給ふ我國のみこの事あり異國にはその例なしと、かきおこさせ給ひしがおどきは、おぼろげの人の書き得べき事にあらず。されば、おのれはこれを身の守として、いづちにあるも、暫しも放たず、この戒をば、神のやうにあがめて、常に我身を守り、君につかへ、國につくす、本とし侍るなり。これを

さへ、能く心得なば、何の誤ることかあるべき。論語も何せむ。孟子も何かはなど、懇に語り聞かす。

この翁の風采舉動、日一日より貴く、おぼえて、初のはどこそ、其いへること胸にもおちざれ。後にはやうく、その旨をさとり得て、かたはしつゝ、その本を寫しつゝ、日おとくに學びしかば、はては皆その業を了へ侍りぬ。かくて、御國の貴きこともますます知りぬ、一天萬乘の大君さへ、大御身のおきどころなくいみじくあさましかりし世のさま、思ひ奉りては、わが身の苦しみはものゝかずともおもはずなりぬ。

ある日、翁いへるやう。都の空は今は西の風に吹きあらされて、學者も政治家も、大かたはるの本を講せず、一向に、古の手ぶりを卑しめ、到るところ權利義務の聲のみかしましくて道德倫理をいふものなくたゞ末にのみ走り行くめるは頑なる翁には解しがたし。古へ何事も唐風をまねびし時にはおのか姓名さへ唐めかし家居の作りさまより衣服のさたまで唐装ひとなれりし、はてくは人の心もからこゝろとなり御國の民にして御國の貴きことを知らず。御國の粟を

食みながら御國の恩を忘れ。ともすればかれが軍門に降らんとする有様となれりしは、今より思ふだにうろ寒き心ちするを、こたびは又彼の國よりもいたく國がらも違ひ、風俗も異なる人のことを、さながらまなばんと企てしは、いかなる心にか、頑なる翁には解しかたし、文明とは真似することなるか、頑なる翁には解し難し。開化とは我が俗我が風を打すて、彼か俗彼か風に化せしむるとなるか、頑なる翁には解しかたし、之を論すれば、頑固なりとて退けられ、之をいへば、時勢を知らぬものなりとて、顧みず。さても、御國の行末たのもしく立ち榮えなは、めてたくも面白くもありなむ、頑なる翁には解しかたし。先に熊本にて、加屋、大田黒等か、兵を擧て、縣廳鎮臺を襲ひしは、暴擧といはれいへ、その精神の憫むべきは、知る人は知るらん。世はすべてあちきなきことのみ多し、頑なる翁には何事も解し難し。嗚呼いひ過したり、皆夢とおぼしめせ。いざたまへとて、爐邊に坐をかまへて、濁酒打すり、鬚かきはらひて、なみだをたにおとしにおどす。

かくて、妾は長き年月を、こゝに過しぬ。翁はつねに、かゝる事をのみ語り聞

す、ある日、妾竊に思ふよう、父上は行衛知れず失せたまひぬ。姉君はあさましき死をとげたまひぬ。かくてたゞにあらば、死にまし、父上姉君の御志どぐる期なかるべし。いで、都に上りて、世のありさまをも見、學びの道をも勵まひし、古より女は、女として、御國のために力を盡し、例多かり。いで、京に上らば、やとおもへば、一日もたゞにあらんこと、物うく。やがて母君にもいひ、翁にも語りければ、人の志は傍よりとゞめがたきものなり、思はんやうにせんこそ、よからめと、口をそろへていひ聞かせらるれば、飛び立つやうにうれしく、例の權現堂にまうで、志の成らんとを祈り、やがて翁姫に長き年月の恩を謝し、母君と共に、手を携へてこゝを出しは、去年の秋にして、十六才のころなりき。

國のためおもひたゝすは別れ路の

たもとやいかに露けからまし

と口にはさかしういへど、このとし月、たゞ親子のやうにてありしかば、恩愛の情胸にあふれて、足さへ進まぬ心地す。母君は

さしきゆく山路海つ路ふく風に

ありしむかしのことや忍はむ

翁は國のために心をつくしたまへといひ。姫はなみだをおとしてたゞ泣きに泣く。母君は父上御刀の鞘を持ち給ひ、妾は姉君の遺髪とかねて寫したる神皇正統記どもち、細島をさしてそ急ぐ。道のはと尾花かるかやの咲きみだれたる、虫の音のしきりなる、たゞ哀れを催すたねとぞなりぬる。翁姫は門にたちて、かげの見ゆるかぎり打まねく。もとより金も心にまかせ侍らねば、あるは寺門に夜をあかし、あるは社頭に曉をまち、辛じて細島にいたりつきぬ。

蒸氣船といふものも、名こゝ聞きつれ、こたびはじめて乗りぬ。素よりならばぬ旅なれども、幸に雨風もなく、佐賀關、大分別府など、を経て、やうく九州を離れて上り行く。播磨灘を過ぎける時、黒雲俄に起りて、船は躍るやうなりしに、母君も妾も死ぬばかりに苦しかりしかども、覆没するに至らずして、神戸まで來つしは、神の助け給ふなめりどうれしかりき、それより例の辛き歩みに、こゝまで來しは、十一月のはじめつかたなりき、もとより知るべする人もなけ

れば、警察署にいたりて、さるべき宿をたのみ、少しの企つにて、一まづこゝに足をどいめ侍りぬ。

けふは、東京に上らん。あすはたゞんとおもふうちに、母君いみじう煩らひ給ひぬ。初のはとは、薬もをりくは奉りしかども、後にはそれをも續かざるに、御病はいよく重り給ひ、せんやうあらざれば、宿主に請ひて、それが裏店の一間をかりて、心のみ勤め居れども、叶ふべくもあらざれば、重き御病の枕をはなれて、この年の初より聊の小柴花など賣あるきて、米と薬との幾分を補ふとはなしぬ。さるをこのおろは病も怠り給ひ、昨日今日はことに御心よく見奉つれば、いかでこの賑を見せ奉らんと思ひ、誘ひまつりしにかくあさましささまとなり、御恵によりてやうくよみがへりはせしもの、思へばく悲しき極みに侍ると、さくりわけて泣きふしぬ。士官はこの少女が長き物語に、或は慨へ、或は悲しみ、たゞ泣くより外のことなし。

日も夕かげになりぬ。今は宿に送り参らすべしとて、士官は車を雇ひて、已れも共に行きぬ。見るかげもなき宿のさまは、事あたらしくいふまでもなし。

其後櫻田は、隙あるおとに、必この家を尋ね、懇に心をつくし、かば、遂には隔て心もなく、何事も打とけて、互に力と頼みしを、同じ年の三月の初のころ、櫻田は急に熊本鎮臺に轉任しぬ。いそぎの旅とて、別を惜しむ暇もなく、たゞ立ながら一言いひ入れて、任地へと趣きぬ柳河母子は、舳艫を失ひたる船の如きおもひして、三月四月を経ぬ。かゝるほどに、老母は急に病おこりて再び床につきぬ。あはれにも八月の初めつかた、この世を去りぬ。櫻田はうの前月なる熊本の大地震に、右の手をいたく傷けて、病院に送られぬ。少女は悲しみの數重れるを訴ふるところなく、文して、櫻田のもとへおもふむねを、いひつかはしたり。

はからざることより御恵をうけ行末の力とたのみまゐらせしを今は海山をへだて、夢路ならでは逢ひまゐらすこと難き世とはなりぬおもへば腸もちぎるやうに侍れどろは私の歎きなり公につかへ給へる御身の上に申しかくべきことかはこゝに聞えまゐらすはこの月のはじめばかり老母を亡き人かすに數へ申し、ことに侍る妾か心中申上んもなかゝに侍れば今は何事も申すま

じと思ひ侍れども遂にかなしみの涙あふれて御許様の袖をも濕さしむるに至りしはかへすく罪ふかうこそ侍れ知らせ給ふおとく妾は京に上らん心かまへなりしかどもこの悲みに足もすまざるはいか、はし侍らんあはれこの春以來御惠をかうむりしことも今はいふかひなきことにやなりはてんといと悔しうなみだせきあへねばひぬよしのひとことかく申すになんあなかしこ

八月廿四日

柳河よし子

櫻田様

御どもへ

かき終りて見候へばわが身の歎きのみ申し上げすまざる儀は理しらぬ女のこゝと、御ゆるし下されかしまたくかしこ

櫻田は、病院にて、この文を見ぬ、返事かゝんと思へども、手ふるひてえかゝず、十一月の末つかた、やうく怠りぬるにやがて、休職となりぬ。彼の柳河のとも、心にかゝれど、久しく音たえたれば、まづ文して、このよしをくはしくかきおくり、十二月の中はあろより、寒さを犯して、かねてかの母子が語り

きかせし、翁嫗をたづねんと、日向路さして、出立ぬ。少女は櫻田の返事の來らざるに、いとあやしく、悲しさまさり、母の墓前に忍び事申して、同く十二月の五日に、大坂を立て京へと志しぬ、あはれ櫻田か義を重せしこと、少女が節を守りしこと、たい思ひやらるべし(巴人載)



環象を論ず

其一

深山大澤に龍蛇を生ず。此に人あり、山河を以て深きや、澤何を以て大なりやを問ふ、余の答ふる所に非ざるなり。若し夫れ深山大澤何を以て龍蛇を生ずるやを問ふ、是れ則ち余の答へんと欲する所なり。然らずんば山の森森として深き、澤の莽莽として大なる、去て地文學家に問へ。唯だ龍蛇の其間に生現する所以に至ては、余が此より謂ふ所の環象の理法、能く之を解せん。乃ち彼れ龍蛇や、則ち深山大澤に非ずんば龍蛇を生ずるに足らざるなり。嗚呼是れ未だ盡くさざるなり、余大に論せん。

凡そ環象の謂ひたる、諸有機物を圍繞する所の四隣の形状、是なり。而して此の四隣の形状は其の圍繞する所の有機物を死活するの力を有する者にして、之に適合するものは、則ち存じ、之に適合せざるものは、則ち亡ぶ、實に環象の主宰力ならざる無し。而して是れ既にダーウイン、スベンサー氏の説く所なり

と爲す。

乃ち動物の形に見よ、天漸く寒うして皮に羽毛を深くし、而して肉に脂肪を濃にす、寒己に去りて炎暑漸く來らば、羽毛疎と爲り、脂肪又た淡と爲る。則ち知るべし、寒に耐へんと欲して羽毛之を深くし、脂肪之を濃にす、而して暑に耐へんと欲して羽毛之を疎にし、脂肪之を淡にす。若し然る能はざるものは、皆な其の寒暑の激變に耐ゆる能はずして而して亡ぶ、是れ氣候の移す所、氣候は則ち環象の一なり。而してモン・ウスの穴中に棲む魚類を見よ、皆な兩目なし、永暗の處、眼を容れず、是れ住所の移す所、住所は則ち環象の一なり。而して喪家の犬を見よ、疊々として瘦す、將軍の馬を見よ、隆々として健なり、是れ食物の移す所、食物は則ち環象の一なり。

更に動物の聲色に見よ、ヘッケル氏の説く所に由れば、亞弗利加に毒蛇あり、尾を振て蟬鳴を作すと、是れ蟬聲して以て蟬に近づき、而して之を啗はんが爲めなり、之を啗はずんば、其生を爲し難かるべし。而して芋虫の青姿して青葉に住み、塘蛙の青姿して青草に住み、茶婆の青姿して青稻に住み、土バッタの

土色を爲し、比目魚の海土の色を爲し、北國の熊は雪中に雪色を爲し、而して新潟に於ては、灰色の兎も雪時に至れば雪色を爲す、皆な所謂る保護染彩法ならざる無し。而して後ち適種淘汰の其間に行はるを識るなり。即ち芋虫の青姿するは、青葉に托して敵目を避くるが爲めにして、青葉を食ふが故に青姿なるに非ず。而して北國の熊の雪姿するも、亦雪を食ふが故に雪姿なるに非ずして、獵夫の眼を逃るゝが爲めなり、他皆な然り。乃ち蝴蝶を見よ、黄菜花邊に黄蝶飛ぶ、黄蝶の黄姿は黄菜を食ふに關せず、而して白菜花邊に白蝶飛ぶ、白蝶の白姿は白菜を食ふに關せず、只だ白蝶の白菜花邊に於てし、黄蝶の黄菜花邊に於てするは、茲に於てするにあらざれば敵目を避くる能はざるなり。而して寸取り蟲の梅杏小枝に懸り、以て其小枝の如き身を小枝の間に托するものは、是も亦敵目を惑はすなり。

然るに今ま白天地に黒姿し。或は青天地に朱姿し、或は黄天地に紫姿する等、頗る前例に反する介蟲あり。而して此等異彩姿の蟲類は、大抵毒蟲ならざるはなし。只だ毒蟲なるを以て、又た來り觸るゝものなし。此の如きは、則ち敵目をして早く已れの毒蟲たるを示すに利あり。「ビリーリヂエー」蟲の「ヘリコニヂエー」蟲を摸し、「アガリスチヂエク」蟲の「リバリヂエー」蟲を摸するが如き、更に其間に混じて巧に敵目を怖れしむるにあるなり。之を要するに適種淘汰は、即ち其の無数の環象に適應する量度の如何に従て、遞次之を淘汰するものなり。而して有機物皆な免れず。余は乃ち進で之を人事に徴して、詳説する所あらんと欲す。

夫れ吾人を圍繞する所の環象なる者は、或は氣候に、空氣に、或は住所に、或は食物に、或は地質に、位置に、山海に、動植物に、自然の景象等、許多ありと雖も、其の氣候空氣の吾人々類に及ぼす所の刺力は果して如何なりや、余は先づ此より論拓すべし。而してスペンサー氏之に關して言へることあり、曰く、一般に生活なるものは、温度の兩極間に於てのみ始めて之を全ふすることを得るなり、而して人類の如きに在ては之を全ふするの區域更に太だ狹隘なるを免れず、何とならば社會は人類に基くのみならず、之が人類は則ち動植二物を待て始めて生存し得るものなるを以て、社會は自ら寒熱兩極の間を限られざるを

得ずと。然り、アイスランドの如き寒帯に一住民なし、而して亞非利加大陸の中央の於ける熱帯に、亦た一住民なし、社會は自ら此の兩極の間に於てすべし。而してスペンサー氏又た空氣に關して言へることあり、曰く、今の兩極は開化を妨ぐるものなり、何とならば其の空氣にして少しも水を含まずんば土地乾き、而して草木枯れ而して動物生ずるに由なし、而して人類活を爲し難し、縦令ひ其間に生存せしむるも、生活資料の大半無きを以て、決して人口の増加を期す可からず、僅に一二村落に過ぎずして大なる社會なし、是れ終に開化無きなり、乃ち亞非利加大陸に於ては、其の海岸に沿ふたる部落を除非して一社會なし、之に反し其の空氣にして多量の水を含み、殊に之に炎蒸を帶ぶの地は、亦た之れ社會の進歩を妨ぐるものなり、例せば東亞非利加の一部に於ては、金屬は繡蝕し、紙は濕濡し、火藥は點火せず、而して身汗を凝閉して、外に排洩すること能はざらしめ、住民皆な從て衰容多く、絶て活潑の氣力なし、社會の進歩は到底此の住民に望むべからず、乃ち古代史記する所の古國に於て、最も早く開化の途に就きたるものは、則ち氣候温暖にして、而して空氣の最も朗澄なる、埃及

の如きバビロンの如き、アツシリヤの如き、フヒニシヤの如き國土を爲す、因て地文學に係る輿圖を檢するに雨無き土地と記載したる場所あり、而るに古來世界の優勝者たる人種は、必ず此の所謂雨無き土地及び其の近傍の土地より興起せしものなり、即ちアリアン人種は印度に蕃殖し、而して歐羅巴に出で、韃靼人種は支那に勃興し、而して印度を侵し、セメチツク人種は亞非利加の北部に勢力を生じ、而して歐羅巴の一部を服従せしむるに至れりと、然り三大種族は各々所謂雨無き土地に起興し、而して後ち漸次雨多き土地に向て各々播趨するに至れり、是れ即ち氣候空氣の如何は以て其の人類に及ぼす刺力の著大なること、推して知る可きに非ずや。

バックル氏は論じて曰く、世界の北部に住む人民は暖國の人民に反して不撓不屈の熱心に乏し、是れ即ち北部の氣候は嚴冷にして、爲めに往々太陽光線の不充分を來し、人民をして常に戸外の勞働を繼續する能はざらしむるなり、而して其の結果たるや、之が勞働者たるもの、日々の職業を中止し、終に不規則の弊を生じ、弊の久しき所、不撓の精神を以て、一定の勞働に従事するは、其の

耐ゆる所に非ず。而して他の暖國の人民の如き熱心を欲き、只だ何事に對しても自ら心變りやすき性質を示すに至るなりと。然ども是れ甚だ寒き所に住む人民と較論するのみ。今ま且つ眼前の事に由て之を證せん、快晴の天。人をして愉快の念を生せしめ、淫雨の天、人をして悒鬱の情に禁へざらしむるは、則ち重霧陰閉の英人が自ら悒鬱の念あるが如く、而して江山晴麗の伊太利西班牙人が自ら快活の情に富むが如し。而して其の及ばす所、民風を移すに足るなり。例せば魯西亞の如きは、冬期に至れば積雪、屋を没し、堅氷江を封す、是に於て其の家屋の建築は、牛羊の蹲踞する如く、牢固にして、而も幽暗を忌まず。而して其の樂事は、多く戸内に於て之を爲し、交遊の具、賓讌の道、大抵之に従て趣を爲すに至る。是れ其の民風の他邦に異なる所以にして、均しく我邦に於て北國と西國と其の民風を異にするに同じ。更に開化の由來する所に問はん。

其二

野蠻草昧の社會に在ては、轉た富の造出を必要とすべし。富無くんば營々勞苦して暇なかるべし、暇無くんば學す可からず、學す可からずんば智なし、智無

くんば進歩なし、進歩無くんば開化なし、是れ富の野蠻時代に於て轉た必要を感知する所以にして、實に其の社會が他年文化に導かれ得べきや否やの大疑問を決するは、此の富を除いて他に之を解釋し得べきもの無し、然れども野蠻時代に於ける富なる者は、尤も單純なるものにして、多くは之を自然に仰ぐの外なし。故に其の富の増加は、全く之が有形の事狀に基くものにして、氣候、地質、食物の三者、是れり。而して三者皆な所謂環象なり、余は今ま此の環象の其の人類に及ばす所の感應如何を論せんとす。

概して之を見るに、氣候温暖の國は、地味豊腴なり、地味豊腴にして五穀穰々たり、五穀穰々にして食物饒多なり、かの埃及の如き、印度の如き、殆ど勞せずして食物を得るに難からず。是れ即ち暇あるの人民なり、暇ありて學すべし、智すべし、埃及印度人民の如きは、能く進歩開明の途に上り得べき環象に在りと謂ふべし。然るに茲に最も潜心考慮すべき緊要の一問題あり、其の富の分配如何、是なり。夫れ富即ち權力たるは、決して古今東西の別ある可からず、既に到る所に於て富の即ち權力たるを知らば、富の分配ば亦到る所に權力の分配に

外ならざるを知るべし。而して富の分配にして不平均ならしめば、即ち權力の不平均と爲り、以て其の社會上及政治上に於ける不平均を生ずべきは、理の最も親易きものなり。抑も近世に於ける富の分配なるものは、無數の原因に支配さるゝものにして轉た錯雜すと雖も、野蠻草昧の社會に在りては自ら單純にして見易し。乃ち其の分配は全く有形上の原因に基き來るに過ぎず、而して其の富は單に労働者と之が労働者を使役する者との二者に分配す。而るに労働者を使役する者は、其の一般人民に優出する智識あらざるべからず、之に優出する智識ある者は一部の少數者にして、他の擾々たる多數者は、皆な無智の労働者と知るべし。近世に在りては吾人此等の人を分稱して、或は資本家となし、或は金貸と爲し、或は地主と爲し、或は労働者と爲し、而して資本家に分配すべきものを利益と稱し、金貸に分配すべきものを利息と稱し、地主に分配すべきものを地稅と稱し、労働者に分配すべきものを賃銀と稱するが如きことありと雖も、草昧の社會に在りては之を二分して一を利益と爲し、一を賃銀と爲し、賃銀の分配を得べきもの之を労働者と爲し、而して利益の分配を得べきもの之を労働

者を使役する一部の少數者と爲す。經濟學者の説く所に由れば賃銀の高下は、主として一方に於ける労働者の數と、他の一方に於ける賃銀と稱する資本の一部分の多寡との關係に由て定まるものなりと。別言之を説かば、賃銀は需用供給の理に基くものにして、賃銀の高下は猶ほ物價の如く、然るなり。故に労働者の數多きときは、從て賃銀下り、労働者の數少きときは、從て賃銀高し。然らば則ち一社會にして人口多きときは労働者多く、労働者多くして賃銀の下りは、自然の結果なるべし。凡そ人口の増減は食物の多寡に由るものなり、食物多きときは人口増し、食物寡きときは人口少く。之に由て是を觀れば食物多き時は労働者亦た從て多く、労働者多き時は賃銀亦た從て低し。此に只だ食物の多寡を異にするのみにして其他の點に於ては同一なる二國ありと假定して、則ち一の國に於ては人口増加して賃銀低く一の國に於ては人口少くして賃銀高きを見るべし。翻て暖國の狀を見るに、即ち土地豊穠にして食物多きを以て人口増加し易く、賃銀從て低きなり、而して富者は容易に労働者を使役するを得て益々富を加へ、而して貧者は人口の増加と共に其の賃銀を減じて益々貧に陥り

只た富者の命の儘に之れ驅使せらるゝに至るべし。是に於て富は即ち權力の歸する所、富の不平均は權力の不平均と爲り、權力の不平均は社會上及び政治上の不平均を生じ、一方は壓制の暴慾を逞し、一方は奴隸の悲境に陥るに至らんとするなり。

即ち印度に見よ、印度の暖國にて土地の豊穰なる五穀菓實の類は、殆ど勞働を待たずして自然の成熟に得べし。此の如く食物の饒多なるは生活の道極めて易く、婚姻盛に行はるべし。加ふるに暖國人の生長し易きは、益々人口の増加を促し、乃ち印度に於ては男十五歳女十二歳にして結婚し、甚しきは男十二歳女八歳にして婚するありと云ふ。其の人口の増加は劇しく賃銀の下落を來し、終に貧富の懸絶する、想ふべし。「メメー」と稱する書中に之れ有り、紀元前九百年の頃に至りて印度に於ける利息の最も低きもの十五割にして、最も高きもの六十割なり、而して一千八百十年の頃に於ては三十六割より六十割に至りしなりと。之を英吉利、スコットランドに比すれば四分一に當り、佛蘭西に比すれば三分一に當る、此の如く貧富の差は層々懸隔するに從ひ、一方は益々壓

虐を極め、而して一方は益々卑屈に陥るに至る。バックル氏は印度の乞食に關して説て曰く、此國には乞食に關する種々の制限あり、其の規則に曰く、若し賤しき階級の人にして高官の人と場所を同ふせんとせば外國に放逐すべし、然らざれば不名譽の刑罰を加ふ、若し又た此種の人民にして高官の人を罵るあれば直に其口を焼くべし、然らざれば其舌を抜くべし、太だしきに至ては學問を禁ずるの制限あり、其の制限に曰く、若し此種の人にして學問せんと欲し、經書を朗讀するを聴取せば、其耳に燃ゆる油を注ぎ込むべし、若し經書の文句等を暗誦せば死刑に處すと。豈に甚しからずや。而して埃及の如きも、其の人口の増加し易きことは、一人の小兒を養育して丁年に至らしむるに、僅に四弗に上らずと云ふ。マホメットの掾及に入りしや、アレキサンデリヤ街に於て四千人の青物賣を且撃せりと、而して一時人口の多き實に二萬餘街の内に充填せりと傳ふ。而して其貧富の懸隔して上位者の壓虐を極めしことは復た印度に譲らざりしが如し。バックル氏之を論じて曰く、此國に在ては人民の辛苦を輕じ、之を斃役すると牛馬の如し、之を證せんは夫の有名なる「ピラミット」「スファイ

ンクス」、其他宏大なる記念碑を見れば之を知了すべし、乃ち此等の建築にエレフアンタインよりセイス迄一大石を運搬するが爲め、三年間二千人の勞力者を用ひ、一基の「ピラミット」を建設せんが、爲め三十六萬人の勞力者を二十年間使役し、而して紅海の溝渠を造るに十二万人の生命を失へりと。而して又た一面に於ては職業を變ずべからず、政治に注目すべからず、職業を怠らば之を分ちて可なりと云ふ、是も亦た甚しからずや。而して他のメキシコ、ベリユ苔の暖國に於ける、亦た然り。メキシコ王宮を建つるに二十万の勞力者を使役しベリユ宮を建つるに二万の勞力者を五十年間使役せりと。而して平時之を束縛するの狀、印度埃及に譲らず。天然の府庫、幸か不幸か、氣候温暖なり、土地豊腴なり、食物饒多なり、生活安易なり、人口増加す、而して其の結果する所、此の如し。豈に意外の感應に非ずや。

更に動物金屬の人類に及ぼす影響如何を一言せん、野蠻の社會に在りては牛、羊、豕、駱駝、虎、猪、熊等或は人勞を省き、或は食物に充つべく、以て幾何か其の進歩を助くるの媒たるものありと雖ども、亦た頗る民業を害し、進歩を妨ぐるもの無きに非ず。印度に於ては虎の害太だしく、只だ一の虎にして十三村を荒らし其地方二百五十英里をして耕耘するを得ざらしめしことあり。又た千八百六十九年には亦た只だ一の虎にして百二十七人を害し、旬日大道の往來を阻絶せしめしことあり。スマールツラ島に於ても、時々虎の爲めに一材の荒壤を阻絶せしめしことあり。殊に印度毒蛇の害は、年々二万五千人の之が爲に死するものあり。オリノコ地方は毎朝人の相會ふとき、必ず昨夕の蚊は如何なりしやと禮す、其の蚊害の烈しきが爲めなり。又たベチユアナに於ては、蝗害の爲めに大に農作を損ずと云ふ。然るに金屬に於ては英國の如き、尤も石炭に富み、又た尤も鐵に富み之が爲め文明の事業を幫助すること尠からず。以て此等諸物の人類に及ぼす影響の尠に非ざるを察す可し。

其三

一國地理上の位置に關し、吾人の尤も注意すべきは、即ち其の隣國の如何に在るなり。乃ち英國を見よ、其の今日に於て霞蔚雲蒸の文明を致せしものは、固より數多の原由あるべしと雖も、亦た實に其の隣國の賜、大に與て力ありしを

知るなり。所謂る隣國の賜、即ち其の地理上の位置に由るに非ずや、今更輿圖を展べて英國地理上の位置を見るに、西に歐大陸を控して和蘭、白耳義、佛蘭西あり。而して南に伊太利、葡萄牙、西班牙あり。而して東方に當りて合衆國、中に就き其の尤も繁盛なる紐育府あり。英國が既往若しくは現在に於て此等の隣國より得し所の利益は、實に尠少に非ざるなり。即ち音樂美術は、南隣の西班牙、伊太利よりし。生活の便利物は、西隣の佛蘭西よりし。造船及び航海の術は、夙に和蘭よりす。而して其他興業上の利益に至りては、諸國より併湊す、且つ其のヒューゴノート人が宗教の爲めに佛蘭西を逐はれて英國に渡るや。彼等嘗て伊太利人より學び得し絹の製造法を齎らし來り、又たフレミング人が和蘭より渡りて羅紗製造を英國に傳へしが如き、或は夫の有名なる龍動府のロンバート街も、所謂るロンバード人の伊太利より渡りて、始めて銀行を立て性命保險會社等の創設を見るに至りしなり。此の如くにして英國は其の地理上の好位置より隣邦の開化を集成し、以て今日の文明を顯出せり。而して古昔フヒニシヤ、カーセーヂ等の如き、其の地理上の位置は渺茫たる一帶の蒼海に面せし

爲め、有名なる航海者を出し、海運の便なる、貿易盛んに行はれしこと、宛も今日の英國に於ける如し。而して現時歐大陸の形勢を察すれば、佛蘭西の如き、獨逸の如き、其の中央に屈踞し、四方強國の多き互に相ひ敵視して、隙に乗じ虚を撞かんとするものなきに非ず、是を以て其國は自ら尙武の風を作し、平時孜孜として軍備の擴張を怠らざるに至る、而して英國の如き、四方海水繞り、其民自然航海に馴れ、以て海軍の盛なる萬國比倫なく、稱して海上の皇帝と云ふに非ずや。一國の位置如何は、則ち以て其の國民に及ぼす所の感應の大なること、實に此の如きものあるなり。

以上講明する所、氣候、空氣、食物、地質、動物、金属等及び一國地理上の位置に由て、其の社會の如何に感應し來るやの解説なりき。而して余は更に一步を進めて自然の景象なる者の、其の社會に及ぼす所の感應如何を論せんと欲す。抑も氣候、食物、地質等は主として一社會の富の増加及び其の分配如何に向て、之が感應を與ふるものにして、而して自然の景象は、即ち又た尙ほ其の思想の増加及び其の分配如何に向て、之が感應を與ふと謂ふ可きなり。思想の増加及

び分配とは何ぞや、其の人民思想の如何なる點に導かれて發達し來るや、及び一般人民の思想は如何なる限度に於て働くやに在り。是に由て之を觀れば、氣候、質物、地食等の感應する所は、主として、人種有形的に於てするを知るべし、然り而して此の人類無形的に於て感應し來る所の自然の象景を分ちて。二種類と爲す。一は即ち人類の想像力を勵ます所の者にして、他の一は即ち人類の理解力を勵ます所の者とす。

今や如何なるものを論せず、總て人の恐怖、奇異、及び迷朦不甞にして、而して人力の支配し得べからざるの念を勵ます所のものは、皆な想像力を熾ならしむるの資料ならざるなし。此の場合に於て、人は其の自然の力大威靈を把て之を自己に比較し來して、自己の眞に微弱なるを反知し、而して竟に自劣の念を生ず、此念一たび生ず、即ち七穿八跳、自己を圍繞する所の無數の故障物來て彼等を束縛し、彼等思想の向ふ所を緊限す。是に至て其の人類の思想は、全く漠然として説明すべからざる不可思議物を以て壓倒され、復た其の偉大の景象を分拆審究するの念を滅斷するに至らしむるものなり。然るに今ま一方より

之を論するときは、若し自然の景象にして其働の小弱なるに對しては、人類漸く自任の念、即ち自己能く自己の力を恃み、幾何か自然を命令するの念を生し、他の自然物を把て之を精密に考推し、又た之に實驗を加ふるを得べし、而して之を穿索し、之を分拆するの念を長し、終に自然の現象を概括して其の由て來る所の原因を探り、以て天則を發見するに至る可し。

此の如く人類の思想は、全く自然の景象の感應し來りしものなりと觀察すれば、茲に乃ち甚だ著しき一大事實あるを發見すべし。他なし、土世の大開化する者は、暖氣内若しくは暖氣に接近せし所の地方に起りしこと是なり。試に看よ、此等の地方たるや、其の自然の景象甚だ高大にして畏仰すべく、而して孰れの點に於てするも人類に、尤も危険なる有様を帯びざるなし。實に其の亞細亞、亞非利加、亞米利加に在る社會の形象は、即ち歐羅巴に在る社會の形象より、甚だ恐る可きものなりしなり。而して是れ特に山嶽河流等、其他固定にして悠久なる自然の有形的景象のみ然るに非ず。尙ほ且つ他の地震、大風、傳染病等一時偶然に顯出する現象に就ても、亦た然り。凡そ是等の現象は、總て人

類の想像力を勵ます所のものとならざるはなし、何とならば即ち本來想像力は不知的に其の説明を爲し得ざる間に、徘徊するものにして、夫の暖氣の諸地方は、即ち此の説明し得ざる資料を以て充滿せるに非ずや。是を以て此等の暖地に於ては、想像力尤も熾にして、他の理解力を壓縮せり。左に之を例証せん。

夫れ人類の不安心を惹起する所の有形的現象にして、其の尤も大なるものは、地震なるべし。而して地震にして其の此の如き、不安心を惹起する所以のものは、單に震災の能く人命を奪ひ去るが爲めのみならず、又且つ其の不意の出來事にして豫め之を思議する能はざるに由らずんば非ず。之に加ふるに地震の起らんとするや、忽ち空氣の變動を催し、而して空氣の變動は直接に神経を動し、從て智力を弱殺するの傾きを有するものなり。故に地震多きは、想像力を増し、理解力を減し、以て其の平均を失はしめ、人類をして疑惑の底に陥らしむるものなり。現に秘露は他國に比して、尤も地震多しと爲す、而して秘露人を見るに、當に不安心の念を有し、實に或る場合に於ては殆んど制し得べからざる畏

怖、耐へ得べからざる憂愁とを以て、卑屈の境に在り。是れ他なし、秘露人は屢々其の避け得ず、又た解し得ざる危険即ち震災に遭遇して、常に自己の力の恃むに足らざるを信し、嘗て自任の精神無きに由るなり。其の之に乗して想像力の至る所、全く人外の力を恃み、即ち見る能はず、聞く能はざる者の存在を許し、而して人類の轉た聊賴無きを觀するに至る。更に歐羅巴を視るに、亦た免れざる者あり。乃ち西班牙、葡萄牙、伊太利を見よ、此の三國に於ては噴火山多く、地震爲めに少しとせず。是を以て疑惑の念を有するもの頗る多く、耶蘇教の如きすら此に於て腐敗を極めたり。今ま其の自然景象と其の想像力とに關係して、猶は一の明示すべき事例あり。凡そ之を論すれば、美術は即ち人類の想像力に訴へ、而して科學は即ち其の理解力の訴ふるものなり。此に著しき事例は、古來總ての油畫大家、及び殆ど總ての彫刻大家は、伊太利、西班牙半島に出でしなり。固より伊太利は許多の有名なる科學家を出だせしこと無きに非ずと雖も、之を其の美術家、及び詩人等の數に比すれば、九牛の一毛、有れども無きが如きを免れず。而して西班牙、葡萄牙に就て之を視るに、此の二國

の文學は、特に詩美的のものにして、葡萄牙亦た油畫家頗る多し。之に反して兩國に在て人類の理解力に訴へし學問は、總て之を怠り、近世に至るまで上頭に列すべき一つの科學家を見ず。是れ則ち歐羅巴の理學をして、今日の進歩に至らしめし勞は、兩國の人嘗て與らずと謂ふ可し。

要するに上世暖國の開化なるものは、非暖非寒の歐羅巴人が嘗て知り得ざる無數の困難と競争せり、則ち人類に有害なる動物、大風、洪水、雨、地震等の如きものは、絶へず上世の開化を惱ませしなり。而して其の人類に感應せし所、嘗て人命を害せしのみならず、又た其の思想を害し、以て想像力をして理解力を壓倒せしめ尊仰の情をして、探究の念を没せしめ、全く人外の力を恃むに至り、而して他の一面に於ては激烈なる傳染病等頻りに其間に起るありて、益々其の心情を怯弱ならしめ、尤も自己の恃むに足らざるを信するに至るなり。今之之を括論すれば、歐羅巴外の開化に在ては、自然の景象、其の想像力を強くして、而して理解力を弱めたり。然れども又た或る歐羅巴の國に於ても、其の暖國と同一の、結果を有せざるを得ざるものありと雖も、此等の國に在りて

は、却て其の結果に打ち勝つべきの原由ありて、而して依然理解力を發達せしめて、想像力を抑ゆるを得たり。其の理を説明するは、敢て困難の業に非ず。乃ち一方に印度を擧げ一方に希臘を擧げて。之を證明すべし。

其 四

今にして印度古代の文學を討究するも、猶ほ能く當時に於て想像力の熾なりしことを證するに足るものあり、則ち詩に於て之を見る。實に當時の文學なる者は、一つとして詩的ならざる無し、甚しきは文法、歴史、法律、醫學、數理、哲學等に係るものまで、總て詩的に之を顯はし、有名なる學者の眼光は、専ら此一邊に注射し、復た詩を除外して他に文章なきが如し。然れども是れ只た其の文字上に顯れ來る所の印度文學の形體に就て之を言ふに過ぎず、今之翻て其の形體底に入りて精神の如何を咀嚼するに、是も亦た一として詩的の想像ならざる無きなり。別言之を説かば、其の精神は人の道理に訴ふる者に非ずして、人の感情に投する者ならざる無し、最も皆な詩のみ。其の地理書の如き、其の年代記の如き、必ずや人の理解力に訴へざるへからざる書志に在てすら、猶ほ

且つ想像力を恣にして、人の感情を惹起せんとするの資たるに過ぎず。當時想像力の熾なりしことを想見すへからずや。

因て之を其の年代記の記する所に視るに、上古人間の生活は普通八萬歳の壽を保ち、而して其神聖なる高僧は、十萬年以上に及びしとあり、即ち一の王にして或は二萬七百年間。或は六萬六千年間位に在りとあり。中に就き尤も著しき王は、頗る有徳の人にして聖人と呼ばれしなり。此王世に在ること二千萬年、位に有ること六百三十萬年なりとあり。所謂る年代記にして此の類の如し、他は知るべきのみ。抑も印度に於て此の如く想像力の熾なりしは、山河環象の絶大に由來するなり。見よ、巍然天に抜く喜馬拉亞山は北境に崛起し、四時氷雪の消する無し。安日河其の雪洞より起り、渾渾滔滔として海に注ぐ、皆な人力の得て製すべからざるものなり。更に鬱鬱たる大森林は雲垂れ霧深く、人の通行し得べきに非ず、森盡きて茫渺たる沙漠あり、俯仰觸目、渾て是れ人力の微弱にして、到底自然に打ち勝つべからざるを示すに足らざるものなし。而して其の一帶の沿岸は、安日河口より印度半島の南端に至るまで、一つの安全なる

良港を見ず、颯然として印度洋上より襲ひ來る烈燄は、曾て歐洲人の夢想する能はざる所にして、其の猛勁人を巻く、眞個自然の絶大に驚倒せざるものなしと云ふ。印度人が冥漠憑るべからざる想像を逞ふして、卑屈恐怖の淵に陥りしは、職として此の環象に之れ由る。

轉して希臘を見るに、印度と同じく一の半島を成すものなり、而して大に相ひ反するものあるを知るなり。乃ち印度に於ては萬有の景象雄大にして怖る可きを見るも、希臘の景象は微小與みし易きを見よ。山に在て喜馬拉亞の三分一に足らず、四時氷雪を存する能はず、河に在て安日の兒孫に當らず、夏時水涸れて川骨の露るを免れず。知るべし、山登るべからざるものなし、川渉るべからざるものなし、氣候人に可なり、颶風樹を抜かず、地震無きに非ず、毒獸無きに非ず、只だ印度に比すれば殆ど無きが如し。其の境界はポーチュガル王國より小にして、印度の十四分一許に過ぎず。東に小亞細亞あり、西に伊太利あり、南に埃及あり、風濤容易之に航するを得べし。此の如く印度希臘の兩國は同じく半島を成し、同じく海灣に濱するものなりと雖も、其の四圍環象の異なるこ

とは、上來叙述せし所の如し。而して此の著しき有形的環象の差異は、必ずや又た其の兩國人民の思想に著しき影響を興へずんば非ず。何となれば則ち人類の思想なる者は一は心自然の原動力に基くものなりと雖も、一は又た之を有形的環象に向て惹導さるるものなればなり。此に由て之を觀れば、兩國の環象の異なることは、必ずや其の人類の思想に於て結果し來らざる可からざるなり。乃ち知る、印度の環象は其の人類に向て恐怖の念を勵まし、希臘の環象は其の人類に向て自任の念を勵ます。夫れ卑屈は恐怖に起り、進取は自任に起る、兩國人民の思想に一大鴻溝あるは、則ち兩國環象の一大逕庭あるに由るなり。寔に印度に在りては無限の障害物面前に紛集し、此等は皆な怖るべく、而して又た理解し易からざるものなり。人の疾痛慘虐に逢ふや、必ず叫喚して人力以外の力に助授を求む、印度人の如き是なり。其の所因たる全く人類理解力の區域を飛越するものにして、之を構成するに想像力を以てす。而して其の極まる所、獨り想像力の大に發達して、終に他の理解力を壓倒し、理性感情の平均を失ふものなり。希臘人の如き之に異なり、其の環象の雄大ならずして、他の恐怖を

惹くに足らず、自然の危險物極て稀に、必ずしも人力の理解し得べからざるものあるを見ず。是に於て希臘人の思想は理解力多くして懷疑の念少し、争ふて自然の原因を探りて其の結果を究めんと欲するに至り、所謂物理学なる者は、實に始めて此人類間に起りしなり。希臘人は此の如く自己の力を恃み、頗る獨立の思想を發達して他の印度人の卑屈恐怖に似ず。今試に希臘人の宗教と印度人の宗教とを把て之を觀るに、亦た其の大に趣を異にするを見るなり。

因て之を印度の古事紀に視るに、印度には「シバー」なる神あり、此神の凶獍恐るべきは、蛇を屈して帶と爲し、虎を剥ぎて衣と爲し、而して手に頭骨を持し、又た人骨を以て其の首飾と爲し、三目あり、恰も狂人の如く以て世界を漂泊すと記載す。而して此の怖るべき神は、又た怖るべき妻女を有す、之を「ドマーガー」と稱す、體色深紺にして手掌赤し、云ふ手掌の赤きは人血を掬飲するを意味すと、而して四手あり、其の一手は巨人の頭骨を握り、舌を飛び出し、腰圍に犠牲物を纏ひ、首に頭骨を貫きたる捻珠を垂る。蓋し一として恐怖の想像に基かざるもの無し。然るに今や希臘の宗教如何を討究するに其の尤も幼稚の

時代に在りてすら、印度の如き怪々驚々の神は、痕跡だに存せず。是れ即ち希臘人に在ては、恐怖の思念稀にして、普通之を顯はすこと無し。故に其の宗教も、自ら恐怖の元素を帯びざるなり。一言にして之を蔽へば、印度の開化は人類と神との間を遠ざけ、而して希臘の開化は人類と神との間を近づけ來るに在るなり。乃ち看よ、印度に於ては「ビシュー」に四手あり「ブラマー」に五頭あるか如し。其の人類を遠ざかるに隨ひて、怖るべきの形狀を示すこと益々多し。然るに希臘の神は常に普通人類の形狀を有し、只た其の人類と相ひ異なる點は、力量強大にして、能力圓滿なりと言ふに在り。要するに希臘の神は極善極美なる人類を標準とするものにして、其の愛すべく敬すべきを見るも、復た其の怖るべきを見ず、是れ希臘人は人類の威を高め、印度人は之を鄙め、兩者の趨向する所、判然として別あり。故に希臘人は理解力を以てし、印度人は想像力を以てし、希臘人の重んずる所は人力に在り、印度人の重んずる所は人外の力に在り、而して是れ皆な兩國人象の相ひ異なる所、終に兩國人類の思想に向て結果し來りしものなりと知る可し。

上來論述せし所は、バックル氏の所説に參して、専ら有形的環象の其の人類に感應する如何を明かにせしものなり。然れども人類は獨り有形的環象の感應する所たるのみならず、更に又た無形的環象の感應する所たるものなり。フオクス氏曰く一社會の環象なる者は、其の適合せざるを得ざる有形無形又は直接間接を問はず、總ての事情を含蓄す、即ち一國の氣候、地質、動物、植物、山海、金屬、地理上の位置海岸の延長、自然の景象如何、及び其の社會の文學、傳説、記念の存保せる思想、感情、風俗、習慣、及び其の隣國に關する位置、并に其の社會に及ぼす同時代の外國の風俗、習慣、思想等を含蓄すと、寔に然り。若し然らずと言はば、則ちトルコ國の如き殆ど、世界第一等の地に位する美國にして、人智進まず政体惡しきは如何、又た北米の如き金山あり銀山あり、且つ自然の産物に富む他に比類なき國にして、白人渡來の以前、彼れが如くなりしは如何。又た濠洲現今の状態と過去數十年前の状態と著しき相違あるは如何、是等に反對なる例は和蘭を見よ、此國は氣候宜しからず、鑛山多からず、自然の産物豊饒ならず、且つ洪水の至るあれば全國の三分の二忽ち水底に没す、然る

に文化駭々として開明國中に比肩するは如何。知るべし國家の盛衰、人智の開否は單に有形上の事情の源因なるのみならずして、即ち政治、宗教、教育、文學、風俗、習慣及び人種の固有なる性質等に由るや明白なり。乃ち所謂文明開化たるものは、實に人力が自然力に打ち勝ち、而して之れを利用したるの結果に非ずや、余は將に他日を待て、以上の説明したる元則を適用して、現日本國の狀態を論せんと欲するなり。

(千頭清臣)



孝女白菊の歌

その一

阿蘇の山里。	秋ふけて。	眺さびしき。	夕まくれ。
いつこの寺の。	鐘ならむ。	諸行無常ど。	つげわたる。
をりしもひとり。	門にい。	父を待つなる。	少女あり。
年は十四の。	春あさく。	色香ふくめる。	そのさまは。
梅かさくらか。	わかねども。	未たのもしく。	見えにけり。
父は先つ日。	遊獵にい。	今猶おどづれ。	なしとかや。
軒に落ちくる。	木の葉にも。	笥の水の。	ひいきにも。
父やかへるど。	うたがはれ。	夜なくぬふる。	ひまもなし。
わきて雨ふる。	さ夜中は。	庭の芭蕉の。	音しげく。
鳴くなる虫の。	こゑは。	いとあはれを。	そへにけり。
かゝるさびしき。	夜半なれば。	ひとりおもひに。	たへざらむ。

菅の○小○笠○に○
八○重○の○山○路○を○
さ○ら○ぬ○も○し○げ○き○
俄○に○空○の○
父○を○し○た○ひ○て○
遠○く○あ○な○た○を○
い○づ○こ○の○里○か○
松○杉○あ○ま○た○
讀○經○の○聲○の○
籬○も○な○か○ば○
月○の○か○げ○の○み○
門○べ○に○立○ち○て○
ま○つ○ま○ほ○と○な○く○
い○か○に○あ○や○し○と○

杖○と○り○て○
わ○け○ゆ○け○ば○
袖○の○露○
雲○は○れ○て○
迷○ひ○ゆ○く○
な○が○む○れ○ば○
わ○か○ね○ど○も○
立○ち○な○ら○び○
聞○ゆ○る○は○
や○れ○く○づ○れ○
さ○え○く○て○
お○と○な○へ○は○
年○わ○か○き○
思○ひ○け○む○

い○で○ゆ○く○さ○ま○ぞ○
雨○は○い○よ○く○
あ○は○れ○い○く○た○び○
月○の○ひ○か○り○は○
こ○い○ろ○の○闇○に○は○
燈○火○ひ○と○つ○ぞ○
そ○れ○を○し○る○べ○に○
あ○や○し○き○寺○の○
い○か○な○る○人○の○
庭○に○は○人○の○
梢○の○あ○た○り○
か○す○か○に○應○ふ○
山○僧○ひ○と○り○
し○は○し○見○て○あ○り○

あ○は○れ○な○る○
ふ○り○し○き○り○
し○ほ○る○ら○む○
さ○し○ろ○へ○ぞ○
か○ひ○ぞ○な○き○
ほ○の○み○ゆる○
た○ど○り○ゆ○く○
そ○の○う○ち○に○
お○こ○な○ひ○か○
あ○ど○も○な○く○
風○ぞ○ふ○く○
聲○す○な○り○
い○で○来○ぬ○
こ○な○た○を○ば○

少○女○は○そ○れ○と○
妾○は○あ○や○し○き○
ゆ○く○へ○を○君○が○
少○女○の○姿○を○
柳○の○髪○の○
山○僧○こ○し○ろ○や○
ぬ○し○は○い○つ○こ○の○
お○り○し○も○風○の○
軒○の○梢○に○
少○女○は○い○よ○と○
妾○は○も○と○は○
は○し○め○は○家○も○
月○と○花○と○に○
一○と○せ○い○く○さ○

し○る○よ○り○も○
も○の○な○ら○ず○
し○ら○し○な○ば○
よ○く○見○れ○ば○
み○だ○れ○た○る○
と○け○ぬ○ら○む○
た○れ○な○る○か○
ふ○き○す○さ○び○
む○さ○い○び○の○
た○へ○が○た○く○
熊○本○の○
富○み○さ○か○え○
身○を○よ○せ○て○
は○じ○ま○り○て○

や○か○て○ま○ち○か○く○
父○を○た○つ○ね○て○
教○へ○て○よ○か○し○
に○ほ○へ○る○花○の○
此○世○の○も○の○に○も○
少○女○を○お○く○に○
つ○ば○ら○に○か○た○れ○
あ○た○り○の○け○し○き○
鳴○く○な○る○聲○さ○へ○
落○つ○る○涙○を○
あ○る○武○士○の○
こ○い○ろ○ゆ○た○か○に○
た○の○し○く○世○を○ば○
青○き○千○草○も○

す○み○よ○り○
き○つ○る○な○り○
そ○の○ゆ○く○へ○
か○ほ○ば○せ○に○
あ○ら○ぬ○な○り○
さ○そ○ひ○ゆ○き○
家○も○名○も○
も○の○す○ぶ○く○
き○こ○ゆ○な○り○
か○き○は○ら○ひ○
む○す○め○な○り○
あ○り○け○れ○は○
お○く○り○に○き○
血○に○ま○み○れ○

吹きくる風は。親は子をよび。にげゆくさまは。この時母ど。ながめられけり。人のことばに。きくよりいと。わけくれ父を。雲井の雁は。母はおもひに。日おとくくに。父の生死も。夢にゆめみし。いかにつれなき。

なまぐさく。子はおやに。おはれども。諸共に。朝夕に。父上は。胸つぶれ。まつほどに。かへれども。たへかねて。おもりゆき。わかぬまに。こちして。わが身ぞと。

砲のひいきも。わかれくいで。うしどもいはむ。阿蘇の奥まで。なれしふる郷。賊にくみして。袖のひるまも。はやくも秋の。音つれだにも。やまひの床に。つひにはかなく。母さへかへらす。おもへは今猶。思ひかこちて。

たえまなし。四方八方に。かなしども。のがれしが。その空を。ましますと。あらざりき。風たちて。なかりけり。つきしより。世をさりぬ。なりぬれは。身にしむ。ありつるに。

神のたすけか。母のうせぬと。浮世のならひと。先つ目かりにと。またもこゝろに。妾の姓は。父は昭利。行ひあしく。風のあしたも。いづこの空に。これをきくより。ものをもいはず。とにもかくにも。この山僧の。

去年の春。聞きしより。なぐさめて。いてしより。たのみなく。本田なり。母は竹。父上の。雨の夜も。まよふらむ。山僧は。墨染の。この寺に。こゝろには。

父は家にそ。たになげきて。この年月は。待てどくらせど。かゝる山路に。名は白菊と。兄は昭英。いかりにふれて。しのばぬ時の。今猶ゆくへの。俄に顔の。袖をしぼりて。一夜あかせと。ふかき思ひの。

かへり來し。ありけるが。過したり。かへらねば。たづねきぬ。よびにけり。その兄は。家出せり。なきものを。わかぬなり。けしきかへ。泣き居たり。すゝめてし。あるならむ。

少女はそれと。さすがに否とも。ぬる間ほどなく。枕邊ちかく。われあやまちて。谷は荆棘の。明日さへしらぬ。子を思ふてふ。言葉終らぬ。呼ばむとすれば。夢かうつゝか。曉ちかく。夜もやうく。

その二

知りたるか。いなみかね。戸をあけて。さしよりに。谷におち。おひしげり。わがいのち。夜の鶴。ろのさきに。あどもなく。あらぬかど。なりぬらむ。明けはなれ。

はた知らざるか。その夜はそこに。あやしく父ぞ。聲もあはれに。今は千尋の。いでゝきぬべき。せめてば此世の。泣々こゝには。裾ひきとめて。窓のどもしび。思ひみだれて。木魚の聲も。心もなにか。

知らざれど。かりねせり。入りきたる。涙ぐみ。底にあり。道もなし。わかれにと。たづねきぬ。父上ど。影くらし。あるほどに。たゆむなり。ありあけの。

月のひかりの。少女は寺を。たどりてゆけば。道のゆくての。ふきくる風の。岩根こいしき。みやまの奥にや。梢のあたり。木かけをはしる。こいは高根か。わか身をのせて。はるく四方を。父はいづこに。をりしも後より。

影おちて。たち出て。遠かたに。枯尾花。身にしみて。山坂を。なりぬらむ。きこゆるは。けだものは。しら雲の。はしるかど。見わたせば。おはすらむ。聲たて。

庭のやり水。またもの暗き。きつねの聲も。おとさやくに。さむさもいと。のぼりつかりつ。人かけだにも。いかなる鳥の。熊てふものや。袖のあたりを。思へばいどい。山また山の。かへりみすれど。山賊あまた。

音すおし。杉村を。きこゆなり。うちなびき。まさりけり。ゆくほかに。見えぬなり。こゑならむ。あるならむ。すぎてゆく。おろしや。はてもなし。かひどなき。よせきたり。

にぐる少女を。
あなおそろしど。
山彦ならで。
山のかげちを。
ともはなれつゝ。
やれかゝりたる。
あたりは木々に。
内よりしれもの。
めでたき得物と。
かねてもうけや。
のみつくらひつ。
頭とおぼしき。
汝のこゝに。
今よりわれを。

ひきとらへ。
さげべども。
外にまた。
をれめぐり。
ゆくほどに。
竹の垣。
どざされて。
いできたり。
おもひけむ。
したりけむ。
するさまは。
ものひとり。
どらはれて。
夫とたのみ。

かたくろの手を。
人なき山の。
こたへむものも。
谷の下道。
あやしき家にぞ。
くづれがちなる。
夕日のかげも。
少女のすかたを。
ほてうちわるふ。
酒と肴と。
世にいふ鬼に。
少女のもどに。
きたるは深き。
この世のかきり。

いましめぬ。
おくなれば。
なかりけり。
ゆきかよひ。
いたりける。
苔の壁。
てりやらず。
見てしより。
さまにくし。
とりいでゝ。
ことならず。
さしよりて。
えにしなり。
つかへてや。

我家に久しく。
幾千代かけて。
かなでゝわれに。
かりにも辭まむ。
針の林を。
少女はいなど。
なくく小琴を。
風や梢を。
軒端を雨や。
いとも妙なる。
いともめでたき。
嵯峨野の奥に。
父のゆくへを。
峯のあらしか。

ひめおける。
ちきりせむ。
きかせてよ。
その時は。
わけさせて。
おもへども。
ひきよせて。
わたるらむ。
すぎつらむ。
しらべには。
手ぶりにほ。
しらべたる。
しのぶなる。
松風か。

いとも妙なる。
今日のむしろの。
唄ひてわれを。
劔の山に。
からきうきめを。
いなみがたくや。
調べいでしぞ。
雁やみそらを。
岸にや波の。
かしこき神も。
ひろめる龍も。
想夫戀には。
心はなにか。
たづぬる人の。

小琴あり。
よろこびに。
なくさめよ。
のぼらせて。
見せやらむ。
思ひけむ。
あはれなる。
ゆくならむ。
よせくらむ。
まひやせむ。
をさるらむ。
あらねども。
かはるべき。
琴の音か。

ひどり木蔭に。たつぬる人の。しらべのをはる。刀のひかりに。さられてさけふ。きりて入にし。身に纏ひしは。わななく少女の。なおどろきそ。いざこまやかに。父のいかりに。東の都に。あらし波路の。淡路の島を。

たゝすみて。つま音を。折しもあれ。おろれけむ。ものもあり。その人の。墨染の。手をばどり。おどろきそ。かたらなむ。ふれしより。のほらむ。かぢまくら。こぎめぐり。

きゝ居し人や。いよゝ心に。きりていりしぞ。とみのことや。透れてにぐる。すがたはうれど。ころもの袖と。月のかけさす。われは汝の。心をしつめて。こゝろにおもふ。筑紫の海をば。かさねく。て。武庫の浦にぞ。

たれならむ。さどりけむ。いさましき。おちにけむ。ものもあり。わかねども。まられたり。まどにきて。兄なるぞ。きゝねかし。ことありて。船出しぬ。須磨明石。はてにける。

こゝより陸路を。並木のあたり。都につきし。朝夕ならひし。父のめぐみを。悔しきことのみ。こゝろあらため。いくさのありし。見渡すかきりは。尾花が袖も。こや我家の。照らす夕日の。たのみすくなき。浮世のここの。

たどりしに。風ふきて。その後は。千々のふみ。しるおとに。おほかれば。仕へむと。あとなれば。野となりて。うちやつれ。あとならむ。かけうすく。我身ぞど。いとはれて。

ころはやよひの。衣のろでに。たゝ文机に。はじめて人の。母のなさを。なきてろの日を。ふる里さして。ろのさびしさぞ。むかしのかぎも。露の玉のみ。そや父母の。ちまたの柳に。思ひわふれば。かの山寺に。

末なれば。花うちる。よりおつゝ。道しりぬ。しるたびに。おくりけり。かへりしに。たゝならぬ。あらしふく。ちりみたる。死體ならむ。鴉鳴く。わぶるほど。のかれけり。

朝。夕。讀。經。を。
よ。み。ゆ。く。文。字。の。
昨。夜。そ。な。た。の。
わ。が。う。れ。し。さ。は。
た。い。に。わ。が。名。を。
名。の。り。か。ね。た。る。
あ。か。つ。き。ふ。か。く。
賊。を。追。ひ。き。て。
こ。な。た。を。助。け。し。
こ。の。後。何。の。
彼。の。世。に。あ。り。て。
ぬ。く。手。も。見。せ。ず。
少。女。は。見。る。よ。り。
な。き。つ。さ。げ。び。つ。

す。る。ぶ。と。に。
數。よ。り。も。
た。づ。ね。き。て。
そ。も。い。か。に。
名。の。ら。む。と。
身。の。つ。ら。さ。
わ。か。れ。し。を。
今。こ。ゝ。に。
上。か。ら。は。
お。も。あ。り。て。
ま。た。な。む。と。
一。す。ぢ。に。
聲。た。て。い。
な。い。さ。む。る。

果。な。き。こ。の。み。
し。げ。き。は。袖。の。
か。た。る。こ。と。ば。を。
わ。が。か。な。し。さ。は。
お。も。ひ。し。か。ど。も。
名。の。る。よ。り。な。ほ。
道。に。て。こ。と。も。や。
汝。を。か。く。は。
心。に。の。こ。る。
父。に。ふ。た。ゝ。び。
い。ひ。も。果。て。ぬ。に。
切。ら。む。と。す。な。り。
か。た。く。う。の。手。を。
こ。い。ろ。の。底。や。

百二十
か。こ。た。れ。て。
な。み。だ。な。り。
聞。き。し。と。き。
ま。た。い。か。に。
し。か。す。か。に。
つ。ら。か。り。き。
あ。り。な。む。と。
た。す。け。た。り。
こ。と。も。な。し。
ま。み。え。ま。し。
劔。太。刀。
わ。が。腹。を。
お。さ。へ。つ。い。
い。か。な。ら。む。

を。り。し。も。空。の。
雲。間。さ。え。ゆ。く。

その三

霜。し。ろ。く。
月。か。け。に。

夜。半。の。嵐。の。
か。り。か。ね。遠。く。

音。た。え。て。
な。き。わ。た。る。

四。方。に。き。こ。ゆる。
あ。り。あ。け。月。夜。
し。づ。か。に。そ。こ。を。
軒。の。松。風。
手。を。ば。と。ら。れ。つ。
ゆ。ふ。べ。の。賊。の。
山。僧。そ。れ。と。
お。の。れ。は。そ。こ。に。
し。げ。る。林。を。
少。女。は。か。ら。く。
き。ら。れ。て。痛。手。は。

虫。の。音。も。
か。げ。き。え。て。
た。ち。出。て。い。
聲。か。れ。て。
と。り。つ。し。て。
む。れ。な。ら。む。
知。り。し。か。ば。
と。ど。ま。り。て。
を。れ。め。ぐ。り。
に。げ。し。か。ど。
お。は。せ。ぬ。か。

あ。は。れ。よ。わ。る。と。
峯。の。よ。て。雲。
あ。た。り。の。さ。ま。を。
あ。れ。た。る。庭。に。
か。た。み。に。山。路。を。
あ。と。よ。り。あ。ま。た。
早。く。も。少。女。を。
き。り。つ。き。ら。れ。つ。
谷。の。か。け。橋。
あ。と。に。心。や。
兄。上。さ。さ。き。

き。く。ほ。と。に。
わ。か。れ。ゆ。く。
な。が。む。れ。は。
霜。し。ろ。し。
す。き。ゆ。け。ば。
迫。ひ。て。き。つ。
遁。し。や。り。
た。ゝ。か。ひ。つ。
う。ち。わ。た。り。
の。こ。る。ら。む。
ま。し。ま。せ。と。

はるかに高根を。
道のかたへに。
涙なからに。
うここに柴かる。
いかにあわれど。
ここのよしをば。
翁は少女を。
深くとさし。
片山里の。
木々の木葉の。
あらしは時雨を。
父のゆくへに。
深きなさけに。
ひまゆく駒の。

うちながめ。
しめゆひし。
ぬかづきて。
翁あり。
おもひけむ。
たづねしに。
なぐさめて。
柴の門。
しつけさは。
ちりみだれ。
さるひきて。
兄の身に。
ほだされて。
あしはやみ。

いのぶこいそぞ。
小祠はたれを。
いのるもあはれ。
なくなる少女を。
こなたに近く。
まことかなしき。
我家にともなひ。
なかばやれにし。
ひるなほ夜に。
まがきの菊の。
虫のなく音も。
朝夕こゝろに。
暫しそこには。
二とせ三とせは。

百二十二
あはれなる。
まつらむ。
その神に。
見てしより。
よりてきぬ。
ことなれば。
かへりけり。
竹の垣。
ことならず。
いろもつく。
いとさむし。
かゝれども。
とまりぬ。
夢の間に。

はかなくすぎて。
み山の里の。
色香はいかてか。
若菜つみにど。
ならのはやしに。
里の長なる。
媒人ひとり。
翁はいたく。
少女はかくど。
袖もて顔は。
思ひまはせは。
妾をちかく。
あるとし秋の。
つゆけき野路を。

またさらに。
ならひにて。
うせやらむ。
うちむれて。
一もどの。
なにがしは。
たのみきて。
かしてみて。
きしとき。
おほへども。
母上の。
めしたまひ。
末つかた。
わけくれは。

のどけき春は。
髪もすがたも。
あはれ名におふ。
ちかき野澤に。
花のまじるが。
はやくもるれど。
長きちぎりを。
こへるまに。
うのおどろきや。
とめもかねつ。
此世をさらむ。
いひのこされし。
み墓まうでの。
白菊あまた。

百二十三
めぐりきぬ。
みだせども。
菊の花。
ゆく道も。
おどくなり。
きつらむ。
もとめしが。
ゆるしたり。
いかならむ。
その涙。
そのをりに。
ことぞある。
かへるさに。
さきみでり。

にはへる花の。かゝるめでたき。悲しきことにて。菊さく野邊にて。千代に八千代に。更に告ぐべき。汝の兄ども。はやく家出を。この世にあらば。かへりきたらむ。夫といひ妻と。母のいまはの。いかでか教へを。さはいへこゝに。

うの中に。子だからを。ありけりど。あひたるも。榮えよと。事こそあれ。たのむべく。なしてより。かりへ來む。そのをりは。よばれつゝ。言の葉は。そむくべき。來てしより。

あはれなく子の。いかなる親か。ひろひとりしは。深きちぎりの。やがてうの名を。汝はたえて。夫ともいふべき。今にゆくへは。老いてる父も。ゆくすゑかけて。この世たのしく。今なほ耳に。いかでか教に。翁のめぐみは。

聲すなり。すてつらむ。うなたなり。あるならむ。おはせにき。しらざれど。人こそあれ。あかねども。ましませは。ちざりあひ。おくりてや。のこりけり。そむかれむ。いとふかし。

とやせむかくと。かれを思ひて。思ふおもひは。をりしも媒人。にしきの衣。少女の心の。見つゝ翁の。時雨ふりきて。いつこそさして。村里どほく。死を急ぎつゝ。雲井をかへる。にぐる少女の。橋のたもとに。

人しれず。なきしづみ。千々なれど。いりきたり。あやの袖。かなしきを。よろこべは。てる月の。ゆくならむ。はなれきて。ゆきゆけば。かりがねも。こゝろには。身をかくし。

思ひまどふも。これと思ひて。死ぬるひとつに。少女に贈りし。實にも眩ゆく。わたりの人は。隣の姫も。かげもおぐらき。少女は忍びて。川風さむき。水音すこく。小笹をわたる。追手どのみや。我こそしかたを。

あはれなり。うちなげき。きだめてむ。るのものは。見えにけり。しらざらむ。來て祝ふ。さよ中に。家出しぬ。小笠原。むせぶなり。風の音も。開ゆらむ。ながむれば。

遠里小野の。下に流るゝ。あわれかなしき。死ぬるいのちは。さこそなげかめ。父上ゆるさせ。この世をわれは。南無阿彌陀佛と。まちてとよびて。おぼろ月夜の。春秋かけて。夢かうつゝか。里のわらべの。とひつとはれつ。

ともし火の。川水の。その音は。をしまねど。父上の。たまひてよ。先だちて。いひすてい。引きとめし。かけくらく。しのびてし。まぼろしか。おきすすぶ。来し方を。

影より外に。底のこゝろは。少女が死をや。かくとしらさむ。いかにかこたむ。兄上うらみな。母のみもとに。とばむとすれば。人はいかなる。さやかにそれど。兄と少女は。思ひみだる。笛の音遠く。聞きつきかれつ。

百二十六
かげもなし。知らねども。さそうらむ。そのおりは。わが兄は。したまひを。待てあらむ。うしろより。人ならむ。わからねど。しりにけり。さ夜中に。きこゆなり。ゆくすえを。

一夜かたりて。わがふる里の。野こえ山こえ。日敷もいくか。家にかへりし。山ほどぎす。しげる夏草。むかししのぶの。妻戸おしわけ。こなたのおとろき。父上さきくと。ことをこまかに。兄のいましめ。親子の三人。

あかせども。こひしさに。ゆきゆけば。ふる雨に。ろのをりは。なきしきり。ふみわけて。露ちりて。内みれば。いかならむ。音なへば。開きてより。ゆるしやり。うちつとひ。

猶言の葉や。道をいろぎて。かすみもなびき。ぬれてやつる。五月おろにや。かどの立花。軒端をちかく。袖にかゝるも。あやしう父は。かなたの嬉しさ。子等もさきくと。父もあはれど。妹のみさを。すぎにしと。

百二十七
のこるらむ。かへらむと。花もさく。たび衣。ありつらむ。かをるなり。立ちよれば。あわれなり。ましましき。またいかに。こたふなり。おもひけむ。ほめにけり。語りあひて。

く。む。盃。の。我あやまちて。木の實を拾ひ。ある日のあした。なかくかゝれる。なくなる聲の。神のたすけど。嬉しどあたりを。木立のしげき。浮世のならひど。人になさけの。父のことばを。うれしど兄の。千代に八千代ど。

ろ。の。う。ち。に。谷におち。水のみて。おきいて。藤かつら。何となく。よぢのぼり。見わたせば。山かげに。いひながら。うせはて。聞き居たる。たちまへば。いひく。て。

う。れ。し。き。か。け。も。のぼらむすべも。ながき月日を。峯のあたりを。上の猿の。こゝろありげに。始めて峯に。さきのましらは。蟬の聲のみ。うき世の常とは。獸にのこるぞ。二人の心や。たのしと妹も。どもによろこぶ。

浮。ふ。ら。む。あ。ら。ざ。れ。ば。お。く。り。に。き。見。あ。ぐ。れ。ば。な。き。さ。け。ふ。聞。も。れ。ば。の。ぼ。り。え。つ。跡。も。な。く。き。こ。ゆ。な。り。い。ひ。な。が。ら。あ。は。れ。な。る。い。か。な。ら。む。う。た。ふ。な。り。折。し。も。あ。れ。

後。の。山。の。

ま。つ。か。枝。に。

夕。日。か。い。り。て。

(萩の倉) た。つ。ぞ。な。く。



柿本人麿

文學は國家の花なり。壯烈鬼神を感せしめ、悲哀嫠婦を泣かしめ、言外の餘韻、諷詠の間に溢れ、國民の特性文字の上に躍出するに至ては、韻文の能事畢はれりといふべし。されば泰西諸國人の精緻なる、茲に深玄委曲の文學あり。支那人の浮誇なる、茲に悲壯雄大の文學あり。大和民族の忠誠なる、豈に茲に優美莊重なる文學なきを得んや。而してホトトギス出で、泰西の韻文始めて光輝を放ち、李杜出で、支那の詩体全く備はれり。之を我國に求むるに、韻文壇上の曉星は吾人之を柿本人麿呂に歸せしむるに躊躇せざるなり。

一人には一人の特性あり、一國には一國の特性あり、其發して韻文となるものにも亦自から特性ありて存するを見る。蓋し文學は人の至誠に發して直に他の肺腑に貫徹す。以て人心を和ぐべく。以て人心を激すべし。剛ならしめ、柔ならしむるも亦敢て難しとなさず。文學の人心に影響すると此の如し。獨立國實に獨立の文學あるを要するなり。彼一國學つて佛蘭西文學に心醉し、國家の特

性幾んど漸滅に歸せんとする際に當り、慨然として爽活豪快なるチャーマン、ランゲージを以て能く獨逸人の語氣、性情を歌ひ出したるレッシングが、今に至るまでその國人に追慕せらるゝと決して偶然にあらざるを知るべし。我國人が機敏にも能く外國の長を取りて我國の短を補ふ際、時に或は誤て、彼人情風俗の異なるを察せず、直に有形のまゝを採用して方圓相容れざる觀を呈すとありしも、今來古往、純粹なる日本文學のあるありて、國家と共に能く獨立の體面を存せるは、實に國民の心をして強からしむるに足る。殊に人麿呂の歌の如きは日本純粹の言語を以て日木男兒の眞面目を發揮し盡して復餘蘊なきを見るなり。

凡そ物其平を得ざれば則ち鳴る。宗教心の萌芽は外界の怪異に基づき、詩歌の萌芽は心情の活動に成る。陽春の和風に促され、梅花の奇香に誘はれて黃鳥の心始めて動き、幽谷を出で、喬木に遷り、發して啾々の聲をなすものは天地の氣自から飛禽の徹に及べるなり。凜冽たる霜露に沾され、爽颯たる金風に吹かれて蟋蟀の心爲に惹かれ、枯草の下、殘壁の底、發して啾々の音をなすものも

亦天地の氣自から草蟲の細に加はれるなり。融和の氣に感じては、聲皆樂しく、蕭殺の氣に感じては音自から悲しく、天地自然の致す所、節奏悉く備はりて、萬物すべて歌はざるものなし。無爲にして化する太古の世といへども、苟くも心情ある以上は、百般の形象に惹かれて感情自から節奏をなして現はるゝは自然の勢なり。詩歌が諸種の文學に先んじて早く萌芽を太古の世に現はすも亦怪しむに足らざるなり。高天原の時代はいざ知らず、素盞鳴尊一たび出雲八重垣の歌をよみ玉ひしより、物に觸れ、事に感ずる毎に心情發して韻文となるもの歴代其跡をたゝす。帝になりては神武、應神、仁徳、武烈、推古等の諸帝最も歌に妙を得玉ひて、其他皇后、皇子、公卿、貴姬に至るまで秀歌を詠じ玉へるもの數を知らず、古事記及び日本書紀に就て其の一斑を見るべし。舜典に曰へるあり、「詩言志歌永言、聲依永、律和聲、八音克諧、無相奪倫、神人以和」と。蓋し至情の發する所、樂しむ者は其聲和らぎ、怒るものは其音激し、下に示しては軍氣爲に振ふとあり、上に奉りては宸襟爲に解くるとあり、人倫以て化し、夫婦以て和し、千歳の下、讀み去り讀み來りて、身猶は其境にある想あり。その

有のまゝを打出して豪も修飾する所なく、言語聲調共に巧妙を欠くは、事物進歩上自然の勢のみ。粗野質樸の故を以て、吾人は必ずしも。上世の歌を棄ざるなり。

縣居大人が萬葉考に和歌の變遷を論じて曰へるあり、「いとしも上つ代々の歌は人の真心の限にして、其様和くも、硬くも、強くも、悲くも四の時なす立かへりつゝ、前しりへ定め言ひがたし」と。これ蓋し舒明天皇以前の歌を評せるなり。大人又曰ふ、「やゝ中つ代にうつるひて、高市崗本の宮の頃よりをいはし、み冬盡き、春さり來て、雪氷の解けゆくが如し」と。是れ舒明天皇時代のとにして、此時代に至りて和歌の体裁や、備はれりといふべし。又曰ふ、「藤原の宮となりては大海の原にけしきある島どもの浮べらん、まゝして、おもしるさいさほひを出來たる」と。是れ實に持統天皇時代のとにして、和歌これに至りて隆盛を極はめたり。而して此際に方り、高雅至妙の思想を有し、雄健豪放の句を吐き、暗に一世の牛耳を執り。優に萬代の師表となれるものは實に我柿本人麿なり。

歌によりて其志向を欽し、進んで其人の事跡を知らんと欲するは、文學を味ふもの、常態なれども、人丸は雄名空しく萬古に傳はりて、其事跡反て史籍に詳かならず、蛟龍雲外に躍て爪鱗わづかに現はる、觀あり。之を概するに、人丸の家系は孝照天皇の皇子、天押帶日子命の後十六氏に別れたる中の一なり。人丸は舒明天皇の頃に生れて持統天皇の和銅年間に死せしが如し。其官は日並知皇子の大舍人にして、其後高市皇子の皇太子にておわせし時も同じ舍人なるべし。石見國に赴きし時も、守にはあらで、椽目の間ならむといふ説信すべきに似たり。古今集の序に正三位柿本人麻呂とあれども、是れ贈位にして、生前の位にはあらざるべし、延喜式によれば百官身亡ぶものは、親王及び三位以上には薨と稱し、五位以上及び皇親には卒と稱し、六位以下庶人に達するまでは死と稱する定なり。萬葉集は此式によりて書きたるものなれば、人麻呂若し三位なりしならば薨すと書くべきを、其辭世の歌の序に、「柿本朝臣人麻呂在石見國臨死時自傷作歌」とあるを見れば、其官の卑かりしと知るべし。其歌によりて遊蹤を探ぐれば、皇子に諸所に從ひ、聖駕に紀伊、伊勢、大和の間に陪し、ま

た近畿及び筑紫の諸國に遊べるを知る。鴨長明の無名抄に曰ふ、「人丸の墓は大和國にあり、初瀬へまゐる道なり、人丸の墓といひて尋ぬるには知れる人もなし、かの所には歌塚とぞいふなる」と。されば、石見國にて死せし後改めて郷士なる大和國に葬られたるものと見えたり。史籍によりて徵すべきは此の如きに過ぎず、其人となり如何は青史につたはらずして反つて歌詠に傳はるを見ても、亦以て和歌の徳の大なるを知るべし。

萬葉集の古今に傑出せるは實に長歌に由る、而して人麻呂最も長歌に長せり。正々堂々として天馬空に行くの勢あり。行くべき所に行き、止まるべき所に止り、縦横自在、筆端毫も窘束を見ず、蘇文潮の如しといへる語、移して以て人麻呂の歌にいふべし。素僕にして修飾なき上世の歌より超脱し來りて壯麗雄渾なる奈良朝文學の魁首となり、人麻呂の前に人麻呂なく、人麻呂の後に人麻呂なく、古今上下、斷じて獨得の長技と仰がるは、文運の泰昌に屬するに由るといへども、人麻呂の天才群倫に超出するにあらずんば、安ぞ能く此の如きに至るを得んや。起すに起法あり、結ぶに結法あり、波瀾頓挫、變化側るべか

らず、枕辭、懸辭の用法完備して文采粲然として見るべし。時に對句、疊句を設けて上下の連絡を圓滑にし、連環の觀先づ句法を自在に運び、伏案を備へて前後相應じ、常山の蛇勢大に結構の妙を呈す。雄健にして粗笨ならず、巧妙にして彫琢の痕跡なく、法度森嚴一字も移すべからず。之を上世の歌の單簡なるに比すれば、裸體徒跣なる野蠻人の前に衣冠正しき大宮人の立つが如し。之を新古今風の纖巧なるに比すれば、窈窕綺羅にだに堪へざる佳人の側に甲冑を着せる武人の並べるに似たり。賀茂翁が平安朝を女子の國といひ、奈良朝を丈夫の國と呼べるは、人麻呂の歌體奈良朝と一貫せるに由るなり。殊に人麻呂の歌にして讀者をして感激措かざらしむるものは、能く反對の事實を巧に結合したるにあり。蓋し苦後の樂ほど樂しきはなく、樂後の苦ほど苦しきはなし、山愈高くして谷愈低く、寒益嚴にして暑益強きを覺ゆるは人心の自から然らしむる所なり。人麻呂の狡獪なる、人心の自然に乗じて作法の妙幾んど天工に出づるが如きものあり。彼高市皇子殯宮の時作れる歌に、始めは力を極めて戰鬪の状を寫し、快活雄壯、字字飛動して懦夫を起たしむるに足り、翻て薨去の事に及

び、悲涼の情益切にして武夫も亦涙を灑がんとし、前後追想し來りて恰も「潮打空城寂莫回」の觀あるが如き、以て其一斑を見るべし

且つ上世は事變に接して心情動くまゝに發して韻文なるものゝみなりしが、人麻呂に至りては譬喩想像を逞うし、自から題を求めて限りなきの感慨を寄せ、以て、後世題咏の端を開けり。咏天、咏月、咏雲、咏雨、咏山、咏川、咏花、咏鳥、寄衣、寄絲、寄弓、寄船の如き題目出で、始めて文學的の觀を呈し、内は人情の自然を探り、外は天地自然の美を發揮し、理性想像一段の進歩を現して、歌ふもの始めて詩人たる資格を有するに至れり。彼の「大君は、神にしませば、天雲の、雷の上に、いほりせるかも」と咏めるが如き、また彼の、「久方の、あめ行く月を、綱にさし、我大君は、きぬがさにせり」と咏めるが如きは、一目すれば、想像の範圍を脱して妄想に近きが如きも、莊嚴高潔の極能く此に至れるに外ならず、歌意幽怪に亘るは猶ほ畫に神仙、天女、蛟龍などあるが如し、泰西の寫實一方、豪も風韻なき繪畫に慣れたるもの、目より見れば或は奇怪に思ふことあるべしといへども、思想塵土を離れて遠く幽冥の界に及び、

神、妙、奇、靈、なるものを捉へ、來りて清高純美の感情を寓するは美術の粹なり、文學の極なり、抑も人心の至なり。「白髮三千丈、綠愁似個長」とは何る其れ着想の非凡なるや。「天つ風、雲の通ひ路、ふきとぢよ、をどめの姿、暫しどいめん」とは何ぞ其れ心情の純清優美なるや。妄想に近きを以て必ずしも高尚の極とはせざれども、詩人の眼實によく塵土の外に超脱するを要するなり。

人麿の歌体、造語、句法、趣向既に此の如く奈良朝文壇の上に駕して千古に馳するに足れども、吾人の最も感歎欽慕して措かざるものは其歌体よりも、其造語よりも、其句法よりも、其趣向よりも寧ろ其心情にあり。思ふに人麿は多情有血の男子なり、忠誠義烈の臣僕なり、眞摯慈愛の夫婦なり。作れる所の歌一に滿腔の熱血を灑ぎて天真爛熳豪も隠蔽する所なく、赤心天地に滿ち、至誠鬼神を動かし、日本男兒の性情躍々として紙表に逸出するを見るなり。蓋し誠は一のみ。之を収むれば掌大の胸中に自から善くし、之を放ては宇宙六合の外に充滿す。君に施せば忠君の情となり、國に施せば愛國の情となり、激すれば切齒扼腕慷慨悲憤し、感すれば泣哭大息悲惻纏綿す。孔子詩三百を總括して「思

無邪」と云へり、人麻呂の歌一言以て之を掩へば誠の一字に過ぎず。近江の故都を過りては荒草殘烟の中に低回し、天智天皇の威徳を仰ぎて覺えず熱涙に咽び、吉野の行幸に陪しては山川清秀の氣に感じ、君徳の滋きを思ふて山川亦君に仕ふるかと訝かる。日並皇子、高市皇子の薨去に臨みては泣血天地に叫び、雷岳の上に天皇を拜しては山名より聯想して崇敬の意を寓し、獵場に皇子を仰きては明月を冠帽に比して恭虔の思を寄せしが如き、君を思ふの至誠磅礴して覺えず。言語の間に迷るを見る、出師表を讀んで泣かざるもの、み豈にひとり不忠の臣どなさんや。抑も我國は萬世一系の帝國なり、君臣の情誼、關係は世界萬國と其撰を異にせり。文學者天地の美を歌ふに際しては安んぞ共に仰いで君徳を歌はざるを得んや。世教を捕益するは必ずしも詩歌の目的にあらざれども、人心を感化して自から善に歸せしむるは實に文學の餘徳なり。殊に我國体に在ては最も其必要を感ずるなり。苟くも美を説くの本領を脱せずんば眞を含むも可なり、善を容るゝも亦妨けず。支那の文學皆道德を含み、馬琴の小説すべて勤懲を寓する、亦自から一体なり。忠誠の國民に向て忠誠の歌を謠ふ、安ん

ぞ感一層の切を加へざるを得んや。人麻呂洵によく國体の基づくところを知り、人心の向ふところを知れり、至誠に出で、國体人情に合し、吟誦一番、怯夫も亦振はんとす。人麻呂を稱して日本男兒の眞面目を發揮したる詩人なりといふも豈に不可ならんや。

忠厚の國に生れて國体の美を歌はんと欲せば辭章自から莊重ならざるを得ず、人麻呂の措辭の壯麗渾厚なる亦故なきにあらざるなり。而して君國を思ふ至誠一たび轉じて天地の美に及べば、詞章自から優美に傾かんとす、人麻呂の歌亦實に優婉美妙を兼ねたり。其死に臨みし時遙に妻を懷うて、「鴨山の磐根しまける、我をかも、しらすと妹が、まちつゝあらむ」と咏めるが如き、何ぞ其れ悽惻人を動かすの甚しきや。彼の名詩と聞えたる、「可憐無定河邊骨、猶是春閨夢裡人」の句に比するに、奇構或は一步を讓るも、妥當自然にして人の感を惹くと遙に之に過ぐるを覺ゆ。寂莫荒涼たる國土も愛する人あるによりて去るに忍びずと歌へる如き、愛情の極粹を穿ちて語々人を動かす、西詩往々千萬言を費して愛情を畫かんとするも此の如く奇警適切なる着想は容易に見當り難し。

而して、「丈夫と、おもへる我も、敷妙の、衣の袖は、通りて濡れぬ」といふに至ては、短刀直入、丈夫の心胸を解剖して餘す所なし、人生情あり、丈夫といへども豈に涙なからんや、俗謡にいはずや、「櫻植ゑたり、戦もしたり、此が眞の大和武士」と。日本男兒の忠誠義烈なるは實に天性に出づ、さりどて過激粗暴に趨らず、千軍萬馬の間にも猶ほ花に吟じ月を詠する餘裕あり、此風雅の心や、今古一貫、能く士風を支配して高尚潔美ならしめたり。武士は物の哀を知るといへる語は眞に穿てる哉。百萬の大敵を恐れざる快男士も時に阿嬌一滴の紅涙の爲には心腸覺えず寸斷する情なきにあらず。剛柔相得て自から天地の陰陽に愜ふ。喜怒色にあらはれざるは是れ英雄人を欺くのみ、心中果して感ずる所なければ是れ死灰のみ、木石のみ、鳥獸のみ、然れども涙には種類あり、涙痕多きを以て必ずしも妙歌となさず、灑くべくして灑き、灑がざるべくして灑かず、一に自然に出て、人情の粹に歸するを要す、人麻呂の哀歌の如きは千古の模範にして日本男兒の性情を發表せるものといふも不可なきなり。人麻呂が吉備津采女死せし時作れる歌に、「梓弓音に聞く我も、ほのみしこどく

やしきを、敷妙の手枕まきて、劍太刀身にろへねけん、若草のそのつまの子は、さぶしみか思ひてぬらむ」といへるは、想像能く人情に適中して、猥摯野卑に陥らず、眞摯誠實なる古人の情得て掬すべし。讃岐狹岑島に溺死人あるを見て、「浪音のしげき濱邊を敷妙の枕になして、荒床にころぶす君が、家知らば行きても告げん、妻知らは來も訪はましを、玉鐙の道だに知らず、おほしく待ちか戀ふらんはしき妻らは」と詠みける歌も亦同じ想像に出づ。其他河島皇子逝去の時泊瀬部皇女に献せし歌、明日香皇女逝去の時忍坂部皇子に奉りし歌、其妻死せし時作れる歌、香具山の屍を見て悲慟して詠める歌、溺死したる出雲皇子が吉野に火葬せられし時よめる歌など、よく悲哀なる好題目を撰び來て、字々涙痕を帯び、慘風悽雨、神泣き鬼哭せんとす、人を動かすと此の如きに至らは、詩歌の妙盡きたりといふべきなり。

人麻呂の時よりは少し後れて山部赤人といふ大歌人あり、古今の序に早くも評して、人麻呂は赤人が上に立むこと難く、赤人は人麻呂が下にたゝむことかたくなんありけるといへり。後世並稱して二歌聖といひ、長歌は人麻呂優り、短

歌は赤人優れりといふの説普通なるが如し。蓋し我國に人麻呂、赤人の並ひ立つは、猶支那に李白、杜甫あり、獨逸にシルレル、ゲーテありが如し。吾人は妄評を逞しうして輕卒に先哲を軒輊するを好まず。慨するに赤人は多く天地の美を客觀的に觀察し、人麻呂は主觀的に觀察せり。

赤人は主として日本自然の美を發揮し、人丸は主として日本人心の美を發揮せり、赤人は奇峭にして人丸は雄大なり。赤人は玲瓏として玉の如く、人麻呂は焜耀として金の如し。梅花雪に傲る姿は以て赤人に比すべく、櫻花旭に匂ふ姿は以て人麻呂に比すべし。斷崖雲を衝く勢は赤人に譬ふべく、海濤天を卷く勢は人麻呂に譬ふべし。共に千古の大歌人にして相對峙するに足る、孰れか優、孰れか劣なるは容易に判すべきにわらず、余は唯人麻呂の歌の雄大婉美にして最もよく國体民情を發揮せるを喜ぶなり。

「英國々民の氣風を養成したるものはセイキスビヤと聖書とにして二者共に軒輊する所を見ず」とは過言といふべからず、詩歌人を化する功豈に必ず聖經に若かずといはんや。世開けて怪の異事滅すると共に宗教の熱心は幾分か其度を減

するも、詩歌を嗜む情は管に減少せざるのみならず、文學は世運と共に益々開
 發せんとす。傑出せる大手腕古に多くして今に少なしといふものは是れ天上の
 星を眺めて、近き處に少なく遠き處に多しと誤想するに異ならず。誠實渾厚の
 作或は古人に若かざれども、巧妙の篇は古人を超出すると能はずといふ可かざ
 るなり。詩歌はまた世人の感情に訴ふるものなれば、其体裁、詞章も勉めて世
 人の感情に入り易くして而かも美なるものを擇はざるべからず、俗言必ずしも
 悉く斥くべきにあらず、古言必ずしも悉く取るべきにあらず、要は己の感情を
 寓するに適し、兼ねて他の感情に入るに適するにあり、故に吾人は新詩人に向
 て必ずしも人麿の歌体を用ゐよと云はず、必ずしも人麿の造語を用ゐよとも云
 はず。唯人麿の心情に鑑み來て、語々至誠を寓し、字々熱涙を灑ぎ、天地自
 然の美を探ると共に、國体を發揮し、國民の性情を吐露し、國家の長く世界に
 獨立するが如く、文學も亦長く獨立の体面を存せんとを勉むるは、日本新詩人
 の急務たるを信じて疑はざるなり。(桂月)

鬼狩

今日は明治廿九年三月十七日。くの山に鬼狩せんと昨日の談合を履行すべき
 日なり。あやにく曇天、雨降らんか。降らば此催しも。お流れならんか、先づ
 佐々木高美君の旅寓に行きて見ん。

(雨森)イヤお早ふ、モウ仕度したのか、僕も直ぐに仕度して來る。(佐々木)僕
 等は一足先きに行くから、君は松隈君と來たまへ。萩窪で出逢ふ(雨)チャそふ
 仕やふ、松隈さん直ぐ仕度していらつしやい、私も直ぐ來ます。と別れて、鷗
 盟館にかへり、雨降りに濡れる覺悟の狩仕度、そこへいそぎに草鞋を穿ち。
 小はしりに驅けて行く途中、向ふの小路より外套まとい鐵砲肩にしていそぎ來
 る者、逢ひ見れば松隈君なり。いざ萩窪への近路、城内をきりぬけ七ツ玉八ツ
 山越へて、先發諸氏に逐ひ付かん。
 嗚呼咲きたりな梅花。流石は梅漬梅乾の名所なる小田原。行く道すがら袖にう
 つる匂ひ、若し都ならば人のとかむらんまで。行きくへて八ツ山も過ぎぬ。向

ふに見ゆるが萩窪、最早一走りの中に在り。

トニー、ソラ打つたぞ。先發連中が打つたのに違ひない。扱ては鴨か、鵞か、また岩崎君が畫眉鳥でも打ち放したのでは無か。萩窪に着きぬ。先發連中は何處に居る乎。アノ女の人に聞かん、モシ鐵砲かついだ人が來はしませんでしたか、アノ大變ふとつたお方がお一人いらつしやる御連中ですか。左様。ソレなら此村のはづれにいらつしやいます、あすこの森で鳥をお打ち成さりました、有難うサア行ふ。

イヤ取れたか。此通り、と岩崎君鴨を一羽出し見す。打ち揃ひたる人々は、佐々木高美、岩崎英重、川崎鎌吉、雨森信成、雲出清太郎の諸氏、是は東京下りの都人といふ觸れ込なれど。根を洗へは四國及び北國生れの田舎人、獵にかけては顔揃ひのトウシロ(素人)先生鐵砲三挺鳥一羽の連中なり、されど心に恃むは山姥ならぬと山涉りの達人、小田原の住人松隈義旗氏また連中に在り、氏は狩といへば、頭髮未だ胡麻鹽の年齢ならぬと。半クロウト丈の腕前は儘に有りと獵師が保證する所安心也。此等即ち佐々木、松隈、岩崎、川崎、雨森、雲出の

諸氏が今日の連中なり助勢として來り吳たるは狩りの名人石工の某氏、並に雇ひたる獵師一人「セコ」六人綱五張に鐵砲四挺、繰り出したる勢は如何なる天魔鬼人なりとも面を向くべき様ぞなき。兎はおるか。猪でも熊でも、天狗の味噌汁格別結構といふ、ハテ強勢なもの。

くの山によぢ登る、優き男は足弱く、佐々木君並に余の如き肥へ男は已が重みに苦む。兎狩なればこそ此山に登れ、是が他の用事であつて見よ、駕籠が馬の脊をからでは逆もく。

山の半腹に至る、雨降り初む、喉喝き初む。掬すべき水の流れ無く、遙に聞ゆる谷川の音イヤに人をぢらす様に思はれ、仰向て降る細雨一滴つゝ口に受るも首骨痛く足元浮雲しこらへくくしてボクくくゆく。

こゝ等で一網張りませう、と獵師のいひしは兎の取れたる程に嬉し、蓋し彼等が網を張る間に我等疲足を休るの便あればなり。ソレはよかろうと一も二も無く勇み立ちて先づ木の根に腰を掛く。今朝余や急ぎに紛れ烟草入を持ち來る事を忘却す。佐々木君の烟草の烟り、浦山しく一本ねだれば、僕も急ぎに紛れて

唯シガレット半袋ばかり持來れるのみ。容易に吸殘しを捨てはならぬぞどの條件附にて一本めぐまれ、有難く頂戴吸ふ、其うまさ。

網は張らる、「セコ」用意しぬ。イザとて網の番に行く。我等獵師の指揮に従ふて各々持場を定め。松の木に隠れ静まりかへりて番をする。

ホ、ホウ、ホラ、ホラ、ホラア、「セコ」は逐ひ初めぬ。ホヲホラア、バン、カン、木を叩く、聲間近し。兎や來ると鶴の目鷹の目の我等番人、息を殺して待ち構ふ。ホラ、ホラ、ホラア、バン、足音バサ、ソラ網だナム阿彌陀、何にも取れず。「セコ」と我等顔見合せてガツカリ。

網を仕舞て又ゆき、再び網を張りて、番をなし、山上より逐ふ。取れず。今度は網を直して下より逐ふ。獲る所無一物。セメテ晝辨當前に一頭でも取ればよいになあ、と歎息するは言合はさねど皆同じ、「セコ」をせき立て逐ふ。又とれず。

足の重きこと千貫目、獲物なきが故に斯の如くに疲る。向ふの山に登りて試んといふ。仰ぎ見れば足益々舉らず。唯小田原に歸りて皆の人に笑はれんことを耻る一片の心をたよりに足をひきすりゆく。尊ぶべきは廉耻の心。蓋し「足曳の山」てふ枕詞は是れよりぞ始まりける。山鳥の尾のしだり尾でも獲しなれば、綱に山鳥罹りて其尾を捕へたるに、左り尾ぬけて鳥を右へ逃したり、残念至極とでも、歸りて言て胡麻化さんに、夫れさへ叶はず、長々し夜を獨りかもねんといへば、寧ろ夜獵にきたりて獨り寝たる鴨を撃つに若かず。兎に角に今一度狩りて辨當にしようど相談さまる。

此一度の狩りにも得た者は疲勞のみ。幸に谿水の流るゝあり。イザ辨當ど。火を焚き食物を紙にわけて、重箱にて水を汲み、干魚を焼き飯を喰ふ。味ひ甘露。我等添へ物の幾分を分ちて獵師と「セコ」に與ふ。獵師喜び之を見て松隈様今日は何にも取れませぬ筈でしたナアといふ。ウ、おれも最前さふ思たけれども試にやつて見よと考へて黙て居た、不思議な物ヨナート松隈氏歎す。謂を聴けば情なや我等の辨當中に梅干澤山あり。抑も梅干なる者は兎狩には七里ケツバイ桑原萬歳極めての禁物なり此忌み物を辨當に持てる人は兎狩に必ず「すだ」をして、獵物無き事天地開闢以來宇宙の原則、遠からん者は逐ふて見よ、近くは踞

で腰骨を揉み、其疲勞の大なるに徴して之を知れ、と云ふ事獵師の講釋にて明に成りぬ。されば今もてる梅干を悉く喰ひ盡して其片割をも残さざるこそ辨當後の狩りに關して焦眉の急務、ゆるかせにす可からずとて各々顔をしかめ、梅干顔して梅干を喰ふ。

飯三梅七の割合にて腹も満ちぬ。是非とも今度はと意氣をみて日向山ヒヤマに登る。途にて足元より山鳥飛び出づ。不意の事にて鐵砲向くる間なく其飛びゆくあと影を見てぼんやり立つのみ。本來獲物皆無なる我等の目には此山鳥殊に大やかに見へたり。……トン！、チャ誰か射たさうな。といひ合ふ間に土地の人二人鐵砲持ちてこなたへ来る。若し彼等に獲物あらば買ひ取りて歸ろうではないか、と余佐々木君に相談す。君此議を賛す。近づくがまゝに彼等の腰を見れば、鵞一羽を下げたるのみ。思きや彼等も我輩と同様に禪門の徒、無一物主義の履行者ならんとは。忍月居士其新小説「惟任日向守」中に光秀が軍法は實に法式に合へり光秀は軍略之達人なり、法式に従へば秀吉の如きは山崎合戦以前捕虜たるべかりし者、其勝しは僥倖のみといへり。我等も網あり鐵砲あり「セヨ」を引率

し獵師を顧問とす。兎狩の法式に於ては完全無欠、人數の多寡こそ違へ、往時頼朝右大將が富士の卷狩とても此に過ぎず適れ世の模範たるに適す。されど奈何せん法式を知らざる兎多くして一頭も未だ顔さへ見せず。法式に従へば辨當以前に兎の六七頭も得べかりしに、僥倖なるかな留守の兎よ。斯く觀すれば我等實に兎を得ざる狩の名人なり。是に於てか忍月居士が議論の目出度さ加減を知る。居士は事實を得ざる論の達人なり。御蔭を以て我等も狩の名人。有難や。」兎角する隙に又綱を張らる。我等番に行く。ホラ〜、ホラ〜、ホラア。しめた、とれた。ほんとうかア。ほんとうだよ。來て見給へ。ドレ。

大なる牝兎一頭綱にくるまれたり。衆小躍す、これで溜飲が下つた。生して持て行かふ、よかろう。兎は四足を結びて岩崎君が提げたる袋中に入る。ア、これで小田原へ歸りても言譯が立つナア。衆の喜び涯りなし。中には袋の中の兎に向てよくとられて呉れたナア。

梅干を残さず食ひ盡したる効驗忽ち斯の如し。此所にて今一と狩、イザ。今度は四張の大綱を張る。番人の我等獵師の指揮を待たずして各々部處を守る。

ホラ〜、ホラア、カン〜、パン〜、ホウホラア。……ガサ〜、シユツ、矢の如く一頭の兎余が部處と松隈君との間に來る、バサリ綱にくるまる、次の瞬間に余等の手裡に入れり。今度は川崎君の藁袋の中に生しながら之を入れる。跡にて綱を仕舞ふ時他に一頭綱に罹りしを我等氣附かずして逸したるを悟る。其蹴あけし土を見て慨然。

是に於て雨降ること強し。歸らばやと山越へ谷越へ、最終の狩りに又一頭を獲都合三兎を得て意氣頗る揚る其割合に足は擧らず。蓋し空腹の故乎。(歸路山中にて滑稽談夥多、されど煩しければ略す)

山を下りて菽窪に來る、朝に息へる農家に到り茶を請ふ。休むこと暫時、腹の空なるを益々感ず。折柄主婦松隈君に就て問ふて曰く何か差上ましやうと存じて蕎麥を打ちましたか、あなたがたはめし上て下さりませふか、さし上ましても宜敷うございませうか。ナニ蕎麥だど。ソレは何より結構どうぞ直ぐ御馳走になりたい。左様ならばと出し呉たる蕎麥、見るからに香をかぐからに腹の虫がグウ。初の一碗は何を喰たやら譯がわからず、唯無茶苦茶にうまいこと堪た

者に非ず。消化器が最前の辨當消化し盡して、喰物に飛び附かんず勢ひにて待ち構へたる矢壺に嵌まりし蕎麥なれば一碗一碗また一碗、忽ちにして余は四碗を盡す。佐々木君は五碗、岩崎川崎松隈の諸君亦復如是。是れにて人間らしき心地つきたれば、始めて主婦等の手前を愧ちて扣へたり。優しき所はありけり、頼母し、爰にて「セヨ」等に賃銀與て歸へす。獵たる兎は三頭並て竹にさげ岩崎、川崎君之をかつぐ。主婦に聊か禮物を與て別る。

小田原の町に入り之を見よかしと。意氣張りて三兎をかつき行く。イヤア大獵だ。兎が三羽あるよ、どの嘆賞を逢ふ人々より得て嬉しく雨中を傘なしに歩む。腹は出來たり、衣は濡れても人に譽めらるゝは悪く無き者、ゆる〜歩みて旅宿に歸りしは點燈の頃。

さて兎の味は讀者先刻御存じなるべし (未孩居士)



政治界の動力と反動力

渡し守りの船頭、船を出さんとする時、棹を以て岸を押す、船の出るは棹にて押したる岸の反動力に由るなり、大洋を走る火輪船は、其輪にて蹴たる水の反動力によりて進み、物の地に落ちて碎るは、打たれたる地の反動力に由るなり、故に一動一反は自然の定數なることを知るべし、

政治社會も亦復是の如し、英國の風俗奢侈に流れ、政府驕慢を極めたる時に方りて、「ピウリタン」派の反動あり、其派勢を得て暫時榮へたりし後、王政復古の反動あり、佛國數度の擾亂革命は、亦此一動一反の作用の他ならず、グリシヤ、ローマの理學の盛んなりし後、耶蘇教出で、政界の智慧と天國の智慧との區別を作り、世界の智慧を無益なりといひ、神は愚者を用ゐて世の智者を慚死せしむと唱へ、汝幼兒の如くならずんば天國に入ること能はずと説き、エホバを畏るゝは智慧の始めなりと教へ、宇宙間万般の道理は「バイブル」一部中に皆な包含せられたりと心得、創世記の昔譚を妄信し、其所説に背きたる者は、

社會を害し人生を誤るの邪説なりと誤解し、殘酷にも學者を殺し、理學者を火刑に處するの極端に至りけり、然れども驕る者久しからずとの諺に違ふこと無く、苛酷なる壓制を以て將に撲滅せられんとしたる人間の靈智は、機に臨み折に觸れて其固有の勢力を回復し、理を推し道を窮めて迷信者の妄説を破り、古昔の夢物語を碎きて眞理を顯表し、地層及び古跡に就きて事實を發表せしかば、宗徒は狼狽して牽強附會説を作り、以て「バイブル」の欽點を綱縫せんとすれども其詮無く、恰も東天の紅なるに及んで狐火の滅盡せんとするの觀あるに非ずや、是れ他なし、從來壓抑せられたる智力の反動に由る也、此反動力の勢を得るに隨ふて、昔時政治界に跋扈したる宗教の勢力を滅し「バイブル」に因由せる政治説廢れ、宗教と政治は畫然分離せざる可らずとの論起るに至れり、日本に於ても、佛法渡りて守屋が議論を生じ、此論勢を滅じて蘇我の逆臣を生じ、其後之を誅して國体を明にしたるより、諸説更々出で、遂に佛法をして我を陶化せられしめ以て日本の佛法たらしめたり、漢學の如きも、其渡來の當時は之に心酔する者溜々たる社會皆是なるが如くありしも、後年に至りて本居平田の輩

振ふて我國教を唱道し、遂に水戸派の學者を生じて漢學をして我れに化せしめたり、而して此等學說の變化ある都度に、之に伴ふ政治上の變動無くんばあらずして、遂に覇政を打破して千古無窮の王政の光輝に些少の障碍も之れ無からしめたり、是れ皆一動一反の致す所に非ずや。

一動一反相交はりて社會の進歩するは、譬へば波打ち波反りて潮の満ち出づるが如く、晝あり夜ありて光陰の飛奔するに似たり、又たは水來り水去りて豊饒なる泥土を積むが如し、動反共に社會に益利あらずんばあらず、されど一利一害は物理の免れざる所たれば、其利を取獲して害を防禦する方法を講せざる可らず、夫れ最初第一の動力ある際、次に第二別種の動力起りたる後は、此二力相交謝する毎に或ひは之を動力といひ、又は之を反動力といふ、前に擧げたる例に就て言はんには、物には自然にして抵抗力具はれり、棹を以て岸を押し、岸其棹によりて船を押し反へすは、素と是れ棹を加へざる時に、初めより岸に抵抗力の具はり居るが故なり、社會に就て見るも、例へば爰に保守と改進の二黨ありと假定せんには、保守黨に對して改進黨が運動を試む時は、之を目して保

守に對する改進の反動とも名くべし、而して之に敵して保守黨も亦運動する時は、當初改進黨の運動が動力にして保守黨の働が反動力なり、されば此二黨が交々運動する時間の順序に於ていはし、同一の運動にても、前の敵對者に向つては反動力たり、後の敵對者に向つては動力たり、故に動力と反動力とは、時間の前後に由りて區別したる名稱にして、運動自身に於ては變易あること無きなり、是を以て下に論ずる所は、専ら反動力の性質を講じ、以て動力のことをも其中に含蓄せんと欲するなり、

偕て政治界の反動力を諦觀すれば、其中に二種あることを知るなり、曰く言論の反動と人身の反動是れなり、言論の反動とは、演説に新聞に雜誌に、専ら舌と筆を以て相攻撃するをいふ、人身の反動とは、筆舌を捨て、腕力に訴へ遂に銃刀を用るに至るまでをいふ、例へば近頃流行の演説妨害、敵黨歐打、議員脅迫、糞汁灌頂、等よりして明治十年の西南騒動の如きもの、又たは英國のピュートルタン軍、佛國の驚慌政治等に至るまでの階級を總括するなり先づ茲に論ずるは

第一 言論の反動、

言論の性質を分析すれば。其全部真なる者、全部妄なる者、真妄相交る者、との三あり、此三種なる言論の反動起りたる時、政府は之を如何に處置すべき乎を考ふるに、主として自由に論辨せしめ、強て之を檢束すること無く、三種の言論に就て各其利を取るころ肝要なれ、之を細論せん。

(5) 反動の言論全部眞實なる時

社會に一種の論説の起る時、最初より其眞實すること著明なるものなりせば、何の世話も面倒も無からまし、されども其眞實なることは、多くの辨論と經驗を用て漸く著はれ出づる者なり、例へば地は圓体にして、轉動する者なりとは、目今に至りては小學校の生徒にても、沖走る船、三日月に影る地の陰等を證として明識し得べき事實なれども、其世人に眞實なりと認めらるゝに至るまでは、之を主張せし人々は幾多の辛酸苦痛を嘗めたるやは枚擧するに遑あらず、或は獄に投せられ、又は宗教上の交際を絶たれ、甚しきは火刑にさへも處せられたる者あるに非ずや、眞理の發達を妨害したるも亦大なり、近時に至りては經濟

學の始祖と崇めらるゝアダム、スミスも其死後夥多の星霜を経て始めて著書富國論の價直を知られ、其生前に於ては其説多く學者社會に容れられざりしを思へ、畢竟するに、遙かに俗説を超越したる偉論卓説は最初は社會に容れらるゝこと稀なる者なり、若し最初より俗人凡才にも會得さるゝ程の説ならば是れ俗説なり、卓説の卓説たる所以は凡才の及ばざる所を説くに在り、而して世人の最多數は凡庸なり、宜なり卓説の世に容られざること、されば全部眞實なる論説も其眞相を顯す迄には夥多の舉證辨明を要するなり、而して世の爲めに眞實の説を初より之を眞實なりとて受け容るゝよりも、寧ろ之を疑ふて論難し、其主張者をして充分の證據を挙げしめ、充分の説明を爲さしめて後、之を容るゝは確實安全の方法と言ふべし、唯注意すべきは、眞實の論説も初めは多く其眞相を見難きものなれば、之を誤解して其主張者を檢束し、其説を一も二も無く禁遏すること無く、之に充分の説明權を有せしめ、其反對者にも充分の攻撃權を有せしめ、其説をして充分の攻撃に堪え勝ち得るの眞價値を顯表せしむべきなり、

(ろ) 反動の言論全部虚妄なる時、

虚妄の説にして最初より其虚妄なること著明ならば、之を容れ之に雷同する者も無からん、否な初め之を思惟する時に於て、其虚妄なること明瞭ならば、之を主張する者も無からん、例へば月を碎きて地に運び、以て地の海水を埋めて陸地を増加すべき方策の如きは、如何に之を説くとも其資本金の募集に應じて株主たらんとする者一人も無かるべく、否な其虚妄なることは之を思惟する、初念に於て明かなれば、之を主張する者も初めよりして一人も無かるべし、然れども世上に流布する妄説は、虚妄ながらに眞實の皮相を有する者なり、故に之を思惟する者も、之に附和する者も、智薄くして其虚妄の眞相を看破し能はざるなり、是を以て其説世間に流行するを得るなり、然らば此全部虚妄の説は、之を禁遏して其主張者の口を箝ぎ、筆を取上く可き乎、曰く否な、夫れ物の道理は其一方より而己之を観る時は眞相を得ること難し、一方よりも二方、二方よりも三方、表裏左右上下よりして観察する時は其眞相顯然として明かに成り來り、眞は眞、妄は妄と判然すべし、今一の妄説を主張する者あらんに、他よ

り攻撃を受け、自己の論點を維持すること能はざるに至らば、別の論點を發見して主張せざるを得ず、而して此第二の論點も亦た他の攻撃によりて維持し得ざるに至らば、第三の論點を發見せざるを得ず、斯の如くにして逐次論點を發見せんとて、無據此問題の表裏在右上下を悉く観察せざるを得ざる場合に立到るべし、而して新論點を發見する毎に他の攻撃を受けて、此問題の諸論點悉皆破れて維持し能はざるに至らば、世間の公衆は其説の非なることを知り、當初之に雷同したる者も離れ、遂には主張者自身も其説の非なることを悟るに至らん、然るに如是妄説を初めよりして禁遏せんとする時は、其主張者は一方の偏見而已を有するが儘にて箝口せらるゝが故に、何時までも自己の非を悟るに由なく、飽迄も自己の妄説を眞理なりと迷信し、終には其執着彌頑固に成りて、其説の爲めには一身を犠牲に供すべし抔と決心して、人身の反動を試み、腕力銃刀に訴へても其説を實行せんと謀り、社會に大害を爲すことある者なり、且つ人の迷信は、之を禁ずれば禁ずる程、執着彌固きを加ふる者なり、例を擧ぐれば、明治維新の頃までは薩州に於て一向宗(淨土眞宗)を嚴禁せり、是れは豊

大隈が薩州に攻入りたるは教加上人の周旋に由れりとの事よりして一向宗を惡みたるに起れり、若し藩中に於て此宗を奉ずる者ある時は直ちに捕へて嚴刑に處し、俗に之を一向宗崩れと稱して一時に數十人を斬りたる事もありしなり、されども其信者は益多きを加へ、此所の穴藏彼所の岩屈に密會して彌陀拜禮式を行ひ、冥加金を集めて本願寺に送ること夥多しく、本願寺の賽錢上り高は薩州を以て九州第一等と成せる程なりき、然るに維新後、特に明治十一年以後は、眞宗奉信も自由と成り、集會禮拜も勝手次第と成りしかば、信者の熱心も漸く薄らぎ、賽錢の上り高も、大隅日向地方に至りては一の說教所を維持するに足らずして、年々本願寺より遂に補欠金を送るに至れり、又た例を政治界より擧げんに、露國の社會黨を見よ、夫れ社會黨の説く所は、近來始めて露國に發生したるに非ず、其主意の起因する所はスバルタのリクルゴスが布きたる法律に含蓄せられ、プラトン著せる「レパブリカ」(共和政國)に顯はれ、其後に至りてはトマス、モールが「ユトピア」(何處にも無き國)ベーコンが「ノヴァ、アトランシヤ」(新アトランシヤ海島)カムパネラが「シヅタス、ソリス」(日の國)デヨゼ

フ、ホールが「ムンドス、アルテル、エス、イデム」(異なりて同一なる世界)などいへる書にて唱道され、其他諸邦の學者が著せる書中にも此主義を述べたること今茲に枚擧するに勝へざる程なり、是は他日社會黨の主義を論ずる時に詳述せん、斯の如く今を距ること二千有餘年の昔しより唱へられたる説にして、何故に露國に於て近來俄かに激烈の勢力を得たる乎を考ふれば、主として露國政府が之を嚴禁撲滅せんとて壓制手段を施すに由れるが如し、何となれば英國などにては此種の説は實際行はれ得ざる者なりとの事明かになりて、何にても架空の妄想説を目して之を「ユトピア」説と爲すに至れり、是れモールが「ユトピア」より來れる語なり、蓋し自由の論説によりて其不可行の妄想なることを明知せしが故に非ずや、夫れ人生の最も固有にして去り難き者は我執の念なり且つ人間は天稟の才同一なる者に非ず、されば未だ財産權の完全ならざる赤裸体の野蠻にても、森林にゆきて菓實を採収するに當り、才ありて且つ巧みなる者は得る所多く、才なくして拙き者は得る所寡なし、斯く得る所のものに多寡の差別あるは財産不平等の始まりにして、所得多寡の差別は天稟の才能に差別あ

るに由る、故に財産不平等なるは人間天稟の性に原由するものなり、然れば賢愚巧拙の隔てなく、財産を均一にして共有せんとするは、今世界に生を受けたる人間界には實行され得ざること明かなり、例を擧ぐんとらば、耶蘇の死後其徒弟共が財産共有を謀り、南亞米利加のレナデヂエチロ河畔に羅馬教徒が共和市を建てたれども皆な暫時にして跡なきに歸したるを以て知るべし、人間の天性に悖りたる事は、縦ひ宗教の力を借りても行ふを得ざるなり、然るに如是妄説の近來露國に勢力を得、腕力に訴へ爆發物を用ぬ、危険の所行を爲す者往々にして之れ有り、是れ其説を公けに論辨するを得ざるが故に、論争によりて表裏左右上下の全面を叩きて虚妄なる真相を観ること能はずして、其道理らしき一局の皮相に偏着するを以てなり、且つ政府の壓制彌烈しきに隨ふて反動力を惹起し、心益迷ふて醫す可らざるに至れるなり、又た社會に在て富貴逸樂なる者は少數なり、自餘は貧困なる者多數なり、貧困なる者は財産を造出せんことを謀る、されば之に説くに財産均一論を以てする時は其慾に最も合ふ、慾に合ふが故に迷ふこと甚しく、迷ふこと甚しきに加へて尙ほ政府の抑壓によりて其

説の兩端を叩くこと能はず常に其道理らしき一方のみを觀念するが故に固着すること益頑なり、迷信此度に達する時は、縦ひ自身は眞に其説を信せざる者にても、現政府に對して不満を懷く輩は、免も角も此迷信者に與し之を利用して非謀を遂げんとする者あるに至るものなり、さらば之を防ぐの法は如何、充分に言論の權を與へて論争せしめ以て終に其説の非なるを悟らしむるに在り、又た人は理性を具備する者なれば、眞理を信するにも其眞理たる所以の理由を知りて信すべし、是れ單に何某學者が斯く言ひたり、或ひは單に古來の定説なりと而已にて信するよりも、此説は斯く々々の理由なるを以て眞なりと、其理由を悉知して信する者なれば、信の價格を益すと大なり、而して眞理の眞理たる原由を知るには、之を妄説と對照して觀ること最も捷徑なり、故に時々世間に妄説の出るは眞理の光輝を益す者なり、されば縦ひ妄説たりとも、之れが言論の權を奪はざるは、一は以て其虚妄たる真相を顯はして迷信を豫防するの方便たるべく、一は以て眞理の光輝を發揚するの方便たるべきなり

(は)反動の言論にして眞妄混合せる時

反動の言論にして全部眞實なる時、及び全部虚妄なる時に於ても、是等言論の討議權を奪ふこと無く、自由に主張攻撃を許すことの眞理發見に必要なは前に之を論じたり、况んや反動の言論にして眞妄混合せるに於てをや、之を自由に論談せしむるの必要なは論を埃たすして明かならん、眞妄混合せる説は、須らく之れが眞分を取りて妄分を捨てんことを要す、然れども其眞妄分子の別は最初より見易きものには非ず、其眞なる一方に拘泥する時は全部眞實と見えて、之に迷ひ遂に大害を招き虚妄なる部分而已を偏見して憶惻する時は全部虚妄なりと見えて、貴重なる眞理を瓦礫と同視して之を抛棄し、人生を利益すべきことも之れが爲めに湮滅するの憂あり、されば其妄分を去りて迷はず、眞分を取りて益するには、其説の主張者をして充分に擴充敷衍せしめ、其反對者をして亦た充分に辨難攻撃せしむるに在り、然く爲す時に於ては其妄分は如何程之を主張するも攻撃の爲めに破られて維持すべからざる者と成りて消滅し、其眞分は攻撃の爲めに益其價値を顯はし來りて遂に社會に容られて實益を生ずるに至るべきなり、之を譬ふれば恰も金鑛を燦すは烈火を以てするが如くなら

ん、兩説相撃ちて論じ戦ふ時、虚妄の鑛は攻撃の烈火に堪えずして灰と成り眞實の純金は其烈火中より顯はれ來りて人生を益せさん、されば眞實の一分に迷ふて充分の害毒を受る憂ひも無く、虚妄の一分に誤まられて眞實の道理を棄るの不幸も無かるべきなり

第二 人身の反動

反動の勢力既に言論の區域を越え、腕力に訴へて勝敗を決せんとする者、之を人身の反動といふ而して其中に二種あり、曰く政府に對するの人身反動、曰く人民相互の人身反動是なり、之を論せん先づ

(イ) 政府に對するの人身反動

銃炮刀劍を以て現在の政府に反對して起り、之れと雌雄を決せんとする者は反叛なり、國事犯なり、邦家に害ある者、外寇を除きては、蓋し是れより甚しきはあらず、縦ひ其黨の唱ふる所をして眞ならしむるも、又た妄ならしむるも、苟も兵器を携へ腕力に訴へて勝敗を決せんとするに於ては、政府は之を討たざる可らず、是れ政府が正當防衛なり、茲に人あり我れを殺さんとす、其口實と

する所は縦ひ眞理なるにもせよ、我れを殺さんとするは、我れ之を防ぎ之を撃たずんばある可らず何となれば我れを殺さんとするは彼れが暴戾なればなり、我れ彼れが唱ふる所の眞理に敵するに非ず、其我れを殺さんとするの暴力を打破するなり、故に政府も己れの反對する者が言論の範圍に於て起らば、之に自由の發論を許し、又た己れの代表者をして之と充分に辨論せしめ、其兩間の議論攻撃中より顯はれ来る所の眞理を採用して以て國家を益すべし、然れども、若し此反對者にして腕力を以て來り、人身の反動を試む時は、其所論の理非に拘はらず、一も二も無く之を討つて可なり、否な之を討つは必要なり、何となれば政府は人民の安寧幸福を保維する者なれば、理非に拘らず此安寧を破る者は、政府は之を討つべき義務あるなり、是れ其唱ふる所の道理を滅せんとするの意に非ず、其國家の安寧を破る害毒暴戾を除く者なり、事若し是に出でずして、其唱ふる所さへ道理ならば如何に暴力を以て來るも之に順ふべしと云は、政府は旦暮に易替して、人民は歸向する所を失ひ、國家壞亂して、混沌たる暗國世界と化せんのみ、其主義こゝ異なれ、其趣きは彼の佛國革命の際に現れたる

恐慌政治と同一轍を襲はんのみ、戒しめざる可けんや

論者或ひは言はん、我邦維新の際、徳川幕府に臣従したる諸侯、起て幕府を亡したるは何ぞやと、是れ抑も名分を誤りたる説なり、夫れ日本國の主宰は皇室なり、皇室以外に主宰あること無く、日本政府は主宰に奉仕して其權を行ふ、主宰の手足なり、幕府は其實覇なり、日本正當の政府と言ふを得ず、幕府といひ諸侯といひ士農といひ工商といへるも、位階權力こゝ異なれ、皇室の臣民たる資格に於ては則ち一なり、故に其一臣民たる幕府が、朝意に悖り奉り、剩へ兵力を以て抵抗を試るに於ては、他の臣民起つて之を討つ、何の怪しきことかあらん、朝意に悖り奉りて兵力を用る者を討つ、是れ臣民たる者の義務に非ずや、諸侯は此臣民たる者の義務を盡したる者といふへし、故に平定の後、素と幕府に仕へて之に左胆したる者といへども、又た心を改むれば更に幕府を討ちたる輩と毫も隔意を狭むことなく、共に親しく、朝廷に忠勤を盡すことを得るなり、論者又た云はん道理は人間の擧て順ふべき者なれば、若し之に反する者は、其者縦ひ政府たりども、之を討て可なり、唯道理に順ふを以て

標準とすべしと、是れ大なる謬見なり、夫れ道理なる者は無形物なり、故に敵味方共に己れが欲する所を以て道理なりと唱ふことを得、敵味方共に自ら道理なりと言ふを得る者を以て標準と爲す時は、百人集れば百人別々の標準を製作し得べし、一國の趣向する所を定むるに、焉んぞ斯く漠然たる標準に依りて可ならんや、宜しく一定の標準を執るべきなり、而して一定の標準は何に就てか之を求めん、唯其國柄を以て標準と爲すべき而已、日本國に就て言はば、萬世一系の 天皇之を統治し給ひ、天皇は國の元首にましまして此統治權を總攬し給ふ獨立國なり、是れ日本國無窮の道理萬億世の標準なり、是の標準に悖る時は日本國に非ず、之に背く者は日本臣民に非ず、日本全國の公敵なり、故に是に反して運動を試る者あらば、猶豫せずして誅戮すべきなり

(ロ) 人民相互の人身反動

人民相互の人身反動も、政府は之を嚴禁して少しも假す所ある可らず、凡て腕力を以て、兵器を以て、相攻め相撃つは是れ社會の安寧秩序を紊る者なり、安寧秩序を保維する政府は、焉んぞ之を禁罰せずして可ならんや、其唱ふる所は

道理なるにもせよ、如何なることにもせよ、吾れ其の所説を罰するに非ず、其社會の安寧秩序を紊る所業を罰するなり、此時に方て政府は尙も偏頗の所置ある可らず、若し其所置にして偏頗に涉り、一黨の身反動を禁罰し、一黨の人身反動を寛恕し、或ひは之を默評する等の事あらば、是れ政府一黨に與して一黨に敵する者なり、斯く爲す時は政府は社會を制御する位を離れて、自ら争ひ撃ち、制御せらるべき者の仲間と成る、即ち譬へば裁判官が是非判定の位置を捨て、自ら原被兩造の中なる一方に與するなり、政府自ら其政府たるの位地資格を失ふて、民間の腕力競争者と成る、焉んぞ之を目して公平無私正大なる所置をするを得んや、故に曰く、人民相互の人身反動に於ても、其所論の是非曲直に拘らず、苟も腕力兵器を以て雌雄を決せんとする者あらば、政府は誰れ彼れの差別なく、少しも假さずして國法を以て之を罰すべきなり、蓋し其所論を罰するに非ず、社會の安寧秩序を破る所業を罰するなりと、

第三 結論

上に論せしが如き理由なるを以て、言論の反動に於ては、政府は成る可く之に

充分なる發論討議權を與へ、以て其間より顯はれ來る眞理を諦觀し、其國家に利益あるや否を考へ、輿論の歸向する所を察し、其國柄に合ふや、否を量り、深く思ひ詳かに惟ふて、之を採用すべし、人身の反動に於ては、一定の國法を制して之を禁し、若し犯す者あらば、其人と其論とを問はず、少しも假すこと無くして公明正大無私無偏の懲罰を加ふべきなり、而して之を實行せんと欲せば、政府は須らく政黨政派の範圍以外に立たざるべからず、即ち譬へば、原被兩造の一方に與して之れ仲間と成ること無く是非曲直を判定する裁判官の裁判官たる位置を保つべきなり、論者或ひは英米等の政黨内閣なる者を引證して、政黨以外に獨立する、政府を非難する者往々にして之れ有りといへども、是れ政略上第二の手段を見て未だ第一最良なる手段を知らざる者なり、試に見よ、英米等の法律中に其國の内閣は政黨の勢力の消長に由りて變交すと明かに定めたる規則の有るや無しやを、如是規則を明定せる法律は一も之れ無きなり、然らば此規則にも無き習慣が如何にして彼等國內に生ぜしやと尋るに、抑も彼等の國は、種族の争ひによりて勝を制し、又は種族の相談組合より成立ちし者な

るが故に、勢ひ止を得ずして是に至れる者なり、若し彼等の政府にして、政黨の如何に關すること無く、人才あらば之を用ひ、眞理の名説あらば之を採り、至公至正なる所置を爲さば何の必用ありてか内閣は政黨勢力の消長と共に交替するを須ひんや、彼等が内閣の政黨の勢力に伴ふて交謝するは、畢竟内閣自ら雌雄競争人と成り、即ち原被兩造の一方と成りて、制御裁斷する法官の位地を有せざるに由る者なり、吾れを以て彼等が内閣組織の競争を見るに、恰も我邦の中古に、英雄競ふて將軍と成り覇權を掌握せんと争へると同一の觀あり、唯兵力を以てすると言論を以てするの別ある而已、是れ時勢の然らしむる所に於て、其小人風の争ひたるや一なり、試みに彼等が人民の多數投票を得んとて施す所の手段を見、選舉會の演説を聞け、小人風の競争たること驚くに堪えたり、是れ彼等が國の成立によりて、獨立不黨公明無私なる内閣を設くる能はざるが故に、止を得ずして用る第二の政略手段にして、唯兵亂の害を避けんが爲めに怨を隠して言論に訴ふる而已、

政府は政黨に關せずして獨立し、彼等政黨の相争ふを見、輿論の歸する所、眞

理にして我國の國柄に合ひ、國家に益ある者を察して之を採用すべし、而して彼等若し言論の範圍を越えて人身の反動を試る時は、其何黨なるを論せずして罰すべきなり、社會の安寧を壞亂する者は人身反動なり、政府は之を防禦せざる可らず、而して之を防禦する方法は、軍人司法官及び警察官等を政黨に係無からしむるは勿論、第一に政府全体、特に内閣をして政黨以外に立たしむるを要す、されども人身反動を防禦するに力ある一大元素は、言論を自由ならしむるに在り、夫れ人は己れが胸中に不満足のことある時之を他人に向て充分に吐露すれば鬱を散ずる者なり、人民に自由言論を許すは其不平心を訴ふる所あらしむる者なれば、不平の内に鬱積すること無し、不平内に鬱積せざるが故に之を腕力に訴へて人身反動を試ること無からん、不平心をして充分に言論上に發せしむ、是れ之を腕力に訴へしめざるの法なり、自由言論を許すは社會に害ある人身反動を防禦するの最良法の一なり、政府は常備兵を有す、言論の争ひ何んぞ懸念するに足らん、然れども若し自由の言論を許さずして抑壓し、不平心をして無害の言論に訴ふる所無からしむる時は、此心内に鬱積して益々凝結

し終に腕力上の人身反動に發して社會を害す、故に此不平心をして人身反動に顯はるゝ程の熱度に至らしめずして先づ無害の言論上にて其熱を冷えしむべきなり、況んや自由言論は眞理を發見し輿論の歸向する所を示すの利用あるをや、政府は政黨に關せずして人才を登用し、人才も政府に入りたる以上は黨派心を脱却して公明正大なる眼を國家全局の利害に放ち、以て深く輿論を察して之を取捨し、人身反動を公平に防禦懲罰すべきなり、是れ政治界の動力と反動力を處置するの法なり、

右者汎く人心に基き國家學上より論じ得たる所の結果なり、特に我邦の組織を觀すれば、國の元首は、天皇にましまして統治權を總攬し給へり、政府は權を天皇に受け奉りて之を行使す、政黨の得て私しすべき者に非ず、而して天皇陛下より萬機公論に決すべしとの聖詔出でたり、思はざるべけんや、我が國柄を一變すればいざ知らず、千古無窮の國柄に合する立憲政体の運用は蓋し右所論の外に出でず。(未孩)

墨染櫻

上

五月雨に、はな橘の
 時雨初めたる、
 うらさび渡る
 雁がねさむく
 千草のはなも
 露よりほかは
 下せる小簾に
 こゝろに物や
 片へに伏せる
 おもひの露の
 千夜を一夜に

ちりしより、
 みやびどの、
 このおろの、
 あきふけて、
 うちやつれ、
 いろもなき、
 むがくれて、
 おもふらん、
 上 薦 の、
 しらたまは、
 かさぬとも、

おほうち山は
 うで吹く北の、
 哀れはいつと
 おまへの真萩
 おき渡したる
 雲井のにはの
 打見もたけき
 曇れるまみも
 ねをこゝ泣ぬ
 包むにあまる
 なぶりの果は

かきくれて、
 かせさむし。
 わかねども、
 いまぞ散る。
 ゆふぐれの、
 うらつばね。
 ものゝふの、
 いとおもし。
 消えかへり、
 うでのうへ。
 あらざらん。

只假りそめの
 めゝしと人の
 出んとすれば
 さはさり乍ら
 はかなき程の
 又めぐりこん
 こなた彼方に
 たびぢの末に
 今宵はこゝに
 まがきに縋る
 恨みかけたる
 然はあれども
 たふとき己が
 ありし宿直の
 逆風張帆

わかれ路に、
 見もやせん。
 たちまちに、
 わがつまよ、
 たびねだに、
 としつきを、
 わかれなば、
 おくつゆの、
 とまりて、
 ゆふつゆに、
 ここのはに、
 おもへたい、
 いのちにも、
 夜半ふけて、

こゝろ弱くも
 云つゝ太刀を
 裾をひかえて
 花にゆきれ
 別といへば
 その程としも
 おくるゝ袖や
 かぶと計りも
 こゝろ長閑に
 みだるゝ虫の
 をどこも流石
 はしき妻にも
 換ぬは天皇の
 こゝのへ深く

とまりなば、
 ちからにて、
 ふししづみ、
 つきに明け、
 うきぞかし。
 さだめなく、
 いかならん。
 おもひかけ、
 あかしてよ。
 こゑほろく、
 うちしほれ。
 めづ子にも、
 めぐみなり。
 召したまひ、

かく口惜しき
よせくる浪の
の給ひさして
敷にもあらぬ
たのませ給ふ
貌姑射の山の
君が御稜威の
なびかぬ寇の
飾るにしきの
事わりげにと
こゝろの外
さらぬ別れと
こゝろ細さも
えやは伊吹の

世のなかを、
たちゐるも、
はらゝと、
やまがつの、
みこゝろを、
ふもとなる、
追ひかせに、
あるべしや。
ほまれをば、
おもへども、
いのちなり。
なりもせん。
いやまして、
さしもぐさ、

おもふも袖の
頼むはひまし
おどさせ給ふ
このよし貞を
汲まつらんも
塵よりかろき
にしきの御旗
やがても歸る
こゝろ長くも
夜のまの程も
立はなれなば
おもへば今や
みだるゝ思ひ
磁石にこゝろ

なみだかは、
ひとりぞと、
かしこさよ。
かくまで、
いとゆゝし。
身なれども、
おしたてば、
みやこぢに、
まてよきみ。
さだめぬは、
これやさは、
かぎりぞと、
かくとだに、
やるとてや、

片への琵琶を
松のあらしや
かなしき聲の
折しもそらの
虫のこゑく
早夜もふけぬ
心をこゝに
後ろ手まもり
降くるなみだ
空にいざよふ
雁のなみだの

取りいで、
かよふらん、
いとほろく、
しもしろく。
うらがれて、
いまはとて、
どいめおき、
上 臍 は、
せきかねて、
つきさへも、
つゆとめて、

暫しかきなす
葉におく露の
うらむる音ぞ
夜寒にかせの
月よりひく
かど立いづる
我さへわれ
身も浮く計り
限りのさまに
秋のわかれや
ぬるゝ顔にも

四つのいと。
たぐふらん、
身にはしむ。
なりぬらん、
がねのおと。
ものゝふが、
わかれゆく、
なげきつゝ、
うち伏しぬ、
をしむらん、
やどるなり。

中

真柴こる 柳山下し
時雨をさるふ

さえくれて、
むらくもの、

羽ぶく雄鷲の
まよへる色も

こゑさむく、
たゝならず。

みだるゝ空に
足羽なはてを
うの勢わづか
よろひの袖を
あたりを籠る
寄せくる人の
敵かみかたか
旗さしものを
スハヤと叫ぶ
ぬき放ちたる
折しもつらを
かな物のぐも
あか地の錦の
こがね作りの

まぎれつゝ、
ひとすぢに、
五十餘騎、
なびけつゝ、
ゆふざりに、
けはひして、
わかねども、
見てあれば、
ほどもなく、
あきのしも、
ぬけいでゝ、
さはやかに、
直垂に、
おほ太刀に、

ひづめの音も
こなたに走る
旗手うぶかす
露を蹴たてゝ
あがき危ぶむ
太刀の擾ぎも
やゝ程ちかく
霧間にうすき
かたみに関の
消えを争うふ
眞ッ先かくる
夜目にも著き
紫する濃の
しげ籐のゆみ

いとひくゝ、
騎武者あり。
野あらしに、
すゝみゆく、
ゆくてより、
きこゆなり。
なるまゝに、
二引兩。
こゑあけて、
すがたなり。
武者一騎、
いでたちは、
鎧着け、
もちろへて、

のりたる駒も
廿四さしたる
進めものども
あだなふ醜の
いひつゝ手綱
馬おどらして
み空にはかに
山かせあらく
雨さへそはる
赤きこゝろを
はやちの如く
閃めく太刀の
隙もあらせず
小溝ひとつを
逆風張帆

たつがしら、
おほな加黒、
いざすゝめ、
ゑびすらは、
ひきしぼり、
たちまちに、
かきくもり、
きはひつゝ、
ゆふやみに、
しるべにて、
とぶ征矢は、
いなづまは、
立つ征矢の、
こえかねて、

五枚かぶどの
矢かしら高に
かみの御末の
ひづめに懸て
ひと鞭當つよと
てき中めがけ
吹まく木の葉
みぞれ交りに
道はあやめも
顔もろむけず
いのち輕げに
早も消えよと
いたでに駒も
人馬もろども

緒をしめて、
おひなしぬ。
わが兵ぞ。
くだきてん、
みえけるが、
一文字。
さきだてゝ、
しぐれきぬ。
わかねども、
むかひゆく。
すゝめどか、
をしふらん。
よわりけん、
たふれたり。

つゆも緩まず
とびくる白羽
たちまち面の
片手に太刀を
斯くて在なば
たゆげに小手を
はしる血潮の
かばねを渡る

たちあがり、
おどたかく、
いろかはり、
つえつきて、
いたづらに、
さしあけて、
たきつせに、
荒野 風、

なほ進まんと
眉間のまなか
むすべる口も
睨むるまみに
憂目みんとや
われど我くび
ふりくる雨も
かなしき聲に

するなべに、
つらぬきぬ。
濃むらさき。
血もあえぬ、
おもひけん、
かき切りぬ、
いろみえて、
むせぶなり、

下

淋しやな馴ても嵯峨の
まがきに近き
つゆけき法の
かれゆく虫の
今はとしらむ

山の 庵、
さをしかの、
さむしろに、
たえくはに、
ありあけの、

はらはぬ庭は
落葉ふみしく
あかつき業や
狭霧をもる、
昔をさそふ

うづもれて、
こゑほそし。
つとむらん、
かねのおど。
つきかげに、

ながめ出たる
袖うちまねく
夜を徒らに
おもへば塵を
おもひし程に
花のたもとに
かはらぬ月の
今はたい待つ
おまへの池の
雁さへかへる
八重立つ嶺の
覺束なさに
心もゆかぬ
おほさか山も
逆風張帆

勾 當 の、
はたすゝき、
おきあかす、
いで、より、
つきもへぬ。
ひきかへて、
かげみても、
むらさきの、
松 かけて、
ゆふまぐれ、
しらくもに、
たえかねて、
旅 の 空。
かきくれて、

内侍のさまぞ
なれも昔しや
露だにものは
作るかりほの
纏ひなれけん
變りはてたる
我身ひとつの
雲井にきみを
思ひしものを
きみが越路の
うなたの風も
花のみやこそ
さきだつ袖の
未はこしぢ

あはれなる。
しのぶらん、
おもひけり。
かりそめに、
いにしへの、
こけのきぬ、
はかなさよ。
みてしより、
つれなしや。
わかれより、
吹き絶えぬ。
すみはなれ、
しらすゆに、
君をたい、

おもひ敦賀の
こぎゆく跡の
氣比の社ろを
ゆふ浪きよき
矢田野の露に
里わの田ぬに
露じもさやぐ
足羽なはてに
名にしもあえて
何ぞはありて
芹つみにけん
ふけゆく鐘を
恨みはてたる
命ちまつまの

濱くれば、
しらなみも、
ふしおがみ、
色の濱、
そでぬれて、
ながむれば、
朝六つの、
ちる露の、
もろどもに、
あるかひは、
ふるびども、
かこちしも、
世のなかに、
ありかどて、

世をうみ渡る
うらやま敷ぞ
枯野のをざ、
あらしの山も
風も身にしむ
雁がねとほく
橋こえきけば
君はきえうせ
何時しか都に
君がどまらぬ
かくやは宿世
おもへば物の
永らふどては
しばし結べる

あまをぶね、
かへるなる。
わけゆけば、
かすみつゝ。
あき篠の、
うちなびく。
おもひきや、
たまふとや。
かへる山、
名なりけり。
つらかりし、
かすならず。
なけれども、
かりの庵。

これや浮世の
なげきて何の
欠るは此世の
ちるこそ花は
いひつゝ袖を
昔路をはらふ

さがおのく、
かひあらん、
ならひなり、
めでたけれ、
うちはらひ、
あさかせに、

今はおもはじ
思ひて何の
みつるは常の
逢はぬぞ戀も
やをら板戸を
讀經のこゑの

なげくまじ。
すべあらん。
ことならず。
たふとしや。
さすあどは、
すみわたる。

(武島羽衣)



北米合衆國獨立史を讀む

驟雨來らんとして、黒雲漸く密、一陣の冷風、身氣頓に爽かなるを覺ゆ、即ち案頭の書を亂抽して、偶々北米合衆國の獨立史を得たり、讀み去る事未だ半ならず、卷を掩ふて嘆じて曰、嗚呼史讀む可し史讀むべからず、若し眼底未だ一の主義なく、胸臆未だ一定見なき者をして此史を讀ましめんか、漫に自由の空理に狂奔して、終に天下の亂臣賊子と化し去らざらんとするも得べからざるなり。予嘗て村庠に在つて萬國史を習讀す、談偶々北米の獨立軍に及ぶ、村夫子髯を掀て揚々として説て曰、獨立軍は天下の美譽なり、華盛頓は古今の偉人なりと、華盛頓の正直なる孝純なる、修身談に於て、讀本に於て既に深く耳底に印する處、村兒遊童之を聽て華盛頓たるを冀はざる者なかるべき也、幸なる哉我國未だ華盛頓を出さざるや、幸なる哉予が終に華盛頓となる能はざらんや、予亦華盛頓の意思が玲瓏玉の如くなりしを疑はず、其正直と孝純とを疑はず、彼が其國民に對する同情の熱誠、眞に敬服すべき者たるを疑はず、然れども其

意思の善は其行爲の不正を打消すべき力を有せざる也、彼が指導せし處の獨立軍は頗る非難すべき者なりとすれば、彼は終に古今の偉人と稱す可きは非ざる也、尠くとも日本人の眼中に於て彼は偉人と稱するに足らざる也、

獨立軍とは如何なる者ぞや、バットンの米史に曰、英國は其不正なる法律を以て米國人が粒々辛苦の果を奪ひ去らんとせり、政府は英國が供給し得る物品は米國人自ら製造することを欲せざりし也、米國の製造家は、實に二人以上の年期奉公人を使役すること能はざりし也、政府は米國製造業の粗製品は、必ず英國の製造場に於て製造せられんことを欲せり、即ち米國の商人は英國の港を経るに非れば貿易するを許さざりき、此反動として、米人は又可成的英國に利益を與へざらんことを試みたり、彼等は乃ち自ら紡げり、自ら織れりと、英國は可成的米國より利益を吸收せんとし、米國は又可成的英國に不利を與へんとせり、兩國の情勢既に全く相背馳せり、獨立軍の萌芽蓋此時に成れり矣、富蘭克林其故國の友に書を寄せて曰、英國人は皆自ら米國の支配權を分ち有するが如く思惟する也、自ら王と共に王位に冒進せんとする者の如し、されば彼

等は米國人を目して其臣僕となすなりと、然り、母國は實に然く思惟せし也、殘酷なる父が、其子を以て臣僕の如く思惟する如く、不慈の母が其女を以て奴婢の如く思惟するが如く、將又本家の家族が別家の家族を輕蔑するが如く、米人の衷情眞に憐む可き者なきに非ず、英國民は尙是を以て満足せざる也、更に進んで彼の印紙條例を發布せり、米人既に堪ふる能はず、囂々として其不正を鳴しぬ、而して當時の大藏大臣チャレス、タウセンドは冷々として曰、我が米國の兒輩は、吾人の注意の下に殖民し、吾人の保護の下に養はれ、而して尙吾人の力に依つて守護せられつ、少許の税金を貢する事をだに思まんとするか、其思義に報ずるの道を避けんとするかと、是單に大藏大臣のみならず、當時英人全体の意氣込なりし也、是亦宛然彼の殘酷なる父、不慈なる母が、汝は我が生みし所、我が生長せしめし所に非ずやと説て、或は不當の隱居料を強請し、左團扇の樂隱居たるべき權利を主張する者に酷似せずや、而して彼の不從順なる子女は云ひぬ、我等は汝の注意の下に殖民せられしと云ふか、否汝等の壓制が我等を米國に放逐したる也、我等は汝が虐政を免れんとして、此不毛不開入

り難きの地に入つて、殆んど有らゆる辛酸苦患を甜め盡して、殘酷なる蠻賊と戦ひぬ、我等は汝の保護の下に養はれたりと云ふか、否我等は汝の怠慢の中に生長したり、汝の注意とは只代人を送つて我等を羈束せしむるのみ、我等の自由を斥候せしめ、我等が行爲を誣告せしめ、終に自由の兒孫をして膏血を注がしむるに終る耳、我等は汝の力の下に保護されしと云ふか、彼等は汝の藩屏として常に其武器を取れり、彼等は其絶えざる罪勉を以て其職業を勵みつ、其膏血を以て塗られたる城壁を守れり、而して我等は尙汝の利益の爲に其僅小なる貯蓄をさへ奪ひ去られざる可からざるか、予は予が誠意を語らん、我等は英王の如何なる臣民にも譲らざる忠義心を有す、然れども我等は我が自由に熱中する者也、若しこれを破らんとする者あらば、直に立つて其自由を發揚せんとす、其忠義心が母國民に比して如何なりしか、予是を知らず、只其自由の空理を以て尊王の大義の上に置く者なることを認め、其絶叫の聲は不從順なる子女が、慈愛なき父母に抗言する者に似たるを認むるのみ、然れども其頑父の寐酒の爲に明日の米代を奪ひ去らるゝ者の憐む可きが如く、其老婆の樂隱居の爲

に賤業婦とならんとする者の憐む可きが如く、其争抗の聲亦一滴の涙に價する者なきに非る也、其囂々たる喧叫の聲は僅かに彼の印紙條例を却くるを得たりと雖も、英政府は決して其初志を曲げざる也、

首相グレンビル曰、殖民地、母國と争はんとするは無益なるのみ、賦税は必ず成さざる可からず、印紙條例の方法が強迫的なるを思まば、汝が好む處の方法を聞かんと、茶税は即、其方法を變更して顯れたる者なりき、

米人は其名と其法とを惡むに非ず、實に其實を惡むなり、彼等は英國憲法を憑據として先づ此に抵抗しぬ、ボストン市はサウエル、アダムスの口を借て云へり、吾人は英國臣民の權利を請求す、嘗に憲法が此權利を證明する耳ならず、吾人は英國在住の民と地を同ふして生れたり、若し吾人にして協賛なき租税を課せらるゝとせば、是吾が許さざるの金錢を奪はるゝなり、吾人は既に自由民に非ずして奴隸なりと、而して頑固なる英政府は冷然として顧みざる也、かの憐む可き子女は、其父母の壓制と強迫とに堪ふる能はずして、先づ暫く人間の大道を説てこれと抗争しぬ、不法なる父母は頑然として動かざる也、

彼等は實に最後の決心を爲さざる可からざる也、泣而從之は聖人の教なり、若し將た斷然立つて其正義を貫徹せんとせんか、是亦頗る怒するに足るべきなり、然れども其父母の不法なるが爲に、不慈なるが爲に、全然其親權の羈束を脱却して、アカの他人と成り終らんとするに至つては、終に許す可からざるに非ずや、他の不法と不正は、自己の不法と不正を正當にすべき原因となる能はざる也、

米人が最後の決心は果して如何、そは獨立軍なりき、否、そは謀反なりき、バトリックの決意は如何、ヘンリーは云ひぬ、彼等は吾人を從屬しめんとして、却て吾人をして獨立せしむるの道を教えたりと、バトリック、ヘンリーは曰ひぬ、般艦遠からず先にチャレス一世あり、後にジェムス二世ありと、彼等は當初據て以て英政府に反抗せし處の英國憲法の規定に據つて、其統治の主權を保有する、ジョン第二世に對して反逆を企てたり、嘗て違憲なりとして英政府を攻撃しつゝ、自ら其大憲に反對して、其主權の範圍を脱却せんとしぬ、これ北米合衆國獨立軍の真相なり

バットン曰、米國人は思へらく王は民の父母なり、然れども一朝良法を破るや、彼は暴君のみ、既にこれに服従するの義務なしと、暴君亦君に非ずや、王權行動の一部分たび其正路を脱すれば、全部の王權は從つて消滅すべきか、治者の不正是被治者の不正を正當にすべき理由あるか、宣長翁嘗て唱つて曰

君はよし君とまさすもわれややつこやつこの道をふまであらめや

と、予は其母國の甚不法不慈なりしを知る、米人の衷情頗る憐む可き者なりしを認む、然れども其反逆の罪は終に掩ふ可からざる也、

如何に正直なるも、如何に孝純なるも、如何に其同胞に對する同情に富むも、如何に軍國の事務に長ずるも、獨立軍の領袖は反逆者の張本なり、華盛頓の盛名、又何ぞ羨望するに足らんや、

獨立軍は今や其憲法に反對して立てり、又口實を大憲に籍る事能はざる也、彼等は此に耶穌教の箇人主義を執つて其口實となしぬ、其獨立宣言の中央議會は先づ上帝の祈禱を以て初まりぬ、而して其宣言書を見るに曰

人間は等しく造物主に依て一種の特權を與へられたり、生命自由及び快樂に従ふの權利は其特權中の一なり、是等の權利を保護する爲に、人民の協賛に依つて政府を立つ、政府若し其目的を達せざれば、吾人は是を變更して幸福安寧を基本とする政府を新に組織するの權利あり

と又曰

人間界の事情の進歩に従て、嘗て他と結合したる政治上の關係を解くの必要を生ずる事あり、さらば世界各國は天然、即天然の神の法則に従つて、彼等に賦與せられたる權利を以て相分離したる對等の位置を保つべきの必要ある也、人間は此説を信奉するを以て、吾人は今分離すべき進行を宣告す

彼等は嘗て自ら忠義心ありと明言しぬ、されど其所謂忠義心は、主權者が彼等の權利を保護するの日に於ての忠義心のみ、人間の信奉する處の信仰は、能く國家の大憲をも破壊し得べしとなすなり、一主權者又何かあらんや、

彼等曰人間は此説を信奉すと、然れども日本帝國の人間は其説を信奉せざる也、當時の英國の人間は其説を信奉せざりしなり、是何ぞ人間全体の信仰と云ふを

得んや、只特に當時の米人、多數の輿論と云ふに外ならざる也、此に於てか輿論は米國の獨裁的の君主となりぬ、輿論は廻轉すとは奈翁の確言に非ずや、多數の壓制は共和國の常態に非ずや、一箇の暴君を倒して多數の壓制者を得、鞏固なる憲法を擲て浮動的の輿論に依頼す、是獨立軍が勝利の結果なり、北米の獨立又何ぞ羨望するを要せんや、誰か共和政治を以て富強の源と稱せんとする、獨乙は帝制を布て初めて國運を増進せしに非ずや、輿論政治の弊害は實に奴隸問題と南北戦争とに於て其適例を示し、いに非ずや、北米の富強、偶一事に僥倖するのみ、

西洋主義我國に浸入してより、苟も共和の美を説かざる者は目して以て頑陋の輩となし、佛國の革命を説けば即ち以て進歩となし、クロンウエルを以て愛國者となし、帝黨を笑ひ、王朝の歴史家を嘲り、滔々、揚々著書に筆にし、教室に口にし、以て新學風の粹なりとなす、彼等は、抑共和の黄金時代を夢むる者か、將又西洋歴史家の口眞似に外ならざるか、我輩不幸、時俗に阿る能はざる者也、頑と云はば汝が笑ふに任せん、陋と云はば汝が嘲るに任せん、只予が思

ふ所、予が信ずる處斯の如きのみ、筆を擲て予獨り快哉と呼ぶ、時是、白雨一過して天に片雲なし、彩霞一抹、夕陽没するの邊に留るのみ、先の油然たる者、果して天の常に非るを知るなり、(佐々雪々)



劍知錄

○至道無難、惟嫌棟擇とは碧巖録中の句なり、一波萬波治まり來て胸中の靈液一渣滓なきの時、恁麼の境界をか現出する既に明白裡にあらず、奚んぞ暗黑裡にあらずや、況んや功名をや、榮達をや、然らば灰心滅智枯木寒巖、屹頑として扱やみなむか、否丈夫自ら衝天の氣あり、如來の之く所に向て行かず、從横自在、活潑潑地の妙機妙用は這裡より噴湧せむ、至道由來口舌のよく指掌すべき所に非ず、疑ふものは爾が嗽々をやめて須く自性を認めよ。

○善をなすに、有意識の善あり、無意識の善あり、男子の尊ぶべきは夫れ無意識の善にある乎。紛々たる塵寰に出没頭して、始終意馬心猿の馭鞭に營々たらむよりは、我は寧ろ白砂青松の下、彼蒼を仰で噓然として一笑せむと欲すあらゆる眞善美愛はこの一笑よりして出で來り、一舉手一投足ヒユマニチーの眞諦を得るに至らむ孔子の「從心所欲不踰矩」とは、夫れこの謂也。

○夢窓國師、二十三問答の中に「親もなし子もなし佛もなしなどいふは外道惡魔にて候」と云へるあり、さりとは卓見の至極に非ずや、禪を修むるもの由來障子一重の所に至り、舞臺の煌耀たるに眩惑し、其外廓に彷徨して、放逸不羈眼中親もなく子もなく佛もなしなど騒ぎ立つるもの多し、是等は、たゞに王法の敵たるのみならず、佛敵にして外道禪の最大なるものなり、躍身一番其堂奥に入り大悟徹底し來れ、見るとして聞くとして、孰が拔苦與樂の大智識を啓發せざらむ、南朝の柱石たる楠公を始め菊地武重など皆禪門に入て造詣せしものたるを知らば、思ひ半ばに過ぎむ、かの佛に値ふては佛を殺し祖に値ふて祖を殺すなどとは、至心誠意の徒を砥勵せしむる爲めに説くべきも、以て世智辨聰の徒に語るべからざる也。

○某老、に見ゆ翁曰く、予當世の起業者を見るに多くは龍頭蛇尾だ、開業式や發會の辭は實に立派なものだ、輕氣球は颯る、花火は火華を散らす、辯士は口沫を飛ばす、拍手喝采は海岳に震ふ扱、成効するもの幾人かある、餘りの字を大きく書くから京上まで墨が續かない。

○又曰く、人は兎角屹とした仍る處がなくちや駄目だ只理屈ぢやいけむ、安心

が出来ない凡夫は誠に仕方がないが譬ひ落處は低いにした所が何が確たる據る所がほしいものだ。昔時の豪傑とか、達人とか云はるゝ人は皆信仰あり本領ありしものだ、また世間が何分にも積極的の競争で顔と顔とを見合す様な時代になつて來ては理屈を云て居る餘裕がないのだ、故其信仰と本領とを夫々有したのだ、眞逆の時には、理屈上の安心は何の役にも立たむ。

○又曰く當今の世評は、少しも直打がない、朝に譽めるかと思と夕には誹る、昨日迄國賊など、罵つた其舌の根の乾かぬ中に、はや今日は其人の頌徳文を書くやうなとで、丸で當今の世論程宛にならむものはない、其故に眞に國家の爲めに盡力せむとするものは、現時の毀譽褒貶には頓着せず、百年の長計を打算して、自分の据りの付た所で働くのが必要だ、其れ位の大なる考がなくちや、何にもならむ、頑固とか何とか云はれても構ふことはないといふ、やるべいだ、自家の心事は自家が知るのだ。

○又曰く當世の人は少しにても、一定の主義を有する人を指して頑固といふ、誠に困たつ話ではないか(呵々)頑固で在て貰ひたい、頑固でなくちやいかない

併し頑固といふと何んだか悪い様に聞えるが、堅固とか鞏固とか云た時には、誠に操持の確ことを現はして、至極結構な語となるではないか。

○又曰く彼の英雄といひ、豪傑といはるゝ者が常人と異なる點は外でない、もう一と押しと云ふ機一呼吸の所で常人がどうしてもやれない、それはどうも忍びないと云ふ所を思ひ切つてづむとやつて仕舞ふ。こゝらが即ち英雄豪傑の英雄豪傑たる所だ、それで英雄豪傑の仕事には、随分残忍な所がある、いや常人の眼から見ると残忍に見ゆる所がある。

○又曰く、堀秀政は寛仁大度な人であつた、實に一世の豪傑である、身を微賤より起して北の壯廿九萬石の大封を食むだ男だ、豊公が會津を蒲生氏郷に與ふる時に、最初誰を置ぬたが適任であらうと云ふ論があつた、豊公は亦第一に氏郷第二に秀政と云はれた、東照公も亦第一に秀政第二氏郷と云はれた事が有つた、之に依ても秀政が伎倆拔群の事は分る、然るに歴史で見ると薩張り此人の働が見えないされども豊公の眼識で斯程重く用ひた人だから、余程ゑらかつたる堀尾茂時は、多の人が知て居る通り豪傑でこれも微賤より起て豊公に用ひら

れた人だが世人ははるかに堀よりは堀尾の方がゑらい様に知て居るこの茂晴といふ人はまことに燥急な人であつたと見えるし講談師などが能く云が堀久太郎は至つて寛裕な人で堀尾茂介は之に反對の性急者、そこで火鉢の火が飛んで久太郎の袖が焼出た本人は少しも構はないうちに茂助は速あはて、久太郎の袖の火を揉み消して居ると云ふ様な鹽梅で、此話し誠に兩人の性情を説明して居る、そこで堀尾はかく性急者であるから、萬事仕事の花やかなる故か、世人には遙かに堀より知られて居る、堀は左程知られないがそれでも豊公は今申す通り余程此人を重じた予か思ふに堀は非常に人物が高かつたと見える、世人の注目が少いは當前で世間は兎角少さくても華やかに騒がないといけない堀は中々騒ぐ様な人でないじつとして居る、夫で知られない山でも其通り自然と段々大きく高くなつた山は大變に高くなつたとははやさないが、少く低くても、峨々として奇狀を示して居ると、詩歌人や人などを始め、世人は八ヶ間敷云ふ、今でも識古今を貫き學東西を該ねるといふ人でも沈着に眞面目に構へると世人は馬鹿の様に云ふだろ新聞の論説か演舌の一番位にうるでも大氣焰を吐て見るが宜

い、世間は逆も學者だとか政治家だとか云て大變なものだ大もてだ。この學者や政治家にも因るではないかあゝ因つたものだアハ…………。

○又曰く世間に日和見程いけむものはない、胸中に一定の主義なくして人の毀譽褒貶や或は一身の都合上の事を心配して、時に西するかと思へば東へ行ても見たりまた東するかと思ふと西へ行て見たりして、恰かも水上の萍の如く風のまにまに漂ひて終には何事も仕出すことは出來ず、一生忙しい思ひをして死んで仕舞ふ、侷是程の愚はない、かの橋杭を見るかよい、一番はやく腐蝕する所は、潮の満干によりて半日水に浸て半日は、日に曝される所だ、始終水の中に浸り日に曝され居る所は、決して早く腐爛するものでない。

○又曰く巧言 令色は鮮かな仁、と孔夫子は説かれた兎角人間は思慮鹽梅をして、却て失策するものだ、心にもない御世辭を謂て見たり、米春ばつたの様に御じぎをして見たりして容態体裁を繕ふから、眞地に人間の天真爛漫なる所は知ることが出來ない、都會の所謂紳士など云ふものは、人間の本性を距ること頗る遠しだ。阿々。

雞は無心なものだ、しかも毎朝毎晨刻を違へず、時を告げる、もしも人間であつたらどうだらう、昨夜は遅く迄起て居たから、明朝は早くなど前晩の晩からちやんどきめて置て却て早過ぎたり或は遅過ぎたりするたらう、どうか小智小慧はやめてほしいものだ。

○ポリシイなる語は近來我國の社會に最も流行する語となれり、政黨員も、商業家も之を口にし官吏も受負師も、甚しきに至ては軍人も、宗教家も、之を唱へ競ふて其の術の功ならむことに汲々たり。蓋し道に正ありて奇あり、公ありて權あり正なきの奇、公なきの權を以て、身を立て家を興し國を治め外に對せむとす、抑も誤れるの甚しきものと云ふべし。歐洲諸國にありては、兎も角も社會の制裁力鞏固にして、人民公共の道德に富むこと我國現時の比にあらず、さればこそビスマークの政畧も、コルヂャコフの權變も行はれる、其の嚴酷なとと、秋霜烈日も雷ならざる國際公法羈束の間に在りて、今日の富強をも形作りしなれ。人は謂ふ我日本は歐洲各國が三百年を費して贏得したりし文明に僅々三十年を以て追及するを得たりと。何んぞ知らむや、醬膾混淆、清邪併せて

進み、國家に社會的制裁なく、個人に道德なく信仰なく世を擧て輕燥浮薄に、世道風教まさに淪亡せむとす。豈に前途の事寒心せざるを得むや。古來英雄豪傑が、事業をなせし跡を見るに、多く世人の尤も難しとする所をなし、義肝誠膽優に士心を收獲する底のものを成就せざるに依らざるはなし、見よ、織田信長が東西漂蓬の足利義昭を奉せしが如き豊臣秀吉の明智光秀を討て君家の仇を復せしが如き、徳川家康が織田信雄を援けて勢威隆々の豊臣氏に抵抗せしが如き、毛利元就の陶全薑を亡ぼして大内氏に報せしが如き、何れか皆然らざらむや、彼等皆古今の傑物なり、其云爲言行、悉く至誠に出でしとは云はず、其の間多くの政略もありしなるべし、權變もありしなるべし、されど以上は公明俯仰天地に愧ざるの事業にして、是あればこそ、政畧も權道も行はれしなれ。今人多くは、たゞ目前の利害をのみ見て、結果の偉大なるに垂涎し、毫も其の由來する所を知らず。我既にポリシイなる語を耳にせざらむとす。

○貧兒あり、飢ゆるに食なく、寒きに衣なし、しかも平生の行爲、多く至誠に出で、偶路頭にありて金囊を拾ふも、猶且つ警官に致さむとするものと、誦詐

百端、間あれば他のものを掠め去らんとするものと孰か世の同情を惹く。今や我國力は軍備よりして、富の程度に於て、他の列強國に比して實に貧家の兒たり、さるに、誦詐百端、以て外交の秘訣と心得居るもの尠からざるが如し、淺間敷次第ならずや、よしや世は十逆の街にして、荊棘の跋扈に任すとも、猶虎狼群中麒麟あるを示し、深蒨叢中蕙蘭の馥郁たる亦快ならずや。(川鏡)



逆風張帆終

明治三十一年三月十七日印刷
 全 年全月廿一日發行

定價金二十錢
 郵税金四錢

編纂者 岩崎英重

芝區高輪西台町一番地

發行者 川越重敬

神田區淡路町一丁目一番地

印刷人 堀内誠次郎

芝區烏森町二番地

印刷所 堀内活版所

芝區烏森町二番地

芝區烏森町二番地

發行所 興雲閣

東京市京橋區槍屋町

北 隆 館

東京市神田區表神保町

東 京 堂

東京市芝區今入町廿四番地

高 知 堂

大 賣 捌 所

秋月 鏡川 著

藤伯の生涯

本書は藤伯の生涯を叙すと公平の點に置大勢の跡に及ばんとする

第一土佐の勤王、第二やす自第三吉田東洋、第六勤王黨の消長、自第七大政返上

自第十王政復古、第十四明治年間に於ける後藤象二郎、第十五家居と逸事

以て前後四十年間政變の眞容堂公と東洋先生の遺墨は双壁として史家の

相を知るに足らん而して容堂公と東洋先生の遺墨は双壁として史家の

伯の遺墨は二條城の書翰にして坐るに當年の風雲に接するの感伯の肖

像は風手雄偉海舟伯の題字は閃電影裡に伯の一生を評し去る

○東京新聞 『後藤象二郎を讀む』(紫淵) 『頃者秋月鏡川君新著「後藤象二郎」二冊を贈らる忙手披開するに其の材料

極めて富瞻にして文字も亦流麗なり余曾て伯の計に接するや直ちに小傳をもつて世に公にせしも伯が一生間經歷の深く且つ大

なること滄海の如く頗る遺珠の多かるべきを感めり今や後藤家の囀に應じ伯の傳記を編するに當り偶々此の新著を得たり余の喜

び知るべきなり余の伯と縁故あるを以ての故に此の新著の批評をなすは寧ろ余の任なりと信ず敢て其の事實の明確を證して以て

贊辭に換ふることを附り

正 價 金二十五錢

郵 稅 六錢

紙 數 四百頁餘

○早稲田文學

『後藤象次郎』岩崎英重氏著、(興雲閣發行)、この篇は後藤伯の生涯を叙すると共に、土佐藩勤王の由来を叙し併せて吉田東洋、山内容堂等の名士をも側寫して評なり、材料の措置宜しきを得、文章はた雅健、此の類の著書中殊に出色なりと評すべし、「明治中間に於ける後藤象次郎」の一章も簡にしてはやくせり、「家居と逸事」の一章は伯が「Quint」の一面を描出しておもしろし巻首には伯の肖像及び書翰等を載せ巻尾には詳密なる年譜を附したるなど用意めでたし、紙數すべて三百五十餘頁、

○國光

『後藤象次郎』(全一冊) 後藤象次郎氏は胸裡劍氣を藏し、偉圖を蓄へ、王政復古の建策者、民選議院の首唱者大同團結の統領として其經歷頗る奇抜に、多趣に、明治政史と相離る可らざる關係を有する人也、而して今や氏は秋月鏡川氏に依て江湖に紹介されたり、第一土佐の勤王に始り第十五家居と逸事に終り、後藤象次郎の六十年間に於ける言行事業を記傳し、評論したるもの、後藤象次郎を知らんとする者は一讀せざるべからず(東京興雲閣發行)。

○日本

『後藤象次郎』(興雲閣) 假令高繩の狸伯と童謡に上るも此伯到底偉人也否巨人也として明治時代に數へらる、ものあらば伯は儘かに其筆頭に立つべし 天空快調其豪放の膽豈今世の楮子才運の窺ひ得る所ならんや秋月鏡川氏今筆を驅つて維新當時の伯を寫す蓋し伯が事業の上よりすれば此時最も異彩を放てるの時なりとす而かも著者に維新後の伯を取り其半生を描きざりしを惜む

○日本人

『岩崎英重著』(興雲閣發行) 後藤伯は當代の豪傑なり、如何に生時に於て毀譽相半ばせしとはいへ、其功業は維新前後及び明治政府の歴史と共に永く後世に傳はらざるべからず、今に於て伯の傳ある、著者の意向に嘉すべきなり。ミツドルトン博士著くマルカス、メリアスシセロの傳を著し、シセロ以外にシーザルを傳し、ホムベイを傳し、アントニーを傳し、クローヂアスを傳し、更に溯りて筆をシセロが生前六十年の昔に着け、自ら記しく曰く、是れ名してシセロの傳といふも雖も、實に以てシセロ時代の史と稱するに足る、と。本書後藤伯以外に山内容堂侯を傳し、吉田東洋を傳し、武市平太の高義を叙し、更に會桑二藩の心事を闡明して、其宛を辨じたるが如き、部分に於て彼著と相ひ類肖するあるに似たり。然れども本書は唯だ維新前に於ける伯が事業の半面を記するに止まり、明治年間における他の半面に至りては僅に其の梗概を記するに過ぎず、是れ特に憾むべきなり。蓋し後藤伯の後藤伯たる所以は維新前青壯の時に於てよりは、寧ろ明治年間老成の後に於て多く之を觀るを得べし、何ぞ後半面の記述をして前半面に於けるが如く詳且細ならしめざりしや。博士は羅馬の群英中に就て治平の英雄、君權の保護者としてシセロを擇び、彼が爲に千頁に近き大著を敢てせり、著者は後藤伯と郷國を同ふせりと聞く、想ふに資料を蒐集するの途に於て亦た甚だ易かるべし、更に稿を續て伯が後半面の事歴を詳細にし、以て此稿を大成して少くも後藤伯時代の小史と作すの勇無きや。(たゞ伯は或る意味に於て民權の保護者に非ざりしとはいへ)(かすみ評)

○土陽新聞

『後藤象次郎』(秋洲) 秋月鏡川君頃日其新著『後藤象次郎』二冊を予に贈り且つ愚評を徵せらる然るに予や君と專攻の學を異にするもの焉んぞ君の新著に就て適切な評論を下すを得んやたゞ身を普通讀者の地位に置きて思ふ所を述べれば君の文章は概して流暢にして材料また富麗なるは喜ぶべし而して後藤伯の一生中大政返上迄の事跡に重きを置き其より以後は著るしく筆を省略したるは伯の出處進退の跡より言へば寧ろ其當を得たりと謂はざるべからず何となれば大政返上に現はれたる伯の人物は大同團結に現はれたる人物よりも大にして眞面目なることは蓋し萬人の首肯する所なれば也(然れ共讀者誤解するを休めよ予の斯く言ふは決して維新前大政返上の時代を以て明治以後の時代よりも偉大なりと爲すが爲には非ざる也予の見る所を以てすれば我邦二千年の歴史に於て最も偉大なる時代は維新後國民の間に人權の思想を勃興したる時にあり大政返上の如きは幕府が有したる政權を朝廷に歸したる政權授受の機にして松方辭して伊藤代るが如きもの、大なりしものに過ぎず而して後藤伯の如き性質の人は以て大政返上の策士たるを得るも自由平等博愛主義の使徒たるに適せざるが故に伯の傳記にして若し傳ふべくんば大政返上迄に重きを置くは當然なりと謂ふのみ) 然りと雖伯は縱便明治の時代に於ては成功せざりしとは言へまた、これ一個風雲の奇兒として死に角政治界に一敵國を形造れるものにして此間に於て何故に伯の手腕は大政返上の當時の如く著しき成功なかりしかの問題は史家の研究すべき興味ある問題なりとすされば傳記の体裁方言ふも史家の當務より言ふも明治年間にして後藤伯の事跡を著しく省略するの謂れなき也然れ共、余が強て君の著に望む所に非ず何となれば筆を下すの初に方つて既に大政返上を以て伯の傳記の頂上となしたれば也君の著に此の如く重に伯の前半生涯を叙するにありとすれば之を評するまさに其目的とする所に就てせざるべからず而して此点に於て君の著に多しとする所は蓋し土佐藩の勤王を論じて容堂公の心事を明にしたるに慶善公の衷情を憐みて之に向つて多大の同情を寄せたる邊にあり君の目的とする所に於ては君の著に多少成功したりと謂はざるべからず余は此点に於て君の『後藤象次郎』を江湖に推薦せんと欲するもの也(かすみ評)

○高知日報

『後藤象次郎』(後藤象次郎) 後藤象次郎は何人ぞ我が邦維新の前後に其の双脚を投せる一偉人也此の偉人や今

を去る事六十壹年前を以て呱呱の聲を高知に擧げ明治三十年八月四日を以て東京に歿す其間幾度か轉遷せる世運に處せる彼れが長生涯の行程多岐多端なる洵に凡人の端倪する能はざるものあり豈傳して後代に遺すに足らずとせんや此の書は主として彼れが維新前に於ける生涯を叙して畧餘す所なきもの考證の詳博にして議論の精達なる而して文章の流麗なる蓋し近刊史乘中見なるに堪わたるもの、一たらん、偉人後藤象次郎を慕ふもの我が縣の先輩として彼れを景仰するものは讀むべし讀まざるべからず(菅捌所東京しば區虎の門外今入町高知堂)

○萬朝報 『後藤象次郎(岩崎英重著) (興雲閣發行) 後藤象次郎たゞ其生前に於て毀譽相半はしたりさはいへ當代の偉人たりしもの傳して之をつたふ著者の勞を謝す

○やまと新聞 『後藤象次郎』 著者は秋月鏡川子とす其の名は餘り是までに聞かざりしが記する所は云ふまでもなく後藤伯の傳なり文章は著者未だ著述に嫻れざるものか頗る金言鳴るものあれば又否にキコチなき所あれど苦心の程は確かに見ゆたり只巻頭の横文字は一の体裁に過ぎず又巻中往々先年さる志士が著はしたる薩長土肥の傷あるは諸書參考の弊なりや巻末伯の就床より遂に鬼録に入りたる葬棺の光景を載せられたるは絶だ可し附録の伯が年譜は景物的に見えて又冗ならず(芝烏森町興雲閣)

○國民新聞 「後藤象次郎(秋月鏡川氏著) (芝烏森町興雲閣) 王政復古の大義を痛論して以て詳疑を排し皇國回天の偉業を毘贊して以て國是を鞏くす膽畧機宜に應じ勳名時流に超ゆは後藤象次郎伯の淪亡を開きたまひ軫悼に勝へずとて下したまひし勅語に非ずや、此書は即ち其人を傳す十五章に分ち先づ土佐藩の真相を後藤に依り始めて揮擲されし本末を説き其幼時の性行を叙し感化の依て來れるを明らかにせん爲に其師吉田東洋の事歴を叙し、勤王黨の消長、長崎行、大政返上、王政復古を順説して明治に於ける行藏に及び、家庭と逸事とに篇を結ぶ、機宜膽畧ある伯の面目を悉したり、文章また明快筆路健なり附するに年譜を以て寸紙數三百五十、面白く益あるは宛に角活人物傳なり(價三十五錢)

○松江日報 『後藤象次郎』(東京芝區烏森町興雲閣發行)三百八十頁の大冊子、目を分つと十五別に年譜を付す一代の巨人藤伯の事績と其家居及逸事を寫して些の遺憾なし文章亦奇警にして流麗紙上躍如たるを覺ふ、藤伯の事績は明治維新の歴史と密接の聯鎖あり本著者力を専らこゝに致し主として事實の記述に力めて其間の消息を闡明せんを期せり故に本書は獨り伯が

獻替報効の事績を知るのみならず亦土佐藩勤王の由來と大勢推移の跡を窺ふに足り巻首に挿む容堂公吉田東洋先生及畧伯遺はの共に史家の珍となすべく勝伯の題字「神機一髮」は以て伯の一生を評し去るの概あり(定價卅五錢)

○北國新報 『後藤象次郎』(秋月鏡川著) 後藤伯は宛に角明治の偉材たりしなり、其成功は多くの詭遇あり、其晩節は頗る操守を失ひしも、維新の革面に於ける先鞭の功名と雄渾にして牢落たる心膽とは共に傳ふるに足るものなくんばあらず此書土佐藩の勤王により後藤伯の出處に及び、明治以後の行事に終れり其間幾多の經營は之を窺ふに於て十分なり、但だ後藤伯若しくは土佐の爲めに説くもの多く天下後世の爲めに後藤伯若しくは土佐を解剖せざりしは遺憾なき能はず

○福島新報 『後藤象次郎』(全一冊) 後藤伯は一代の巨人也其言行筆して傳ふべきもの豈是に止らんや而かも伯が畢生の事業中最も成功あり光榮あるものを究めば大政返上の建白を捧げて今上維新の宏基を翼賛せしにあるか蓋し大政返上の議は土佐藩勤王の本領にして明治聖代の起點也本篇の主として記せんとする所のもの實に此にありと此小引に遠はす全篇を第十五に別ち土佐の勤王より伯が家居逸事等迄詳載し恰かも土佐勤王小史を讀むが如し(發行所東京芝區烏森町二番地興雲閣但し定價は郵税を合して四十一錢)

○信濃毎日新聞 『後藤象次郎』(東京芝區烏森町二興雲閣) 毀譽兼收一ならずと雖も伯の如き蓋し明治年間の一偉人なり、偉人の爲す所國家の弛張興廢に關する少しとせず、此書土佐藩が勤王を唱へてより明治年間に至る後藤象次郎を寫すこと詳密精細殊に著者秋月鏡川氏の筆鋒精練勁邁伯一個の傳記として興味多きと同時に近世史の一面として益する處少からざるべし

○東洋哲學 『後藤象次郎』 秋月鏡川氏が、故正二位伯爵後藤象次郎氏の生涯を叙述したるもの、即是れ此の(後藤象次郎)なり、吾人は茲に伯が詭遇に於て、伯が失操に於て、敢て蛇足を添へざるべし、蓋本書の著者は、豊富なる材料を公平なる識見を以て、能く此等を叙し且評し盡したるを信すればなり、七佐の勤王、やす、吉田東洋、勤王黨の消長、大政返上、王政復古、明治年間に於ける後藤象次郎、皆是れ單に土佐藩勤王の由來と、伯が獻替報効の事蹟とを傳ふるのみの題目ならずして、寧ろ明治維新史中の主要題目たるなり、今その一本の奇贈に接して、之を江湖に紹介すこと云爾、

發行所 東京市芝區烏森町二番地 興雲閣
大賣捌所 京橋區北隆館 神田區東京堂 芝今高知堂 芝露丁酉社
錫屋町 表神保町 入町 月町

玉座及貴族院議長席眞影 便殿及帝國議會篇額全面

美術石版製 實價七錢
上質舶來紙刷 郵稅二錢
額面用 横一尺八寸 立一尺二寸
多數の御注文は割引
什候郵送四枚迄貳錢
以上は小包又は通連
便に托す

正面に燦々たる菊花の御紋章と、爛熳たる櫻花とを織出したる紫二重の天幕を、金總を以て其中央を高く絞り、最上段に玉座あり、其次段に議長席あり、左右に各大臣、政府委員等の席あり、下段に演壇あり、實に美盡き麗極る。

至尊、御し給ふ 便殿前而の、楣間に掲げ奉れる篇額は、有名なる太宰府宮小路康文君の揮毫にして、筆姿雄勁、墨痕淋漓、將さに躍らんとす、是れ貴重なる御坊處柄容易に拜觀し得さる處、特に許可を待て夙に精巧の名ある二見寫眞師に囑し撮影したるを、美術石版に製したるものなり。其氣品の高尚且鮮明なるは、こゝに嗚々贅言を須たざる也。

東京芝區虎の門外今入町廿四番地田中書店

○發行所 高知堂

止五位子爵諏訪忠元、正六位南摩綱紀題辭
文學士渡邊又太郎、渡邊光風、平井頼吉合著

百人一首通解

繪定家卿百人一首を
進む圖(石版彩色)

定價 一金十五錢

郵稅 一金四錢

本書は百人一首を最も平易に解釋したるものなれば誰人とも一讀して歌の眞味を知るを得べし毎歌一々詠者の傳を挿みたるが如きは他に例なきところなり今や再版成る至急購讀あれ

少年俱樂部

毎月二回一日十五日發行
定價一冊六錢十二冊六十
七冊二十四冊一圓三十錢
郵稅一冊一錢宛

作文秘訣

(作文叢書第一編)
定價金十五錢
郵稅金四錢

歷代國文選

(作文叢書第二編)
定價金十五錢
郵稅金四錢

十二ヶ月文範

(作文叢書第四編)
定價金十五錢
郵稅金四錢

記事文範

(作文叢書第五編)
定價金十五錢
郵稅金四錢

學生唱歌

定價金五錢
郵稅金二錢

今や運動會の好時節となりこの時に當りて本書を發行す本書は多年教育に經驗ある今井氏の著にして學生の英氣を養ふには最も適切なり乞ふ續々購讀のれんとす

教育新考物

定價金五錢
郵稅金五厘

東京 元兌發 區 橋 屋町 十四番地 北隆館

美文良材は所謂文語粹金の最も完備せるものにし

國學院雜誌

第四卷第四號目次

●●日本の古語と朝鮮語との比較
●●東西類似の教育法に就きて

◎ 論 說

白鳥庫坦

●●禁秘御抄
●●言語學一斑

◎ 評 釋

關根正直
金澤庄三郎

●●國文枕草紙(つゞき)
●●英文シエークスピア作「マクベス」(承前)

◎ 史 傳

本居豊藏
坪内雄穎

●●野中兼山(完)
●●細井平洲と上杉鷹山公(承前)

◎ 雜 錄

井野邊茂章
櫻木章雄

●●上田萬年先生の語學創見を讀みて

◎ 應 問

三矢重松

●●解義(數十件)

◎ 彙 報

●●國語字書に就きて學者の確信 ●●翻譯意の不振 ●●海の文學 ●●史料編纂の消息 ●●明治音樂會界時言 ●●新刊 ●●加茂真淵 ●●日本文典大綱 ●●北村季吟傳 ●●後藤象二郎 ●●長風萬里等

◎ 詞 林

●●文三篇短歌數十首

發行所 麴町五丁目八番地 飯田町 國學院